



TSUKUBA ACTION PROJECT REPORT

2022年度 活動報告書



目 次

はしがき

アクション / プラン

BLUE ONE BEAT! ～スポーツを通して SDGs をもっと身近に～ (21007A)	1
筑波大吃音会 一ツクスター (21016A)	9
サッカーボールをパスしてみんなと対話しよう！ Pass the soccer ball and interact with everyone! (21017P)	13
多文化共生促進ワークショップーサッカーボールでキャンパス内の見えない壁を壊していこうー Multi-cultural promotion workshop -Kick the soccer balls to break the invisible walls of the campus- (21019P)	18
平砂に憩いの場を！平砂池復興プロジェクト (21020A)	23
羽ペンで書くカリグラフィ (22001A)	27
読書会をしよう！ (22002A)	32
Campus Asia6 秋の音楽祭 ～ Musication night ～ (22002P)	36
人工言語作成プロジェクト～筑波大生の「共通語」を一から作ろう！～ (22003A)	40
筑波大学 TY チャンネル (22003P)	43
サッカーボールをパスしてみんなと対話しよう！ 2nd ステージ Pass the soccer ball and interact with everyone! 2nd Stage (22005P)	46
筑波大吃音会 一ツクスター v2 (22006A)	50
HPV ワクチンプロジェクト (22007A)	54
文系／理系ってなんだろう？～文理選択の“いま”について考える～ (22008P)	59
KickChat FC 主催 ウェビナー 「スポーツ×グローバルの視点で『今』-2023 年-を語り合おう」(22009P)	62
匿名 noteー筑波大学交流ノートー (22012A)	66
人工言語作成プロジェクト 第 2 弾 ～筑波大生の「共通語」を一から作ろう！～ (22013A)	72
ITF フリーマーケット (22016A)	75
世界の食文化に触れてみよう会 (22022A)	80

ボランティア

令和 4 年度茨城県警察大学生サポーター募集について (21009V)	86
Recruitment of interpreter translation support in high school 結城市内の高校で通訳・翻訳サポート (ウルドゥー語等) 募集! (22001V)	88
茨城県のひきこもり支援を盛り上げよう (22002V)	90
つくばサイエンスツアー 工作実験教室と科学館見学のサポートスタッフ募集 (22004V) ...	91
筑波山麓秋祭り2022 矢中の杜「秋の特別公開」イベントスタッフ募集 (22008V)	92
NPO 法人チャリティーサンタつくば支部 ボランティア募集 (22010V)	93
【学習支援ボランティア募集!】 貧しい子どもたちのための無料塾 (21003V)	94
2022年度 実施状況報告	95
編集後記	

※活動報告では、成長度（自分はどのくらい成長できたと感じますか？）と充実度（やりたいことができた充実感がありましたか？）を 5 段階で自己評価している。

※学生の学年は活動報告書提出時のものである。

はしがき

「つくばアクションプロジェクト」(T-ACT)の『活動報告書(2023年11月発行)』をお届けします。本プロジェクトは、2008年度(平成20年度)に「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム(学生支援GP)」に採択されて以来、学生の自主性と社会性の育成を図ることを目標に活動を続けてきました。令和5年度(2023年度)の今年は、16年目に入ったことになります。

本報告書には、T-ACTで実施された企画・活動のうち、昨年度(2022年度)に「活動報告書」が提出されたものが掲載されています。そのうち、T-ACTアクションおよびプランの企画が19件、T-ACTボランティアの活動が7件となっています。一昨年度の活動は、前者が11件、後者が6件でしたので、感染症拡大から3年が経ち、対面の活動が少しずつ戻ってきて、件数が上向きになってきていることがうかがえます。しかしながら、コロナ以前に比べれば、まだまだ低空飛行が続いている状態です。2023年度に入り、感染症の位置づけが5類に変更され、対面での活動が本格的に再開されていますので、今年度以降はT-ACTの企画数も伸びていくことが期待されます。

2022年度の活動の中でとくに目を引くのは、プラン(教職員による企画)の件数が多かったことです。本報告書に7件の報告が掲載されていますが、コロナ禍の影響で本学の構成員(留学生を含む学生、研究員、教員、職員)間の交流が停滞している状況に業を煮やして、なんとかせねばという想いがあったのではないかと推察されます。

報告書全体をみて感じるのは、やはりコロナ禍の影響を大きく受けていたということです。どの企画も感染防止対策に苦慮しており、イベント前2週間の体温測定から始まり、対策チェックリストの作成、対面活動中止の可能性とその場合の対応等々、時間をかけて対策を練ったことがうかがわれ、また、それを参加予定者に伝えるために企画書のかなりのスペースが費やされています。T-ACT推進室としても、対策ガイドラインを定め、アクションについては感染の有無を確認してもらい、結果報告を求めたものもあります。ボランティアも大きな影響を受けています。コロナ禍が続き、感染症対策の徹底が求められる状況で、ボランティア団体が学生を受け入れてよいものかどうか、難しい判断があったものと思われます。実施されたボランティア活動件数は例年と比較すると少なくなっています。学外に出掛けて、地域の方々と交わることを躊躇した学生もいたのではないのでしょうか。

もう1つ感じたのは、今回の報告書に掲載された報告には、力作が多いということです。とりあえず報告を提出しましたというのではなく、自分たちの活動の振り返りをしっかり行い、どんな点でうまくいき、どんな点がうまくいかなかったのか、それが自分にとってどんな経験になったのか、時間をかけて分析し、それを自分の言葉で魅力的に語ってくれています。報告の件数はそれほど多くありませんが、本報告書は、例年以上に内容の濃い1冊になったように感じています。

また、多くの学生さんがT-ACTでの活動を得難い経験と捉えてくれています。「事後アンケートで成果が得られた時のなんとも言葉に表すことのできないあの気持ちは一生忘れることはないと思います(HPVワクチンプロジェクト)。」、「1人では何もできないと再確認したと同時に人の暖かさを知る体験となりました(筑波大吃音会)。」本報告書には、学生さんの、そして教職員の、挑戦の物語がたくさん詰まっています。

本年度も皆様の変わらぬご支援とご助力をお願いいたします。

2023年11月

T-ACT推進室長
加賀 信広

● BLUE ONE BEAT! ～スポーツを通して SDGs をもっと身近に～ (21007A)

T-ACT フランナー 天野 隼太 (人文・文化学群比較文化学類4年)

活動目的

○目的

小学生に、スポーツの体験を通して SDGs のゴール3「すべての人に健康と福祉を」と、ゴール16「平和と公正をすべての人に」を理解し、身近に感じてもらうことを目的とする。ハンディキャップをかけてスポーツを実践することで、子供たちが、自分とは異なる立場（本イベントでは障害者）の人の視点を理解すると共に、障害の垣根を越えて誰もが楽しめるスポーツを考案し実生活に活かしていくことを目指す。

○来歴

2018年に活動した「BLUE ONE BEAT ～可能性を広げる～」では、小中高生を対象として『未来ディスカッション』というイベントを企画した。小中高生が多様な人々と交流し、自分の考えを深めることができるような学びの場を作りたいと考えた。2019年に活動した「BLUE ONE BEAT! 2019」では、茨城県教育委員会主催の「いばらき子ども大学」の事業の一環に携わり、小学校4～6年生を対象として SDGs を学ぶイベントを実施した。活動は筑波大学の SDGs に対する取り組みとして紹介された。(https://www.osi.tsukuba.ac.jp/sdgs/effort/effort-960) 昨年の「BLUE ONE BEAT ～SDGs をもっと身近に～」では、筑波大周辺の5つ小学校にアンケートを行い、子供たちがもつ SDGs への関心、興味を調査した。

○企画名について

BLUE ONE BEAT! の BLUE は「青春」を表し、企画名は「青春時代における胸を高鳴らせるような一つの衝動」の意味合いを持つ。この活動が小学生に SDGs を学んでもらう一つの端緒になることや、小学生だけでなく活動を運営する我々もワクワクするような学びの場を作りたいということを考えてこの企画名にした。副題を「～スポーツを通して SDGs をもっと身近に～」と設定したのは、子供たちが本企画を通して SDGs に関心を持ち、身近なことから実践することで、SDGs の目標を叶えることを目的にしているためである。

具体的な活動計画

1. 活動概要

対象は小学校高学年。「障害のある人の立場になって、みんなが楽しめるスポーツを作ろう!」をテーマにする。イベント内では、①：小学生に、個別の障害に対応したスポーツを二つ紹介し、障害者目線で実践してもらう、②：①で実践したスポーツの要素を組み合わせ、健常者と障害者両者が楽しめるスポーツを開発してもらう、③：②までの活動がどのように SDGs につながっているか議論、発表する。体験型のワークを組み込むことで、双方向的な学びの場を考えている。全体を通して大学生はファシリテーターとして参加する。所要時間は休憩を含めて2時間を想定している。以下にイベントのタイムスケジュールを示す。

2. 開催場所：未定（筑波大周辺の小学校または児童館を想定している）

3. 開催日程：未定（5月から11月中）

4. タイムスケジュール（●は未定）

- ：00～ 冒頭挨拶、概要説明
- ：10～ アイスブレイク
- ：20～ 個別の障害に対応したスポーツの実践①
- ：35～ 個別の障害に対応したスポーツの実践②
- ：50～ 休憩（休み時間）
- ：00～ ①と②を組み合わせたスポーツの開発（グループワーク）、全体に発表
- ：15～ 発表のうち、実践するスポーツをクラスで決め、実際にプレーする
- ：30～ プレーした感想を聞く、SDGs へのつながりを簡単に説明
- ：35～ 動画を見て SDGs の該当のゴールについて学習
- ：40～ 大学生からの問題提起（障害者スポーツについて）、ワークシート記入
- ：50～ 終了、挨拶

5. 活動詳細

<冒頭挨拶>（10分）

- ・今回のイベントの目的と大まかな内容説明、団体紹介を行う

<アイスブレイク>（約10分）

グループに分かれて、アイスブレイクを行う。

競技名：改変型伝言ゲーム（名称は仮）

ルール：10人程度で1グループとする。先頭に出されたテーマを、最後の人に正確かつスピーディーに伝えたチームが勝ちその際カードを引き、それに書かれた条件で次の人に伝言できるようにする。例えば、言葉を使わないといけない場合（ジェスチャー、背中に指で書いてみる）や、相手は目をつぶった状態で伝言を受け取らなければならないなど。

狙い：アイスブレイクをするだけでなく、様々な「伝え方」を学んでもらう。

時間配分：ルール説明（3分）、プレー時間（7分）

必要なもの：A4プリント用紙を切ってカードにする

要素：さまざまな方法で伝える

<個別の障害に対応したスポーツの実践①>（約15分）

個別の障害に対応したスポーツを実践し、異なる立場の人々の視点を理解する。ゲーム終了後は、児童たちを一時集合させ、感想を聞くと共に、そのゲームが、どのような障害のある人でも楽しんでもらうよう設計されたものなのか理解してもらえようように促す。

競技名：改変型ゴールボール（名称は仮）

子どもたちに理解してほしい視点：視覚障害のある人の視点

ルール：コートを二つに分け両隅にゴールを設置する【図1】。1コートに児童10人（事前に決めておく）が入り、5人で1チームとする。

①5人のうち3人は、目隠しをしてゴールの前に立つ。そして残りの2人はゴールの後ろに回る（コート反対側も同様）。先攻後攻を決め、ゲームを始める。

②攻撃をする側は、目隠しをした状態でゴールに向かってボールを投げる。ボールを投げる方向などは、目隠しをしていない2人が指示を出す。ボールは、鈴などが内蔵されたボールを使用することとする。

③守る側は、相手コートから転がってくるボールがゴールに入らないように阻止する。この際、目隠しをしていない2人が指示を出してボールの位置を伝える。ボールがゴールに入ったら得点（1点）。守備がボールをはじく、またはキャッチすれば得点は0とする。

④両チームが攻守両方を行って1セット。時間内に、より多くの得点を取れた方が勝ち。なお、1セット終了後、ローテーションを行い、指示役と目隠しをする役が1人ずつずれて交代する。

狙い：この競技を通して、健常者だけでなく視覚障害のある人でも楽しんでもらえるということを児童たちに理解してもらう。また、目隠しをしてプレーすることで、目が見えない状況下におけるスポーツとの関わり方を体験してもらう。一方で、指示役になった際も、目隠しをしたチームメイトに、瞬時に適切な指示を出すことが求められ、立場が異なる人への配慮・協調性が生まれることを期待している。

時間配分：ルール説明（2分）、プレー時間（8分）、

感想や対象となる障害の種類の説明（5分）

必要な物：目隠し用のアイマスク、音のなるボール、ゴール（コーンがなければパイプかペットボトルと紐で代用）、椅子

要素：目隠した状態でボールを投げる・キャッチする、指示を出しチームで協力する、音で判断する

<個別の障害に対応したスポーツの実践②>（約15分）

個別の障害に対応したスポーツを実践し、異なる立場の人々の視点を理解する。ゲーム終了後は、児童たちを一時集合させ、感想を聞くと共に、そのゲームが、どのような障害のある人でも楽しんでもらうよう設計されたものなのか理解してもらえようように促す。

②改変型カーリング&ボッチャ（名前は仮）

子どもたちに理解してほしい視点：上肢または下肢に障害のある人の視点

ルール：コート中心の床に得点ボードを置く【図2】。1コートに児童10人が入り、5人で1チームとする。

①障害のレベルが書かれたカードを引き、そのカードに書かれた制限のもと行う。例えば、腕の可動域を（1）腕・肘・手首全て使える（2）肘と手首が使える（3）手首のみ使える、などと分ける。

②チーム交互で、得点ボードにボールを投げる、または転がしボールが止まった地点の点数を合計して得点とする。プレー時間終了後に得点が多かった方が勝ち。なお、レベルに合わせて得点を変えるなどの工夫をする。例えば、同じ地点にボールが止まったとして（3）の人は（1）の人より2倍の点数がつくなど。

狙い：この競技をすれば、健常者だけでなく上肢・下肢障害のある人でも楽しんでもらえるということを理解してもらう。上肢・下肢の障害がある人の立場に立ってプレーしてもらうことで、その障害のある状況下における、スポーツとの関わり方を体験してもらう。

時間配分：ルール説明（3分）、プレー時間（7分）、

感想や対象となる障害の種類の説明（5分）

必要な物：床に置く得点ボード（中心、ポッチャの白いやつ）ポッチャのボール、いす（車いす）、A4プリント用紙を切ってカードにする

要素：ボールを転がす投げる、得点ボード、力加減の調整

得点ボードを用意できない場合、コートの中に目印を置き、近いものから得点を大きくするという方式も検討している

<①と②を組み合わせたスポーツの開発（グループワーク）、全体に発表>（15分）

①で得た視点（視覚障害のある人の立場）と②で得た視点（上肢・下肢の障害のある人の立場）を組み合わせ、健常者を含めた全ての人が楽しめるスポーツを、児童に開発してもらう。考える際は、ゲームを行っていたグループ（10人程度）単位で行ってもらう。以下に児童が開発する可能性のあるスポーツを2つ挙げる。

組み合わせたスポーツ案①

競技名：改変型ポッチャⅡ（名称は仮）

ルール：＜個別の障害に対応したスポーツの実践②＞と同じ。視覚障害のある人でも楽しめるように、ルールを付け足す。目隠した状態でポッチャをやってみる。その際に指示役の生徒は、ブラインドゴルフの介添え人と同じように、得点圏までの距離や方角を正確に教えられるようにする。

使用した要素：目隠した状態でボールを投げる・キャッチする ボールを転がす投げる、

得点ボード、力加減の調整

組み合わせたスポーツ案②

競技名：改変型伝言ゲームⅡ（名称は仮）

ルール：アイズブレイクと同じ。それぞれの障害に応じて伝え方を変えながら進めていく。視覚障害のある人の場合は介添え人と共に走る。上肢・下肢の障害の人は、車いす（あれば）で移動してみるなど

使用した要素：伝える、障害のタイプによって臨機応変に対応する

<発表のうち、実践するスポーツをクラスで決め、実際にプレーする>（約15分）

発表後、三つのスポーツ案の中から一つを選ぶ。選び方は挙手で行い、多数決で決定する。決定後は、また各コートに10人ずつ入ってもらいゲームを行う。

<プレーした感想を聞く、SDGsへのつながりを簡単に説明>（約5分）

プレー終了後、児童2～3人にゲームの感想を聞く。

児童の感想の内容を取り入れながら、「障害のある人の立場になって、全ての人が楽しめるスポーツ」を開発することが、SDGsのゴール達成につながることに導く。

<動画を見てSDGsの該当のゴールについて学習>（約5分）

そもそもSDGsのゴール3、ゴール16とはどのようなものなのか。ビデオを通じて、理解してもらう。文字化してワークシートに記入することも考えている。視聴するビデオのリンクを以下に添付する。

ゴール3

<https://www.youtube.com/watch?v=drce2K2oyhc>

ゴール16

<https://www.youtube.com/watch?v=0emmQsgoUiA>

※ただし、上記の動画の場合、小学生にとって少し内容が難しいことや今回のテーマとそれらの内容が多いことから、弊団体でスライドないしフリップを作ることも検討する

<大学生からの問題提起（障害者スポーツについて）、ワークシート記入>（約10分）

障害者スポーツについて大学生から問題提起を行う。スポーツ庁が2017年に行った「障害者のスポーツ参加促進に関する調査研究報告」によると、週1日以上何らかのスポーツ・レクリエーションを実施していた割合は、健常者が51.5%に対して、障害者は20.8%にとどまる。スポーツを行わない理由では、体力や金銭的な理由（①一緒にやってくれる仲間がいない、②施設が使いづらい、③競技自体がその障害を持った人専用で作られてしまっている）などが挙げられる。また、最も多かった理由が「特になし」という回答だった。これはきっかけがないだけで、場所や機会さえあれば障害者がスポーツに親しむことができる可能性があるということを示唆している。今回の授業を通して、児童たちは障害者も健常者も共に楽しめる競技を開発した。それは障害者の健康維持に貢献できるだけでなく、差別をなくすという点では実はSDGsのゴール16番にもつながる可能性を秘めている」などのようなことを伝えたい。

各コートで、適宜児童に質問しながら進めていく形を考えている。

6. 実施体制

筑波大学の学生3人が運営を行う。非営利で活動を行う。

7. 備考

イベントにファシリテーターとして参加する大学生（筑波大生）はファシリテーションなどに関する文献を読み、グループワークの練習を重ね、小学生が傷つくことなく楽しめるプログラムを目指す。小学生と関わるにあたって、倫理面の問題には特に気を付ける。

コロナウイルスに対する対策は徹底する（「10. コロナ対策について」を参照）。コロナウイルスの影響でイベントの中止が求められた場合、また、イベントの実施が困難であると判断した場合は直ちに中止する。

8. 具体的なスケジュール

5月29日、土浦市の県南生涯学習センターでプレイベントを行う。

5～11月 プレイベントでの成果・反省を活かしてイベントを行う。

活動場所は小学校または、放課後の学童・児童館で行う。

9. 定期ミーティング

活動場所：各自宅

活動時間：毎週土曜日09:00～11:00

活動方法：zoomを利用しオンライン上で行う

活動内容：活動の進捗状況の確認や、今後進めていく活動について議論する

10. コロナ対策について

イベントはコロナウイルス感染拡大防止に最大限つとめながら対面で行う。

そのために、「筑波大学課外活動における団体活動開始ガイドライン」、「T-ACT 新型コロナウイルス感染対策チェックリスト」を参考にして、以下の感染対策を徹底する。

<開催前>

①「T-ACT 新型コロナウイルス感染対策チェックリスト」をT-ACT推進室に提出する。

②プランナーとオーガナイザーはイベント前2週間の体温測定を行い、体調の記録をする。また、健康管理担当者を定め、その記録をプランナーと健康管理担当者が責任をもって管理する。

③健康管理担当者は、イベント開始前日12:00までに体調の記録の確認を行い、メールにてパートナー及びT-ACTフォーラムに報告する

④プランナー・オーガナイザーに感染の疑いがある場合は、その時点で活動を停止する。参加者は事前に登録した者のみとし、参加者には以下の項目を周知しておく。

➤状況によっては参加をやめさせること

➤活動中、マスクもしくはフェイスシールドを着用すること

➤開催前2週間に発熱、体調不良（風邪症状や息苦しさなど）の症状がないこと

<当日>

①当日および開催前2週間の発熱、体調不良（風邪症状や息苦しさなど）の症状の有無を確認すること

②活動履歴管理者を定め、日付、場所、時間（時～時）、参加者氏名、手で触れることの出来る距離で15分以上の接触があったもの（学外者を含む）に関する情報を記録し、保管すること

③マスクもしくはフェイスシールド着用を徹底する → イベントでは、体を動かすため、着用できない場合には、別の対策を講じる

④来場時やイベントの前後で消毒を徹底する → 消毒液の準備が困難な場合には、手洗いを徹底する

⑤ソーシャルディスタンス（2m程度）を保ちイベントを行う。

⑥十分な換気（常時換気が望ましいが、難しい場合の目安として30分1回の換気）を行う。

⑦飲食や大声を出す参加者がいたら注意を促す。

⑧参加者の名簿を作成、管理する。

⑨使用物品は、イベントの区切り区切りで消毒する。

⑩イベントを行う小学校が定めるガイドラインに沿って行う。

⑪イベント終了後は、使用したカメラ等機材の消毒を徹底する。

<開催後>

以下の内容について、T-ACT推進室に報告を行う

①イベント終了の報告をすること

②イベント終了後2週間の時点で参加者にその同居者を含めた感染の有無の確認を行うこと（濃厚接触者と判断された場合も確認する）→ 結果については、プランナーもしくは登録団体からT-ACT推進室に連絡すること

<活動を通じて感染が疑われるものが発生した場合>

活動を通じて感染が疑われる者が発生した場合について、以下の対応が必要であること

（１）参加者が、以下の項目に該当した場合、「新型コロナウイルス感染が疑われる場合の本人の行動フロー」に従って行動する。

- 相談、受診の目安に該当する体調不良の症状がある場合
- 濃厚接触者に指定された場合
- 同居者がPCR検査を受けることになった場合
- 新型コロナウイルス感染者との接触があったことが判明した場合

（２）上記に該当する参加者は、プランナーへ、感染の疑いがある旨の報告をする。

（３）報告を受けたプランナーは、発生状況をパートナー及びT-ACT推進室に報告するとともに、団体活動を停止すること。

活動場所

オンライン（Zoom等）

活動期間

2022/05/01～2022/11/01

対象

学生・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：工藤和哉（生命環境学群生物資源学類4年）、諸戸雄一（人文・文化学群比較文化学類4年）、林遥都（令和4年度人文・文化学群人文学類卒業）

P：大林太朗助教（体育系）、山口拓助教（体育系）



活動報告

実際の活動内容

「障害のある人の立場になって、みんなが楽しめるスポーツを作ろう!」をテーマにイベントを開催した。イベントは、茨城県県南生涯学習センターで3回、吾妻西児童館・吾妻東児童館でそれぞれ1回ずつの計5回実施。イベントにもよるが、未就学児から小学6年生までの幅広い層の子どもたちに参加してもらった。

イベントの内容については、概ね企画書通りに実施することができた。約1時間という制限の中で、主に三つのステップ(①:小学生に、個別の障害に対応したスポーツを二つ紹介し、障害者目線で実践してもらう、②:①で実践したスポーツの要素を組み合わせ、健常者と障害者両者が楽しめるスポーツを開発してもらう、③:②までの活動がどのようにSDGsにつながっているか議論、発表する)を実践した。体験型のワークを組み込むことで、双方向的な学びの場を創出できたと考えている。ステップ③については、子どもたちにSDGsを伝える際に動画ではなくスライドを使って説明したこと、そして時間の制約の関係で大学生からの問題提起を省略したことなど、変更を行った。

運営に関しては、当初大学生(プランナーとオーガナイザー)のみで行う計画だったが、同センターでの実施の際に限り地域の高校生がボランティアとして参加してくれた。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか?⇒90%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

障害者スポーツの実践を通して、ただ楽しむだけではなくSDGsとどのように関連づけさせて伝えるかが一番の課題だった。当初、企画書時点では対象を小学校3～6年生とし、小学校中学年・高学年を想定した教育プログラム(SDGsの解説、大学生から問題提起など)を設計していた。しかし、実際にイベントを開催すると参加者の多くは未就学児から小学校2年生の児童が多く、設計し直す必要があった。児童館の現状(低学年中心であり、中・高学年の児童の多くは習い事に行ってしまうこと。また、日本語の聞き取りが難しい外国圏からきた子供もいるということ)をよく把握しきれていなかったことが原因だ。

各回によってその比率は異なるものの、幅広い年齢の児童たちが一度に参加するため、理解の差をどのように解消していくかには常に苦労した。そのため、説明だけで時間を費やしてしまい、スポーツの開発まで到達できなかった時があった(子供たちの多くが未就学児で、「開発」が困難と判断した場合もある)。時間配分が難しく、制約の中でSDGs教育に関しても足早に終わらせてしまうこともあった。ただの遊びになってしまうと活動の意味があまりなくなってしまうため、SDGs教育に関しては試行錯誤の連続だった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

イベント実施ごとに課題を見つけ、その都度反省会を開いて次につなげてきた。当初は企画書通りに進めることを心掛けていたが、それだと予想外の時に臨機応変に対応できないことを強く学んだ。そのため、参加児童の学年構成に応じて2パターンのプログラム(一つは企画書のプログラム。もう一つは低学年が多い時で、「障害者の視点に立って考えてもらう事」に力点を置き、SDGs教育を無理にねじ込まないようにした)を作成し、どんな年齢層になっても柔軟に対応できるようにした。また、使用する言葉については言い換えや具体例の提示、あるいは図式化したもので説明するなど、理解を深めてもらうようにした。

スポーツの実施に関しても改善を重ねた。ただの遊びではなく、「そのスポーツ自体が対象とする障害の種別は何なのか」「そのスポーツがあることで、障害のある方がどのように楽しめるのか」などを子供たちに分かってもらえなければ、イベント開催の意義がなくなってしまうからだ。解決策をメンバー間で話し合い、児童たちに上記の理解をしてもらえるよう、改善策を考えた。

それが児童たちの理解力強化を目指した「要素カード」だ。要素カードは、「目が見えない」「足が動かない」「耳が聞こえない」などの障害の種別であったり、「ボールを転がす」「指示する人がいる」などのゲームの動作だったり、プレイしたスポーツを要素ごとに分解し、図式化したものだ。これは、児童たちにとって、そのスポーツが「どんな障害の人たちを対象としたもの」で「どんな動作を組み合わせで作ったもの」なのかを考え、理解する上で補助的役割を示すことができた。また、新しいスポーツを開発する際も要素カードを使用し、整理しながら考えることができていたと思う。

SDGs教育に関しては子供たちに集中して理解してもらえるように工夫した。例えば、「伝える」媒体について、当初投影機を使ってスクリーンにスライドを写していたが、それを紙に変えた。これは一見アナログ感があるが、変更には理由がある。投影機を使用すると、子供たちがSDGsよりも投影機そのものに興味を持ってしまいうまく進まなかったことがあった。スライドを紙に印刷し、それを紙芝居のように見せながら教えることでより内容に集中してもらえたと思う。

また、使用したスライドの内容も変更した。当初は二つの構成(①:SDGsそのものの説明、②:イベントで実施した内容と関連するSDGsのゴールの説明)だったが、新たに「今回の学びをどのように日常生活に生かしてほしいか」などを盛り込んだ。理由としては、②だけだと理解だけで終わってしまい、実践に生かせないと

考えたからだ。実際、イベント終了間際に、児童たちがアイマスク（改編型ゴールボールで使ったもの）の使用について「アイマスクつけて歩道でどこまで歩けるかゲームしてもいいか」と聞いてきた。その言葉を聞いて、「障害のある人たちの視点に立つ」という、イベントのテーマを教えきれず表面的なものになってしまったと感じた。そこで、「そういうゲームをしていたら、実際に目の見えない人はどう思うかな？」と聞くと「それは嫌だと思う」「目隠しすると歩きづらいことが分かったからこそ、次に目が見えない人がいたら補助したい」などの回答が返って来た。このようなやり取りをしてこそ、イベント実施の価値があると感じた。よって「イベントが終わっても障害のある人の視点を日々想像してほしい」というメッセージを、スライドに盛り込むことにした。すると、「目が見えないと字が書けないし、読めない。だから点字があるのか」と納得する児童がいた。スライドを修正して良かったと思え、このような思考を土台としてSDGsのゴール実現があると強く感じた。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

「実施中に困ったこと」でも書いた通り、困難の連続だった。だがその度にメンバーを協力して乗り越えてきたため、日々成長の連続だったとも思える。また、児童たちが楽しんでスポーツを実践してくれたことや、実践後にSDGsをしっかり学び理解してくれたことはとても嬉しく、やりがいを感じた。

活動を通じて学んだことは、児童たちの方が大学生や大人たちよりもSDGsについてよく理解しているということだ。SDGs教育の時間では、「これ学校でならった」と率先して答えてくれる児童が多かった。この体験を通して学校教育の成果を感じ将来が頼もしく思えた一方、これは問題だとも思った。達成期限まであと7年を迎えた今、大人たちに知識や危機感があまりないのではないかと感じるからだ。大人たちは今すぐ、行動を起こす必要があると思う。

また、活動と通じてさまざまな出会いがあった。企画書の作成からイベントの実施までサポートしていただいたT-ACTの皆様やパートナーの大林太朗先生はもちろん、プログラムのご指導や備品の貸し出しなどご協力くださった山口拓先生、イベント実施を承諾していただいた生涯学習センターの職員の皆様や吾妻東・吾妻西児童館の皆様には大変お世話になった。多くの人が、本活動に関して理解を示してくださったおかげで計5回も実施できたと考えている。改めて深くお礼申し上げます。

県南生涯学習センターの皆様に関しては、イベントのご縁で、同センター主催の別のプログラムにもお誘いいただき、現在は県南地域のさまざまな高校の生徒たちと地域課題解決に向けた取り組みにメンバー全員で参画している。高校生たちから新しい視点を得ることが多々あり、学びも多い。本活動が、このような形で波及していくとは思ってもよらず、大変驚くと同時に出会いの大切さを実感している。

参加者への影響

活動を通して、「スポーツとSDGsを関連させてどう分かりやすく伝えるか」が最大のテーマであったと思う。毎週のミーティングではメンバー同士でアイデアを出し合い、イベントの実施後は反省会を行うことで次の機会につなげてきた。プランナーとしては、メンバー一同大きく成長できたと考える。以下に、オーガナイザー2人に聞いた「活動を通じて成長したこと」を示す。

①工藤和哉（生物資源学類3年）

私はイベントの開催に携わるのが初めてだったが、そんな素人の自分がイベントを開催する上で重要だと思ったのは、あらゆる事態を想定し、予測することだ。どんなに可能性の低いことでも想定しておけば、実際それが起きた場合に、あまり動じずに対処することができる。

しかし、イベントでは、どうしても予測しきれなかったことが起きてしまう。そのようなことが起きた場合に、臨機応変に対応し、反省して次のイベント開催に生かしてきた。そのおかげで、23年の3月には、ある程度納得のいく完成度でイベントを開催することができた。このように、このプロジェクトを通して、PDCAサイクルを実際に回して活動するという非常に貴重な体験ができ、対応力・反省力・予測力を養うことができた。

②諸戸雄一（比較文化学類3年）

私はこの活動を通して、PDCAサイクルを回す能力と、ファシリテーション力が身についた。PDCAサイクルについて、定期的に開催している障害者スポーツイベントでは、どのようにしたら子どもたちのSDGs理解につながるかを念頭におき、回を重ねるごとに内容の改良をしている。現状の出来で満足せず、試行錯誤した経験はこの活動以外の別の領域においても役立っている。また、ファシリテーション力は、県南生涯学習センターと共同で行なっている地域の課題解決ワークにて、高校生の意見を取りまとめている中で身につけることができた。様々な課題意識を持った人々の意見を取り持つ経験は他ではできない貴重な体験であると実感している。

未来のプランナーに伝えたいことがあれば自由はどうぞ

前述の通り、この活動を通してさまざまな出会いがあった。多くの人に支えられ、信頼関係を築くことができたからこそイベントを実施することができ、別の活動のお誘いもいただいた。だからこそ、これから企画を考えているプランナーのみなさんには、出会いを大切にしながら、活動に励み、思いっきり楽しんでほしい。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

T-ACT を利用させていただいたことで、活動を円滑に進めることができた。備品の貸し出しや資料の印刷など、快く快諾してくださったおかげで予算をおさえつつ、質の高いイベントを実施することができたと思う。また、イベント終了後にメンバー 1 人が新型コロナウイルスに感染した際は、対応フローであったり先方への連絡であったりと、丁寧に対応していただいた。ガイドラインはあるものの、やはり学生だけだと不安があった中で、T-ACT の先生方の温かいご指導により安心して活動することができた。

現在、我々はメンバー 3 人で活動している。全員 4 年生であり、活動を続けられるとしても残り 1 年を切った。前述した通り、活動を通して多くのコネクションを築くことができたので、これをなんとか後世の筑波大生につなぎたいと強く願っている（団体を存続させることが全てではないが）。広報するにもメンバーだけでは限界があるので、残り 1 年は T-ACT の先生方と協力しながら、後継してくれる方を探したい。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒4



筑波大吃音会 一ツクスター (21016A)

T-ACT プランナー 青木 瑞樹 (人間総合科学学術院障害科学学位プログラム 博士前期課程2年)

活動目的

本活動は吃音に関心のある方のための「吃音・流暢性障害研究会」と当事者のためのセルフヘルプという2つの側面の活動を行う場です。筑波大学の学生や学外の方に参加いただける会です。吃音のある人の交流及び吃音に関心のある方が当事者とともに知識を深め多様な学びを行うことを目的としています。

・1つ目の側面【吃音・流暢性障害研究会】

本企画を通して、勉強会のための「吃音・流暢性障害研究会」を創設します。月1回行われる「吃音・流暢性障害研究会」では、筑波大学人間系障害科学域宮本昌子研究室の宮本昌子先生にご参加いただき、専門的内容から吃音関連の話題など幅広いトピックを扱い意見交換を行います。吃音のない方も参加いただけるため当事者とともに知識や考えを深めることが可能です。吃音に興味のある方、吃音のあるお子さんの親、支援者の方などの参加を想定しています。

・2つ目の側面【吃音セルフヘルプ・グループ】

セルフヘルプの活動では、悩みの共有・意見交換・テーマに沿ったディスカッション・発表練習・レクリエーション・演劇・映画鑑賞など各会によって当事者セルフヘルプ・グループならではの“当事者目線で考える”様々な活動を行います。吃音当事者の方ならどなたでも参加していただけます。

【企画立案の背景】

本企画のプランナーは筑波大学人間系障害科学域宮本昌子研究室に所属する学生です。宮本昌子研究室は音声言語障害の研究・臨床を行う国内で数少ない研究室の1つです。吃音は人口の1%に存在するといわれ、目に見えない障害のため他者に理解されにくく様々な困難を抱えます。吃音の研究や臨床を行う上で豊かな環境であると言える本大学を拠点に吃音当事者やその支援者等の交流・勉強の場を設けたいと考えたことが本企画を行う1番の動機です。吃音・流暢性障害研究会では宮本昌子先生のご協力をいただき研究会を開催でき、非常に有意義な活動になると考えています。

具体的な活動計画

・「吃音・流暢性障害研究会」：参加費：無料

月1回（原則毎月第2週火曜日）、18時15分～20時15分。

筑波大学人間系宮本昌子先生・宮本研究室の所属学生と学内・学外参加希望者で吃音の専門的知識の習得、吃音トピックに関するディスカッション、交流を行います。

・「吃音セルフヘルプ・グループ」：参加費：無料

月1回（原則毎月第4週水曜日）、18時15分～20時15分。

悩みの共有・意見交換・テーマに沿ったディスカッション・発表練習・レクリエーション・演劇・映画鑑賞など各会によって様々な活動を行います。実施方法は、対面とオンラインのハイブリッドで行います。吃音当事者であればどなたでも参加していただけます。

活動場所

・「吃音・流暢性障害研究会」

人間系学系棟 B225（学外者は当面の間オンライン参加のみ）

・「吃音セルフヘルプ・グループ」

オンラインと対面を活用し、対面の際は参加人数に応じて、2A棟の教室を確保します（2A303 あるいは2A304）。教室については人間支援室と交渉済みです。参加希望数が教室の定員を越えた場合は、オンラインでの参加を勧めます。

活動期間

2021/12/14～2022/03/31

対象

学生・教職員・学外者



T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：遠藤優（医学群医学類 4 年）

P：宮本昌子（人間系）

備考**【感染防止対策】**

- ・ 吃音・流暢性障害研究会及びセルフヘルプ活動は対面での実施も行うため、実施については茨城県及びつくば市、筑波大学の要請等を確認し、大学の感染症対策に応じて判断する。
- ・ 対面の活動を中止する要請が出た場合、企画は完全オンライン実施とする。
- ・ 感染防止策が徹底されているかについては、パートナー教員および T-ACT に確認する。
- ・ 企画を実施するかの判断については、開催 1 週間前に T-ACT と相談して決定する。
- ・ 前日に体調の記録確認をパートナー教員及び T-ACT に報告する。体調不良がある場合は活動を停止する。
- ・ 参加者は過去 2 週間以上の健康観察記録を付ける。当日は担当者が会場で記録を回収、管理する（いつでも提出できる状態にしておく）。
- ・ 活動の際は出入り、物品を触る前などで随時手指の消毒を行う。また、ハンドソープも用意しておき、手洗いをしてもらう。
- ・ 各自マスクを着用する。
- ・ 部屋の換気を行い、密集・密閉を避け、飲食を禁止する。大声を出して会話しないようにする。
- ・ 家を出る前に検温してもらい、体調不良者は出席しない。
- ・ 参加者が座る位置を、ソーシャルディスタンス (2m) を考慮して予め設定しておく。
- ・ 活動の以後 2 週間は体調に憂慮し、参加者に問題があれば報告してもらう。
- ・ 活動形態、場所、参加者、人数、内容をまとめた活動記録を作成し、担当者が管理する。
- ・ その他筑波大学および T-ACT の設定した感染防止対策ガイドラインに従う。

【保険の加入について】

- ・ つくば市社会福祉協議会のボランティア活動及びつくば市ボランティア行事保険に申請中です。

【その他の規則について】

- ・ セルフヘルプの活動では発言やハラスメントに関すること等の参加マニュアルを作成し、参加規則とする。
- ・ トラブル防止のため参加時に企画運営者のみが閲覧可能な参加者名簿に参加者の名前を書いてもらう。会への参加は匿名でもよい。
- ・ 参加者の個人情報及びプライバシーの管理について、参加者情報は本企画運営に携わるもののみが閲覧し、その管理を徹底する。また、本企画内で取り扱った具体的事例や内容を本企画外で開示することの無いよう上記の参加者マニュアルに記載する。

【本企画の広報について】

- ・ T-ACT の許可を得たポスター・チラシの学内に掲示する。また、SNS（twitter・facebook）を活用した広報も行う。

活動報告

実際の活動内容

本会では、主に 2 つの活動を行いました。①吃音・流暢性研究会（以下、勉強会）、②吃音セルフヘルプ・グループの活動です。それぞれの実際に活動した内容について下記に報告します。

①吃音・流暢性研究会（勉強会）

月に 1 回、計 5 回の会を開催しました。この会は筑波大学人間系の宮本昌子先生と研究室の所属学生及び学外参加者（吃音当事者・保護者・支援者・その他）が参加する会で、会の主な内容は、吃音の基礎的に知識に関する講義形式の勉強会と、架空の事例について支援や関わりを考えるディスカッションです。全てオンラインで実施し、5 回の開催で計 104 名（1 回あたり平均 21 名）の参加者の方に参加いただきました。

②吃音セルフヘルプ・グループ

月に 1 回、計 6 回の会を開催しました。この会の参加者は学内・学外を問わず吃音当事者が集い、当事者同士の交流会をする会です。会では、悩みや情報の共有・カードゲームなどのレクリエーションを用いた交流会、マインドフルネスの体験などの活動を行いました。全 6 回のうち 3 回は対面・オンラインのハイブリッド形式（対面参加者は学内者に限る）、6 回のうち 3 回はオンライン形式で行いました。6 回の実施で 56 名（1 回あたり平均 9.3 人）の参加者の方に参加いただきました。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか？⇒90%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

- ・②吃音セルフヘルプ・グループを対面・オンラインのハイブリッド形式で実施する際の機材の問題（カメラ・モニター・マイク）
- ・外部の方からの問い合わせ

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

- ・ハイブリッド形式での実施は初めてだったので、最初の方は自身の手持ちの機材を使用していましたが、対面実施会場とオンライン会場のやりとり（特にマイクの聞こえ具合）がうまくいかないことがあった。T-ACTにて必要備品の貸し出しを受けたが、対応している機材がなく、その点では解決できなかった。
- ・外部の方（実際には会に参加されたことも、面識もない）からの問い合わせが、T-ACT 及びパートナーの先生宛に複数あった。T-ACTの方が対応をして下さったので会の実施や運営に時に問題はなかったが、初めてのことであったので、会の運営一同、驚いた。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

私にとってこの活動は、代表として会を運営したり、実施したりする初めての経験でした。会の創設当初は会の運営や実施に自信がなく、「とりあえず半年頑張ってみよう」という思いで会を行っていたことを覚えています。特に勉強会では、学外の方が大勢参加され、中には専門職の方もいたので、会の実施は非常に緊張するものでした。1回の会の実施には、当日の計画はもちろん、会の広報、参加申し込み・キャンセル対応、オンライン参加 URL の配信、参加者名簿の作成、問い合わせ対応などやるべきことがたくさんありますが、当初私とオーガナイザーの2名で行っていました。非常に大変でした。

会の参加者が増えていき、また運営が安定してきたのは、活動開始後2,3ヶ月後でした。それは運営に携わっていただけの方が増えてきた時期と一致します。嬉しいことに学内・学外から会の運営に携わっていただけの方が複数おり、上記の仕事に担当を決めて行えるようになりました。このことは私の心の安定にもつながりました。自身の仕事量が減り、会の内容や全体的な運営を考えることに力を注げるようになったのです。

私がこの活動を通して感じたことや変化としては、仲間の大切さや協力の素晴らしさです。幸いこの活動の計画時から協力してくれる仲間がいたことや、その後も仲間が増えたことこそがこの会を継続的に、満足度の高い会にすることにつながったと思います。1人では何もできないと再確認したと同時に人の暖かさを知る体験となりました。

上記に合わせて、今後についても考えています。この活動の運営は現在非常に安定していますし、定着されている参加者もおられますので今後も継続していきたいと考えています。一方で、運営の主体は学生のため永久に現在のメンバーが運営に携わることは難しいと思います。したがって、早期から会自体を後輩に引き継いだり、分担して運営を引き継いでいく準備や実施マニュアルを作ったりする必要があると考えています。学内の参加者のみならず、学外の方が参加されていることや、吃音啓発活動にも一定の効果があるこの会は今後長く続けていくべき活動であると私自身は思っています。

最後に SNS に凄さについて感じたことを記します。この活動の広報の大部分は SNS を通して行ったものでしたが、その拡散力に非常に驚きました。参加者の中には、「Twitter を通してこの活動を知り、また自分が吃音であったことを知った」とおっしゃる人もいました。新聞や TV で取り上げられることはもちろん拡散力があると思いますが、現代は SNS も同様に拡散力・影響力があることに加え、無料で気軽にできることから、今回、有効に活用できたと思いますし、今後 SNS での積極的な広報活動を行いたいと思いました。

参加者への影響

①勉強会、②吃音セルフヘルプ・グループの両方において参加者の方々には有益な会になったのではないかと考えます。特に参加者の多くはリポートしていただいております、会の実施回数が増すにつれ常連参加者として参加者が固定化されていることを感じました。会実施後に行う匿名の会の満足度アンケートでも高評価をいただいております、参加者の満足度の高い会を実施できていたと自負しています。この背景としては、①勉強会に関しては、宮本昌子先生や宮本研究室のゼミ生が参加されていたことで会の専門性が大幅に上がり、普段あまり触れることのない最新の知見を踏まえながら勉強会ができたことが参加者の満足度の上昇に起因したと考えます。②吃音セルフヘルプ・グループの参加者満足度が高かった背景としては、会の参加に際する配慮やルールを明確に定めたことではないかと考えます。この会の参加者は全員吃音当事者であり、会で扱う内容は心理的負担が高いものがあつたり、拒否感や回避反応を示す参加者がいると想定していました。したがって会の実施前に安心できる環境づくりや、配慮、ルールを明確に示すことを心がけました。これらのことも参加者満足度が高かった要因になっているのではないかと考えます。

加えて、この会に初期から参加されている参加者の方で、会の運営に携わりたいと言ってくれる方がおり、その方にも会の1部を担当していただいたり、吃音当事者体験談を発表していただいたりしました。彼は当初、吃

音を受け入れた初期の段階で葛藤を抱えていた様子でしたが、会の運営に携わり活動していく中で吃音のある自己像に変化があったと話しています。

また、この会の活動は一定の社会的影響（吃音啓発の効果）があったのではないかと考えます。この会の広報は主に SNS（Twitter）を利用した広報活動を行っていましたが、Twitter アカウントのフォロワーは1800人を超え、会の紹介ツイートは50リツイート、150を超えるいいねをいただきました。また、これをきっかけにつくば市のローカルラジオ局「つくばラジオ」の番組に出演させていただいたり、その他にもメディアの出演依頼を複数いただいています。このように、会の実施のみではなく、会の存在や活動そのものが吃音の啓発に一定の効果を見出したと考えています。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

- ・活動実施前の仲間集めや協力者を募ることは非常に重要です。むしろここが最も大切かもしれません。
- ・SNS を通した広報は積極的に行ったほうがいいです。ポスターを学内に貼ったり、配布したりできることが T-ACT で活動をできる特権かと思うので、積極的に行ったほうがいいかもしれません。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

- ・広報活動を行うとき「筑波大学 T-ACT」と言ったように名前を使うことができたことは、会や活動の信頼性という面で効果があったかと思います。
- ・ポスターやチラシの印刷及び学内掲示・配布ができることも良かったです。
- ・T-ACT から貸していただける備品がもう少し充実しているといいなと思いました。私たちの活動では特にオンラインと対面のハイブリッドでの実施がありましたので、対面会場の音声をオンライン上に input できる機材（マイク）があればいいなと思いました（お借りできるマイクは拡声器のような output のマイクでした）。コロナ禍で100%対面実施とはなりづらい現状を踏まえるとオンラインの実施等で使用する機材も必要かと感じました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5



● サッカーボールをパスしてみんなと対話しよう！ Pass the soccer ball and interact with everyone! (21017P)

T-ACT プランナー 北條 英次（体育センター）

活動目的

昨年来のコロナ禍の影響で、本学も教育研究活動が制限されてきました。その影響で今もって本学の構成員（学生、研究員、教職員）の交流が停滞しています。特にここ2年の間学外から入学した大学院生や新しく採用になった研究員、教員はお互いに知り合うきっかけがほとんどなかったと思います。

またコロナ禍以前から、海外から来た留学生や外国人研究者と日本人が交流する機会が圧倒的に少ないのが現実です。

そこで本企画はスポーツ、特に世界で一番人気があるといわれる「サッカー」を通して、異なるバックグラウンドのメンバーが、研究室・研究分野や職域の垣根を超え、異文化・異業種の交流を促進し、本学における異文化理解の深化と多文化共生の実現を進めるためのコミュニティを形成することを目的とします。

さらに様々な立場のメンバー同士で本学の改善点を議論し、本企画に参加する教職員が各々の部署に持ち帰ることで、より良い理想的な筑波大学の実現のために意見を反映し行動することを期待します。

ボールをパスするときは受け取る相手に「意思」を込めて送るといわれます。ボールをパスしあうということは「意思の交換」、すなわち「対話」です。パスという対話を通してお互いの理解を深めていくことができると考えます。

本企画のプランナーである私、北條英次は以前 Global30プログラムを担当していたこともあり、数年来留学生と日本人学生の交流促進に取り組んでいます。本企画を通して一層の交流が進むことを期待しています。

Due to the effects of the corona disaster since last year, our university has been limited in its educational and research activities. As a result, the interaction among the members of our university (students, researchers, faculty members) has been stagnant. In particular, in the past two years, graduate students from outside the university and newly hired researchers and faculty members have had little opportunity to get to know each other.

Also, even before the Corona disaster, there were far fewer opportunities for Japanese people to interact with international students and researchers from overseas.

Therefore, through sports, especially soccer, which is said to be the most popular sport in the world, we would like to promote cross-cultural and cross-industrial exchanges among members from different backgrounds, transcending the boundaries of laboratories, research fields, and work areas, and to deepen cross-cultural understanding and realize multicultural coexistence in our university.

In addition, we hope that members from various backgrounds will discuss areas for improvement at the University of Tsukuba, and that the faculty members participating in this project will reflect their opinions and take action to realize a better and more ideal University of Tsukuba by taking their ideas back to their respective departments.

It is said that when you pass a ball, you send it with your "Intention" to the person receiving it. Passing the ball to each other is an "Exchange of Intentions," in other words, a "Dialogue". We believe that we can deepen our understanding of each other through the dialogue of passing the ball.

Eiji Hojo, the planner of this project, is a former staff member of the Global 30 program and has been working to promote exchange between international and Japanese students for several years. I am looking forward to further promoting exchanges through this project.

具体的な活動計画

（参加対象者）

学生、研究者、教職員。年齢、性別、国籍、プレー経験を問いません。サッカー好きな人はもちろん、体を動かすことが好きな人、異文化交流が目的の人など多くのみなさまの参加を熱望します。

（活動計画）

本活動は4段階で構成します。そのうち本企画では①と②について行います。③と④については随時企画申請を行う予定です。

①毎週のサッカー練習を通しての異文化・異業種間交流



日時：毎週木曜日または金曜日19時から21時の2時間程度

場所：本学第2 サッカー場

内容：ウォームアップ、パス練習、ゲーム形式等 経験のない方でも問題のない内容です。サッカー経験者がサポートします。

参加費：無料

各自持参するもの：運動のできる服装、サッカーシューズ、飲み物（ボール、感染対策グッズは当方で用意します）

お願い：練習日の2週間前から健康観察記録をつけてください。

② サッカーストーリー発表会（延期します。日時は未定です。）

日時：2022年4月22日（金）18時から2時間程度

場所：グローバルスポーツイノベーション棟（利用申請可能時期到来次第交渉予定）

参加対象：本企画メンバーおよび本企画の活動に興味のある方

参加費：無料

目的：さまざまなバックグラウンドを有するメンバーの今までのサッカーストーリーを発表し合うことで異文化理解を深め、多文化共生の意識を高めることを目的とします。

③ 多文化共生促進ワークショップ

メンバーを中心にワークショップを開催し、様々な立場から、多文化共生を進めるにあたり障壁となっている事例等を挙げ、学生、研究者、教職員にとって理想的な筑波大学にするための改善案を提案します。

④ サッカー交流会

本学のサッカー関係団体の理解を得て大会形式のサッカー交流会を開催し、性別、年齢、国籍を超え、異文化理解を深め多文化共生を促進します

（スケジュール）

2021年12月～2022年6月 ①毎週のサッカー練習を通しての異文化・異業種間交流

2022年3月 ③多文化共生促進ワークショップ

2022年4月 ②サッカーストーリー発表会

2022年6月 ④交流サッカーイベントの開催

（Target participants）

Students, researchers, faculty and staff. All ages, genders, nationalities, and playing experiences are welcome. We are looking forward to the participation of not only soccer lovers, but also people who like to exercise, and people who want to exchange with different cultures.

（Activity Plan）

This activity will consist of four stages, of which this project will focus on (1) and (2). We are planning to apply for projects (3) and (4) as needed.

(1) Cross-cultural and cross-sectoral exchange through weekly soccer practice

Date and time: Every Thursday or Friday from 19:00 to 21:00, about 2 hours

Place: The University's 2nd soccer field

Details: Warm-up, passing practice, game play, etc. No experience necessary.

Participation fee: Free

What to bring: Clothes for exercise, soccer shoes, drinks. (We will provide balls and infection prevention items.)

Please keep the record of your health for two weeks prior to the practice date.

(2) Soccer Story Presentation (It will be postponed)

Date and time: Friday, April 22, 2022 from 6:00 p.m. for about 2 hours (tentative)

Place: Global Sports Innovation Building (tentative)

Participants: Members of this project and those who are interested in the activities of this project

Participation Fee: Free

Objective: To deepen cross-cultural understanding and raise awareness of multicultural conviviality by sharing the soccer stories of members from various backgrounds.

(3) Multiculturalism Promotion Workshop

A workshop will be held with the members of the University of Tsukuba to discuss the barriers to promoting multicultural conviviality from a variety of perspectives, and to make proposals for improvements to make the University of Tsukuba an ideal place for study, research and work.

(4) Soccer Exchange Event

With the understanding of the University's soccer-related organizations, we will hold a soccer exchange event in the form of a tournament to deepen cross-cultural understanding and promote multicultural conviviality, transcending gender, age, and nationality.

(Schedule)

From December 2021 to June 2022: (1) Intercultural and cross-sectoral exchange through weekly soccer practice

March 2022: (3) Multiculturalism promotion workshop

April 22 2022 (Fri): (2) Soccer story presentation(It will be postponed)

June 2022: (4) Holding of exchange soccer events

活動場所

筑波大学第2サッカー場（セキショウフィールド）

University of Tsukuba 2nd soccer field

活動期間

2021/12/14～2022/06/13

対象

学生・教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O: Yuri Lavinias（情報理工学位プログラム）、Christian Ebuka Okoye（スポーツ・オリンピック学学位プログラム）

P: 小井土正亮（体育系）

備考

（スポーツ保険）

本学学生（学群生、大学院生）は学生教育研究災害傷害保険（略称「学研災」）にて補償されます。研究員、教職員については各自 任意のスポーツ保険に加入することを強くお勧めします。

（感染防止対策）

- ・実施については茨城県及びつくば市、筑波大学の要請等を確認し、大学の感染症対策に応じて判断する
対面の活動を中止する要請が出た場合、企画を中止・延期する
- ・感染防止策が徹底されているかについては、パートナー教員および T-ACT に確認する
企画を実施するかの判断については、開催 1 週間前に T-ACT と相談して決定する
- ・前日に体調の記録確認をパートナー教員及び T-ACT に報告する
体調不良がある場合は活動を停止する
- ・参加者は過去 2 週間以上の健康観察記録を付ける
当日は担当者が会場で記録を回収、管理する
（いつでも提出できる状態にしておく）
- ・活動の際は出入りの際、物品を触る前などで随時手指の消毒を行う
また、ハンドソープも用意しておき、手洗いをしてもらう
- ・練習時以外は各自マスクを着用する
- ・発表会の際は部屋の換気を行い、密集・密閉を避け、飲食を禁止する。大声を出して会話しないようにする
- ・家を出る前に検温してもらい、体調不良者は出席しない。
また、事前に申し込みした参加者のみ出席可とする。
- ・参加者が座る位置を、ソーシャルディスタンス (2m) を考慮して予め設定しておく
- ・活動の以後 2 週間は体調に憂慮し、参加者に問題があれば報告してもらう
- ・活動形態、場所、参加者、人数、内容をまとめた活動記録を作成し、担当者が管理する
その他筑波大学および T-ACT の設定した感染防止対策ガイドラインに従う

（Sports Insurance）

University students (undergraduate and graduate students) are covered by the Personal Accident Insurance for Students Pursuing Education and Research (abbreviated "Gakkensai"). It is strongly recommended that researchers and faculty members purchase their own sports insurance.

（Infection prevention measures）

Confirm requests from Ibaraki Prefecture, Tsukuba City, and Tsukuba University, and make decisions according to the university's infection prevention measures. If there is a request to cancel face-to-face activities, cancel or postpone the project.

Confirm with partner teachers and T-ACT to ensure that infection prevention measures have been thoroughly implemented. Consult with T-ACT one week prior to the event to determine if the project

will be implemented.

Report to the partner teacher and T-ACT the day before the event to confirm the physical condition of the participants.

Participants should keep a health record for the past two weeks or more. On the day of the activity, the person in charge will collect and manage the records at the venue.

Disinfect hands as needed before entering, exiting, and touching items during the activity.

Hand soap should be available for hand washing. Wear masks except during practice.

During the presentation, the room should be ventilated, not crowded or sealed, and no eating or drinking should be allowed. Do not talk loudly.

Participants have to check body temperature before leaving home. Only participants who have applied in advance will be allowed to attend.

The position where the participants will sit should be set in advance considering the social distance (2m).

In the first two weeks of the activity, be concerned about the physical condition of the participants and ask them to report any problems.

Make a record of the activity, including the type of activity, location, participants, number of participants, and contents, and have the person in charge manage it.

Follow the infection prevention guidelines set by the University of Tsukuba and T-ACT.

活動報告

実際の活動内容

キャンパス内の異文化交流と多文化共生の促進をサッカーを通じて進めました。主な活動は二つあり、一つは週1回程度の定期的な練習、もう一つは多文化理解促進ワークショップの開催です。定期練習は筑波大学第2サッカー場または医学体育館で行いました。最初は10名程度の参加でしたが、口コミ等で徐々に広がり、プロジェクト参加者は100名を超えるまでになり、本プロジェクトのメンバーで「KickChat FC」と名付けたチームを立ち上げました。

参加者の国籍は以下の通りとなります。

アフガニスタン、アルジェリア、アルゼンチン、バングラデシュ、ブータン、ボリビア、ブラジル、コンゴ民主共和国、エジプト、エチオピア、フランス、インド、インドネシア、ミャンマー、ネパール、ナイジェリア、ペルー、スペイン、アメリカ合衆国、ウズベキスタン、ベトナム、中国、韓国、日本ほか

多文化理解促進ワークショップに関しては本プロジェクトとは別のプロジェクトを立ち上げ実施したので活動内容詳細はそちらで報告します。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒100%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

定期的な練習は滞りなく行われたので困ったことは特にありません

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

特にありません。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

外国人留学生と日本人学生と教職員、キャンパス内で思うように交わりにくい人たちもスポーツであれば気軽に交流できるのではないかという考えで始めた企画でしたが、予想以上の広がりを見せました。また、プロジェクトを自主的に取りまとめる学生の姿を見て、その優秀さに感心しました。

参加者への影響

外国人留学生と日本人学生の間での交流だけでなく、留学生同士、日本人同士の知り合いの場にもなり、意図していない効果がありました。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

T-ACT スタッフはいつでも協力的です。思い立ったらとにかく相談してみましょう。実現までサポートしてくれます。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

当初、職員という立場で T-ACT を企画できることを知らなかったこと、企画を発案するのも初めてだったこともあり若干手探りなところもありましたが、T-ACT スタッフのサポートのおかげで企画が実現でき感謝しています。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5



サッカーボールをパスしてみんなと対話しよう！ Pass the soccer ball and interact with everyone!

● 多文化共生促進ワークショップーサッカーボールでキャンパス内の見えない壁を壊していこうー Multi-cultural promotion workshop -Kick the soccer balls to break the invisible walls of the campus-(21019P)

T-ACT プランナー 北條 英次 (体育センター)

活動目的

T-ACT プロジェクト「サッカーボールをパスしてみんなと対話しよう！」は

- ①毎週のサッカー練習を通しての異文化交流
- ②サッカーストーリー発表会
- ③多文化共生促進ワークショップ
- ④サッカー交流イベント

の4構成で活動しています。

12月の活動開始から2ヶ月、本プロジェクトは30名を超える参加人数になりました。職員、日本人学生、外国人留学生とメンバーは多種多様です。活動を通して気づいたことは、教職員、学生、留学生それぞれの立場でキャンパス内のさまざまな事柄に捉え方の違いがあるということです。職員が学生に良かれと思っていることが学生に負担になったり、日本人が当然と思っていることが外国人には理解できなかったりします。私たちはキャンパス内の多文化共生の妨げとなるこのような相互不理解をなくしたいと思います。

今回、多文化共生促進ワークショップを開催して、教職員、日本人学生、外国人留学生それぞれの立場では気づかない障壁に関して意見を交換しあい、それをなくすための解決策を出し合います。

T-ACT Project "Pass the Soccer Ball and Interact with Everyone!" is

- (1)Cross-cultural exchange through weekly soccer practice
- (2)Soccer story presentation
- (3)Multi-cultural promotion workshop
- (4)Soccer exchange events

In the two months since the start of activities in December, the number of participants in this project has grown to over 30. We have a diverse group of faculty, staff, Japanese students, and international students. Through this activity, we noticed that there are differences in how faculty members, Japanese students, and international students understand various things on campus. What staff members think is good for students may become a burden for students, and what Japanese people take for granted may not be understood by non-Japanese people. We would like

多文化共生促進 ワークショップ

サッカーボールでキャンパス内の
見えない壁を壊していこう



T-ACTプロジェクト「サッカーボールをパスしてみんなと対話しよう！」の活動の一環で多文化共生促進ワークショップを開催します。グループワークを通して、サッカーで繋がったさまざまな人たちがキャンパス内の見えない障壁を取り除くアイデアを出しあいましょう。

3月14日(月)18:00～19:30

登録フォームは
こちら

5C棟212実習室




Multi-cultural Promotion Workshop

Kick the soccer balls to
break the invisible walls of
the campus



As part of the activities of the T-ACT project "Pass the Soccer Ball and Interact with Everyone!", a workshop to promote multi-cultural conviviality will be held. Through group work, come up with ideas to remove invisible barriers on campus with a variety of people connected by soccer.

Monday, March 14 18:00～19:30

Registration form

Building 5C Room 212




to eliminate this kind of mutual incomprehension that hinders multicultural coexistence on campus. By holding the Multi-cultural promotion workshop, we will point out barriers that are not noticed by faculty members, Japanese students, and international students from their respective standpoints, come up with solutions to eliminate them, and make constructive proposals to the university.

具体的な活動計画

前企画メンバーに限らず、筑波大学に所属する教職員、在学生の参加者を広く募集します。

今回のワークショップは対面で開催します。

参加人数30名を想定し、ファシリテーター2名と7名ごとの4グループを作ります。

各グループには教職員、日本人学生、外国人留学生を均等に配置します。

準備するもの ホワイトボード、マグネット、模造紙、ポストイット、筆記用具など。

ワークショップの構成は以下の通りです。

自己紹介(10分)

アイスブレイク(10分)

グループワーク①「キャンパス内で感じるバリアの実例を挙げる」(20分)

グループワーク②「バリアをなくす方法を考える」(20分)

プレゼンテーション(20分)

提言まとめ(10分)

外国人留学生が加わるのでグループワークは日本語と英語の両方で行われます。でも英語の上手い下手など全く関係ありません。外国人留学生と交流したい人の参加ぜひともお願いします。

We are looking for a wide range of participants, not only T-ACT members but also faculty, staff and students.

This workshop will be held face-to-face.

The number of participants is expected to be 30. 2 facilitators and 4 groups of 7 participants will be formed.

Each group will have an equal number of faculty members, Japanese students, and international students.

What to prepare: White board, magnets, paper, post-its, writing utensils, etc.

Structure of the workshop

Self-introduction (10 minutes)

Ice break (10 minutes)

Group work (1) "Give examples of barriers you feel on campus" (20 minutes)

Group work (2) "Think of ways to eliminate barriers" (20 minutes)

Presentation (20 minutes)

Proposal summary (10 minutes)

Since international students will be joining us, group work will be done in both Japanese and English. But it doesn't matter if your English is fluent or not. If you want to interact with international students, please join us!

活動場所

5C212

活動期間

2022/02/24～2022/03/14

対象

学生・教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O : Cristian Ebuka Okoye (スポーツ・オリンピック学学位プログラム)、Suraj Bhandari (スポーツ・オリンピック学学位プログラム)

P : Rakwal Randeep (体育系)

備考

<感染防止対策>

・対面で行うワークショップであるため、実施については茨城県及びつくば市、筑波大学の要請等を確認し、大

学の感染症対策に応じて判断します。

- ・対面の活動を中止する要請が出た場合、企画を中止・延期します。
- ・感染防止策が徹底されているかについては、パートナー教員および T-ACT に確認します。
- ・企画を実施するかの判断については、開催 1 週間前に T-ACT と相談して決定します。
- ・前日に体調の記録確認をパートナー教員及び T-ACT に報告いたします。
- ・体調不良がある場合は活動を停止してください。
- ・参加者は過去 2 週間以上の健康観察記録を付けてください。
- ・当日は担当者が会場で記録を回収、管理します（いつでも提出できる状態にしておいてください）
- ・活動の際は出入りの際、物品を触る前などで随時手指の消毒を行うこととします。
- ・各自マスクを着用してください。
- ・部屋の換気を行い、密集・密閉を避け、飲食を禁止します。大声を出して会話しないようにしてください。
- ・家を出る前に検温してもらい、体調不良者は出席しないでください。
- ・事前に申し込みした参加者のみ出席可とします。
- ・参加者が座る位置を、ソーシャルディスタンス (2m) を考慮して予め設定してお来ます。
- ・活動の以後 2 週間は体調に憂慮し、参加者に問題があれば報告してください。
- ・活動形態、場所、参加者、人数、内容をまとめた活動記録を作成し、担当者が管理します。
- ・その他筑波大学および T-ACT の設定した感染防止対策ガイドラインに従って活動します。

<参加に際しての注意事項>

- ・記録撮影について

本ワークショップの様子は、今後の「サッカーボールをパスしてみんなと対話しよう！」プロジェクトの記録、広報活動等に使用するために写真撮影を行います。

参加者の皆様は、撮影についてご同意いただけない場合は事前にプランナーへその旨をお伝えください。

ご連絡をいただけない場合、ご自身の活動の様子が記録されてしまいます。

編集などの対応はできませんので、ご注意ください。

入退場は自由ですので、ご都合に合わせてご参加いただけます。

また、プランナーから許可を得た者に限り、当日の活動の様子を撮影いただけます。

使用用途は本活動の広報活動や、記録用のみとさせていただきます。

許可のない撮影、参加者のプライバシーを侵害するような行為が見受けられた場合、退出いただく場合がございます。

本ワークショップに参加いただく方は以上の注意事項に同意いただけたものといたします。

不審な行為や会の進行を妨げる行為が見られる場合は、退出いただく場合がございます。

相手を尊重し不愉快な気持ちにならないような発言、コメントをお願い致します。

< Infection prevention measures>

-Since this is a face-to-face workshop, we will confirm the requests from Ibaraki Prefecture, Tsukuba City, and the University of Tsukuba, and make decisions on implementation according to the university's infection control measures.

-If there is a request to cancel the face-to-face activity, the project will be cancelled or postponed.

-Consult with T-ACT one week prior to the event to determine if the project will be implemented.

-Report to the partner teacher and T-ACT on the day before the event to check the health record.

-If there is any health problem, the activity will be stopped.

-Participants should keep a record of their health for at least the past two weeks.

-The person in charge will collect and maintain the records at the venue on the day of the activity (ready for submission at any time).

-Disinfect hands as needed before entering, exiting, and touching items during the activity.

-Each person should wear a mask.

-Ventilate the room, avoid crowding and sealing, and prohibit eating and drinking. Do not talk loudly in the room.

-Please take your temperature before leaving home and do not attend if you are not feeling well.

-Only participants who have applied in advance will be allowed to attend.

-In the first two weeks of the activity, be concerned about the physical condition of the participants and ask them to report any problems.

-Make a record of the activity, including the type of activity, location, number of participants, and contents, and have the person in charge manage it.

-Follow the infection prevention guidelines set by the University of Tsukuba and T-ACT.

活動報告

実際の活動内容

2022年3月14日5C棟212実習室でワークショップを開催しました。

まず参加者全員でアイスブレイクを行い、自己紹介を行った後、キャンパス内で実感する障壁（物理的もしくは心理的障壁）とその解消方法をテーマに、参加者を2グループに分けグループワークを行なったのち、それぞれのグループがプレゼンテーションを行いました。

司会

北條英次 人間エリア支援室

ファシリテーター

Cristian Ebuka Okoye（ナイジェリア）スポーツ・オリンピック学学位プログラム大学院生

Suraj Bhandari（インド）スポーツ・オリンピック学学位プログラム大学院生

参加者

Benchadi Djafer（アルジェリア）情報理工学位プログラム大学院生

石井 郁 体育専門学群学群生

高波 宗人 スポーツ国際開発学共同専攻大学院生

Phan Cao Duong（ベトナム）持続環境学専攻大学院生

Santiago Price Torrendell（アルゼンチン）知能機能システム学位プログラム

磯田 沙織 国際総合学類非常勤講師（元人文社会系）

Tanmoy Mookherjee（インド）TIAS2.0大学院生

Yuri Lavinias（ブラジル）情報理工学位プログラム大学院生

栗原 翔吾 URA 研究戦略推進室

木田江里華 T-ACT フォーラム

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒90%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

会場の実習室が思ったより大きく使い勝手の面で多少問題がありました。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

特にありません

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

90分間のほとんどを英語でディスカッションするのはほとんど初めての体験でした。それぞれの立場から多くの意見が出てキャンパス内の障壁は少なからず存在していることを実感し、職員の立場としてT-ACT活動だけではなく、日頃の業務を通してバリアフリーを意識していく必要性を自覚しました。

参加者への影響

日本人学生、外国人留学生のみならず教職員を交えて英語で意見を出し合う機会の貴重さを感じていました。

未来のプランナーに伝えたいことがあれば自由どうぞ

T-ACT スタッフはいつでも協力的です。思い立ったらとにかく相談してみましょう。実現までサポートしてくれます。



T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

企画を相談するごとに、T-ACT スタッフとの共通理解が深まっていきました。ポスターの印刷などサポートいただき感謝しています。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5



● 平砂に憩いの場を！平砂池復興プロジェクト（21020A）

T-ACT プランナー 阿部 洸太（応用理工学類2年）

活動目的

本企画の目的は平砂宿舎4号棟と7号棟の間にある池の復旧と活用手段を模索し、平砂宿舎周辺の景観を整えと共に、平砂に住む総合学域群生を始めとした学生たちの交流の場を設けることです。

いつも宿舎から出る際、目の前に管理の行き届いていない緑色の水場があり宿舎に住む人間としてあまり心地の良いものではありませんでした。また、夏場には大量の虫が湧いてしまっています。そこで、少しでも明るく継続的な利用が可能となるような活用方法がないかと思い立案しました！

また、コロナ禍により、交流の場を十分に持つことのできていない学生に対して、新たなコミュニティ創生の場となることも期待されます。企画は「清掃」、「維持」、「活用」の3段階に分けて行う予定です。第一弾の「清掃」段階において現在サイフォンの原理を用いて水を抜いています。これから池の底に沈んだ大量の落ち葉や泥を除去します。

具体的な活動計画

【準備段階（2月）】

- ・ 人員募集
ポスターを宿舎内、宿舎付近を中心に掲載する。
公式 SNS アカウントを作成し、活動の周知、人員・活用アイデア募集の呼びかけを行う。
- ・ 活用アイデア募集
Google フォームでアンケートを作成しアイデアを募集する。
- ・ 池の事前排水
事前の排水は現時点で学生生活課厚生・宿舎チームと相談のうえ実施した。
写真1枚目は池の水を抜く前、4枚目は池の水を抜いた後である。
- ・ 参加者に向けたレジュメ作成
当日、参加者がスムーズに作業できるようレジュメを作る。

【清掃段階（3月11日：予備日14日）】

集合時間 10:00

集合場所 平砂共用棟前

- ・ 当日は参加者を落ち葉班（およそ6～8名）・外周班（5名）・運搬班（4名）の3つのグループに分けて作業を行う。
- ・ 手順については厚生・宿舎チームに確認済である。
- ・ 当日の動き
運搬班はゴミ袋に落ち葉を詰めて宿舎のゴミ捨て場に捨てる。ゴミ捨て場一箇所につき二人ずつ設ける。この際、落ち葉の袋内にプラごみなどが紛れていないかよくチェックし、紛れていた場合取り除きプラごみ用のゴミ袋へ。
- ・ 落ち葉班は池を分割して、一人一エリアずつを担当する。終わり次第他のエリアの補助に回る。作業内容は落ち葉を集めて池の外に運ぶことである。その際、熊手やざるなどを用いる。
- ・ 外周班は池周辺の清掃を担当する。清掃にはほうき・ちりとり・ブラシを用いる。この際池周辺にもどんぐりや落ち葉などが落ちているので回収しゴミ袋にまとめる。作業が終わり次第他班に合流する。

▲維持工程に進むまでの間、再び落ち葉が溜まってしまわないようにブルーシートで覆っておく必要あり。

清掃活動にあたって学生生活課から支援していただけるもの。

リアカー2台、スコップ6本、長靴6足、軍手6個、ホース55m、ブラシ4本、ほうき3本、ちりとり3個、ゴミ袋90L、ブルーシート、泥除けのためのレインコート（ズボン）6本、ホッケイロ、

準備物

汚れても良い動きやすい服装、マスク、水筒、タオル、

今回の清掃活動において、学生教育研究災害傷害保険（学研災）については適応されることが確認済であるが怪我をしないよう参加者には十分に注意喚起を行う。

【清掃の振り返り】

- ・ 活用アイデアの募集

SNS などを用いて清掃した池の活用アイデアを広く募り、そのアイデアをもとに厚生・宿舍チームと相談し活用の方針を決定する。

活動場所

平砂共用棟前の貯水池

当日は平砂共用棟前にお集まりください。

活動期間

2022/02/09～2022/07/01

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：澤口 稔（生物資源学類 2 年）、梶原城太（工学システム学類 2 年）、櫻井俊太郎（社会工学類 2 年）、森根瑞喜（社会学類 2 年）

P：山口佳樹先生

備考

【作業時の新型コロナウイルス感染予防対策】

- ・プランナーとオーガナイザーは、健康観察記録表を用いて活動 2 週間前から体温測定を行う。健康管理担当者を定め、記録をプランナーと健康管理担当者が責任を持って管理する。活動前日までに健康観察記録表を T-ACT 推進室へ報告する。
- ・プランナー・オーガナイザーに感染の疑いがある場合、「新型コロナウイルス感染が疑われる場合の本人の行動フロー」に従って行動し、発生状況を健康管理担当者が T-ACT 推進室へ必ず報告すると同時に、活動を停止する。
- ・管理を行う参加者は事前に運営側で把握した者のみとし、参加者には事前に、状況によっては参加が認められない場合があること、マスクを着用すること、開催 2 週間前に発熱や体調不良の症状がないことを周知しておく。
- ・活動当日には、当日および活動 2 週間前の発熱、体調不良の症状の有無を確認する。
- ・活動履歴担当者を定め、日付、場所、時間、参加者氏名、手で触れることのできる距離で15分以上の接触があったものに関する情報を記録し、保管する。
- ・活動中は、マスクの着用、消毒を徹底し、ソーシャルディスタンスを保ち活動を行う。
- ・十分な換気を行う。
- ・参加者の名簿を作成・管理する。
- ・使用物品は基本個々で持参し、共有しない。共有した場合は、使用後に消毒を徹底して行う。
- ・飲食や大声を出す者がいたら注意を促し、改善されなければ退室措置を行う。
- ・使用する学内や他の施設が定めたガイドラインに従う。
- ・活動終了後は、T-ACT 推進室へ活動終了報告を行う。また、プランナーは活動終了後 2 週間の時点で参加者に感染の有無の確認を行い、結果を T-ACT 推進室へ報告する。

活動報告

実際の活動内容

平砂池（平砂学生宿舍 4 号棟と 6 号棟の間にある池）を清掃活動を行った。

具体的にはポンプによる排水を行い人が入れるくらいの水深にしたのち、落ち葉を除去した。その後、ほとんどの水を排水したのちは日光浴をさせて乾かして最後にデッキブラシで磨いた。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒60%

実施中の困難と解決策**実施中に困ったこと**

当初池の排水は簡単にできるものであるという想定であったが、池に排水設備がないということを知り、排水方法に困った。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

サイフォンの原理を用いた排水装置を用いたことで人力のみで排水を行うのに比べ遥かに少ない労力で排水を

行うことができた。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

私が筑波大学を志望校として選んだ理由の一つとしてこの T-ACT の活動があったため、ぜひ一度は活用してみたいと考えていた。

はじめ、「足湯を作りたい」というあまり現実的ではない稚拙な案を提案しに行ったときは私たちも少し不安であった。というのもこのような話を真面目に聞いてくれる大人はいるのだろうかという不安があった。しかし、実際に訪れてみると実現に向けてどうすればいいのかをまじめに考えていただき自信になった。また、この活動を遂行していくにあたりたくさんの大人の方とお話しする機会を頂き、自分の考えをきちんと伝える難しさや自分にはない角度からの質問に対しての返し方など貴重な経験をさせていただいた。

また、この活動を通してたくさんの人とかかわりを持てたというのも自分にとっていい経験となった。自分たちが何をしているのかや、これからどうしていきたいかなどを相手に伝えながら自分の活動に巻き込んでいくというのはなかなか難しいことであったがやりがいを感じることもあった。

参加者への影響

連絡を頻繁にみるようになった（連絡担当）

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

期日を守りましょう！

とりあえず何かしたら報告しましょう！

SNS の運用は根気強く！

見通しをもって活動しましょう！



T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

学生生活課の方とお話するなど自分たちのつながりではできないようなセッティングをしていただいたこと。

アドバイスをいただきながら一緒に活動を進めていただいたこと。

何よりあそこの教室が楽しいこと！

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒4

● 羽ペンで書くカリグラフィ (22001A)

T-ACT プランナー 藤川 朋伽 (芸術専門学群3年)

活動目的

羊皮紙関連企画の第2弾です。

主にヨーロッパで、古代から中世までの主な筆記用具は羽ペンと没食子インクでした。

前回の企画では実際に当時使われていた羊皮紙作りに挑戦しましたが、今回はガチョウの羽根&インクを使ってカリグラフィに挑戦します。名刺サイズ程度の小さな羊皮紙に好きな単語や呪文を書いたカードを作る予定です。(対面開催では没食子インクにも少し触れる時間を取りたいと思っています)

スマホやボールペン等で書かれた文字が溢れる現代で、羊皮紙に羽ペンで書いた文字に触れるという体験を通して、珍しい筆記用具に触れる面白さを感じたり、書体の歴史や地域ごとの違い、ボールペン・万年筆といった現代の筆記用具との差を実感を踏まえて知れたらいいなと考えています。

また、個人的な目的ですが中世の美術や羽ペンに興味がある仲間を探すため、ハッシュタグ「#羽ペンで遊んでみた」を作ってワークショップ後も交流が出来たらいいなと思っています。

羊皮紙関連企画全体の目標として装飾写本制作を考えており、今回の羽ペン企画はそのための活動の1つとなります。

具体的な活動計画

羽ペンは中世ヨーロッパで一般的な筆記用具でした。今回のワークショップでは実際にガチョウの羽根で作った羽ペンとインクを使って、欧文書体を美しく書く技法であるカリグラフィにチャレンジします。

前回の企画「原皮から始める羊皮紙作り」からバージョンアップし、学外の方にも広くご参加いただけるよう、オンライン&対面で計2回実施します。新生活もそろそろ落ち着くかという5月初旬~中旬の開催予定ですので、新入生の方や新社会人の方にもご参加いただけると嬉しいです。

羽根やインクなど体験に必要な道具は運営側で用意いたします! (※オンライン開催の場合はセットを郵送いたします) どうぞお気軽にご参加ください。

参加応募フォームにて書いてみたいアルファベットや単語などを予めお伝えいただければ、見本をご用意することも可能です。

また、参加費として対面の方は500円(材料費)を頂戴いたします。

オンラインの方は1000円(材料費、郵送費)を頂戴いたします。オンラインで参加される方はPayPayでのお支払いをお願いいたします。

※ご入金を確認し次第、用具を発送いたします。

※PayPayが使えない方は銀行振込にて対応させていただきます。(振込手数料は参加者様のご負担とさせていただきます) 振込先など、詳細はメールでお伝え致します。

また、万一お振込み内容に間違いがあった場合、個別に対応いたしますのでご連絡ください。

※収集した個人情報は本企画実施のために使用し、それ以外の目的に使用することはありません。本企画終了次第、情報は破棄いたします

応募フォーム URL

・オンライン(5/3) → <https://forms.gle/nYHFXsuMdmf5Q6P48>

※申込締切…4/26

・対面(5/11) → <https://forms.gle/Uw6FHDNdCPcpreZ77>

※申込締切…5/3

※どちらも先着順

<活動スケジュール>

○4月中旬~5月初旬

・企画広報、参加者募集

羽ペンで書くカリグラフィ



- ・カリグラフィ体験キットの用意、郵送
- ・参加に関する案内メール
- ・教室貸出申請

○5月中旬

<オンライン開催> (5月3日(火) 18:00~19:30)

- *参加対象…興味がある方は誰でも！
- *中学生以下の方で参加を希望される場合は、必ず保護者に許可を頂いた上で、可能なら同席してもらうようお願いいたします。
- *Zoomを使用します
- *ワークショップで使う道具は予め参加者の方々に郵送します
- 17:45~ 参加者入室開始
- 18:00~ ワークショップ開始、挨拶及び企画説明
 - ★プチ講座「中世の羽ペンとインクの話」「アルファベットの書体の歴史」
- 18:30~ 羽ペンの使い方、アルファベットの書き方の説明
- 18:40~ ★カリグラフィ体験
- 19:25~ 終了 振り返りのちょっと一言

<対面開催> (5月11日(水) 18:30~20:00)

- *参加対象…学内者限定
- *備考に別記した感染症対策を十分に行ったうえで実施します
- 18:30~ ワークショップ開始、挨拶及び企画説明
 - ★プチ講座「中世の羽ペンとインクの話」「アルファベットの書体の歴史」
- 19:00~ 羽ペンの使い方、アルファベットの書き方の説明
- 19:10~ ★カリグラフィ体験
- 19:50~ 終了、片付け
 - 振り返りのちょっと一言
- ☆ワークショップの感想や作品は、よろしければ「#羽ペンで遊んでみた」のハッシュタグをつけてTwitterに投稿して頂けると嬉しいです！
- ワークショップ終了後
 - 今後のワークショップ企画開催の参考にするため、感想やご意見などを伺うアンケートを実施する予定です。

活動場所

- オンライン開催：各自宅等（Zoomを使用します）
- 対面開催：5C508（最大収容人数96人）を借りる予定
- ※1か月前に申請し、空いていれば借りることができます
- ※もし既に他活動の申請があった場合、最大収容人数が20人以上の、5C棟か6A棟にある他の教室を借ります

活動期間

2022/02/01~2022/08/01

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

- O：江原実祝（芸術専門学群3年）、富樫乃樹（生物資源学類2年）
- P：武田一文（芸術系）

備考

- 感染症対策
 - ・実施については茨城県及びつくば市、筑波大学の要請等を確認し、大学の感染症対策に応じて判断する
 - ・対面の活動を中止する要請が出た場合、企画を中止・延期する
 - ・感染防止策が徹底されているかについては、パートナー教員およびT-ACTに確認する
 - ・企画を実施するかの判断については、開催1週間前にT-ACTと相談して決定する
 - ・前日に体調の記録確認をパートナー教員及びT-ACTに報告する
 - ・体調不良がある場合は活動を停止する

- ・対面での参加者は過去2週間以上の健康観察記録を付ける
当日は担当者が会場で記録を回収、管理する（いつでも提出できる状態にしておく）
- ・活動の際は出入りの際、物品を触る前などで随時手指の消毒を行う
また、ハンドソープも用意しておき、手洗いをしてもらう
- ・ワークショップ中は各自マスクを着用する
参加者が座る位置を、ソーシャルディスタンス(2m)を考慮して予め設定しておく
部屋の換気を行い、密集・密閉を避け、飲食を禁止する。大声を出して会話しない
- ・家を出る前に検温してもらい、体調不良者は出席しない。
また、事前に申し込みした参加者のみ出席可とする。
- ・活動の以後2週間は体調に憂慮し、参加者に問題があれば報告してもらう
- ・活動形態、場所、参加者、人数、内容をまとめた活動記録を作成し、担当者が管理する
その他筑波大学およびT-ACTの設定した感染防止対策ガイドラインに従う
- 住所・電話番号等の個人情報の取り扱いについて
担当者（藤川）が厳密に管理し、本企画以外で使用しない。企画終了後はデータを破棄する。
- 参加費の支払い方法
 - ・対面の場合…その場で回収する
 - ・オンラインの場合…銀行振込かPayPayを使用する 振込先などの詳しい案内は各参加者にメールで送付する

活動報告

実際の活動内容

○企画準備段階

- ・3月頃
企画で使用する羽やインクを探し、購入する。
カリグラフィや書体に関する資料を集める
- ・4月頃
宣伝用ビジュアルの制作
SNS（特にTwitter）を中心として広報を始め、参加者を募集する
同時並行で配布資料の用意や教室貸出し申請などの準備を行った
また、参加者にはメールでZoomのリンクや会場などの案内を行った
- ・5月頃
企画実施及び事後アンケートの実施

○企画実施（オンライン）

実施日時 5月3日18:00～20:00

実施場所 Zoom 開催

参加者 運営3名、参加者3名

30～40分程度カリグラフィ、アルファベットの書体、羽ペンの特徴や使い方について説明をした。
その後配布した資料を手本として貰って実際に羽ペンを使って文字を書いてもらった。
上手く時間管理や手元を見たり、説明したりが難しかったため、開催時間がやや伸びてしまった。

○企画実施（対面）

実施日時 5月11日18:30～20:00

実施場所 6A208教室

参加者 運営3名、参加者9名

参加者の方には、集合時に健康記録表の確認とアルコール消毒をお願いした。
前半はカリグラフィ、アルファベットの書体、羽ペンの特徴や使い方について説明を行い、後半は実際に羽ペンを使ってもらった。

対面開催では説明がしやすく、時間の調整がしやすかったのもあってスムーズに進行することができた。本ワークショップでは説明後は殆ど参加者がお手本を真似て文字を書くだけになってしまい、間延びするとか静かな雰囲気になってしまいがちだった。対面開催では様々な参考資料の実物を持ってくることができ、更に実際に参加者の方に未加工の羽根をお渡しし、休憩がてら羽ペンを作ってもらい体験を突発的に実施した。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒70%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

- ①オンライン開催での対応を考えること（連絡方法、参加費支払い方法など）
- ②用意在間に合わなさそうで焦ったこと（実習の申請手続きや提出書類の締切が実施直前に重なってしまったため）
- ③資料作成の難しさ

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

- ①オンライン開催は SNS での宣伝をメインとして参加者を募集した。連絡はメールを通して行い、支払いは PayPay の QR コードを送付して入金をお願いした。入金を確認でき次第ゆうパックにて羽ペン体験セットを発送した。
- ②オーガナイザーの 2 人に手伝ってもらい、形は何とかなったという意味では解決した。
しかし春学期の最初が忙しそうなことを予想できず、またスケジュールを上手く立てられなかったので少し忙しくなってしまう、満足いくほどじっくり準備ができなかったと感じている。
- ③カリグラフィを書くための手本や書き方をまとめた資料を作成したが、分かりやすい教材作成がとても難しかった。
オンライン開催ではあまりしっかり分かりやすい資料を作ることができなかったが、対面開催ではその反省を生かして分かりやすい資料を作ることができたと思う。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

バツとすぐ思いつくこととして、今回の企画はちょっと不完全燃焼になってしまったと感じています。忙しかったり、勉強不足だったり、それらから来る緊張もあって、思ったより上手くできなかったという反省が、イベントを通して得られたと思うものより先に浮かんできてしまう感じです。

今回の活動を通じて、ワークショップの参加者が楽しんでいること、興味深く取り組んで頂けていることが伝わることが、自分の楽しさやモチベーションにも繋がっているのだと思いました。ワークショップはその内容で何を持ち帰ってもらうかも大事かもしれませんが、その場の雰囲気や活動が楽しかったという経験も持って帰ってもらいたい、内容を考えるなら単に自分がしたいことだけでなく、どうやったらそれをより楽しめるかをも考えることが必要で、そのことで結果的に自分の楽しさや学びをより強化することにも繋がるのだと思うようになっていきます。

他には、今回はオンライン開催を実施したことで、SNS で本企画を知った方が参加申し込みをして下さったり、オーガナイザーと関わりのある方で大阪からも参加いただけたことが印象に残っています。後者の方はお子さんとも一緒に参加し、羽ペンを楽しんで頂けたとのこと伺ってとても嬉しかったです。対面開催では古民家で色々なワークショップを企画・開催していらっしゃる方に興味を持っていただけて、今後その古民家ででも開催できないか、そうならば学内以外にも地域の方々にも参加しやすくなるのではないかと、という話ができました。開催方法次第で対象者や地域を広げることが出来るのを実感し、自分でイベントを企画して場を作れることの面白さを知れたような気がしています。新たなワークショップ企画をもっと考えたいと思うようになりましたし、それによってどのようなことができてどんな効果があるのか、ということまで広く考える視点が持てるようになったのではないかと思います。

また、自分の変化として、自分がどのような性格の人間なのかを改めて客観的に見る機会になったように感じています。私は何か作業を 1 人で黙々とやるのも苦手ですが、同じ場所で複数人お喋りもせず作業を進めるのも得意ではなく、誰かと一緒に楽しんで遊びながら物事を進めたい、場の雰囲気をどうにか盛り上げたいと思う気持ちが強い、盛り上がった雰囲気が大好きな人間なのだろうかと思いました。特にオンライン開催であり場を盛り上げられなかったと感じているのですが、そのため余計に不完全燃焼感・ちょっと失敗してしまった、という感想を抱きやすかったのだろうかと思っています。

参加者への影響

オンライン開催の方では運営が上手くできなかった（説明不足、流れやテンポが悪い、場の雰囲気を盛り上げられない、イベントとしてあまり成功させられなかった）こともあり、フィードバックを上手く回収することができなかった。

対面開催では前回（羊皮紙企画）の経験も踏まえて説明や資料作りが上手くできたこともあり、充実した体験をして頂けたのではないかと考えている。終了直前に合図をした際には「もうそんな時間!？」というような反応もあった。企画終了後に実施したアンケートでは好意的な意見を頂き、更に Twitter でもハッシュタグをつけて作品を投稿して下さる人が数名いらっしゃったこともあり、中世ヨーロッパの文化プチ体験を楽しんで頂けたのではないかと思います。

（以下は羽ペンについて企画参加前後でイメージが変わったかというアンケートに対する回答、その他寄せて頂いた感想です）

・昔の高価なものと言うイメージが私の中であった羽ペンが、身近にある材料で自分で作れるものであったと言

うのが驚きだった。

- ・羽ペン、ペンに羽飾りをつけただけのペンだと思っていたのですが、本当に羽をつかっていたんですね！案外かけたのでよかったです、楽しかったので自分でもやってみます
- ・昔のもの、から現代でもできる歴史あるもの、というイメージ
- ・羽ペンライフを楽しみます！祖父母に羽ペンで文字をかけた絵葉書を送ってみようとおもっていますー！
- ・とても楽しかったです！自分では興味がありつつ道具を揃えるところからだと少し億劫だったのでこうして機会をつくっていただけてよかったです。

一方で、運営した仲間には、うまく頼ったり一緒に企画を進めたりすることが出来なくて、オーガナイザーの方が「自分は何もしてないの」と言っていたのが、自分としては反省点となっている。全員結構忙しかったのもあるかもしれないが、上手く協力して企画を仕上げればもっと良い物に出来ただろうし、オーガナイザーの方は企画運営に参加しているという実感や楽しさ、達成感を比較的得にくかったのではないかなと思う。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

(未来のプランナーを将来また企画するかもしれない私と仮定して書いています)

ワークショップは参加者の方々に楽しんで頂けるようにするだけでなく、自分も楽しめるようにするのがモチベーションの維持と良いイベントを開催するのに不可欠だと感じました。オーガナイザーの方と話し合っ協力して、自分が楽しめる内容やスケジュールを考えていただきたいなと思います。

また、ハプニングは絶対起こるものと実感しました。私の場合はそのことで焦って完璧主義っぽくなってしまい、余計に周りが冷静に見えなくなることで更に追い詰められがちでしたが、傍から見れば案外そこまで拘らなくてよかったり、何とかなったりというのも多かったです。場合によりますが結構気楽にやって大丈夫だったんだなと後になって思っています。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

前回と似たような内容になってしまっていますが、ほんやり抽象的だったアイデアを実施にあたって具体的にしていくのに頂けた意見が本当に助けになったと思っています。タイミングなども影響して誰かにゆっくり相談しにくいこともあるのですが、T-ACT フォーラムの方で客観的なアドバイスがいただけたら、審査の制度があるのは、企画を進めていくのにあたって安心感があります。

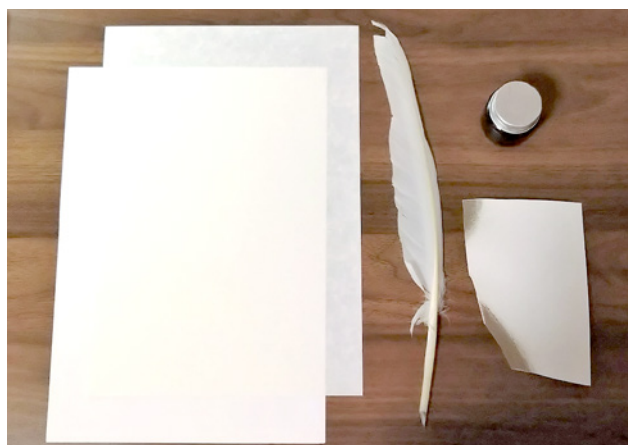
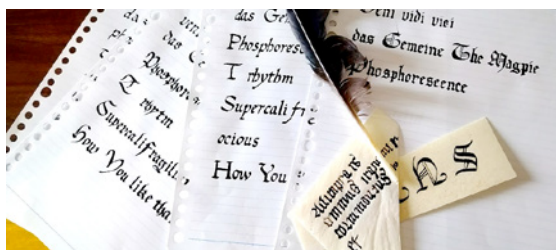
また、今回は特に支払い方法などについてもやや複雑な方法を取ったため、それに関してアドバイスを頂けて良かったです。

要望というほどでもなくふと感じた程度のことですが、過去の活動報告の検索性が上がれば、T-ACT で蓄積されたノウハウを探したり活かしたりしやすいのではないかなと思ったりしました。

現在は活動中だったり募集中の企画に関してはキーワード検索で情報を探すことができますが、終了した企画はPDFの報告書がアップロードされているので、特定の事例や項目に絞って参照するのが少し大変かもと感じます。今回の企画では自分にとって初めてのオンライン開催で、参加費の支払い方法などで迷うことがあり、過去の事例を検索して参考にできる物が探しやすかったら便利なのではないかと思いました。データベース化とかwebページのシステムを変えるのは難しそうですが、もしかしたらそれこそT-ACTサポーターとしてそれぞれの事例を調べて他のプランナーの方々にアドバイス出来た方が良いのかもしれないと思ったりもしています。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒3



読書会をしよう！（22002A）

T-ACT プランナー 原 大誠（情報メディア創成学類4年）

活動目的

私は普段、読書サークルといった形で少人数で、読書会を開催しており、加えて友人とも読書会を行っています。そこでは参加者全員が同じ本について話すことで、一人では得ることの出来ない読書体験が得られます。また、課題図書といった形で読書をすることにより、普段触れることのない分野にも半強制的に触れる機会となり、自分の趣味の範囲を拡張できる機会ともなっています。

現在活動中のサークル twitter：@shincho100_ITF

そこで、非公認の少人数サークル活動の規模を拡大し、より幅広い人にこの活動を告知し、参加者を集いたいと考えました。最終的には、この企画を越えて筑波大学の公認サークル化し、定期的に開催できるようになればと考えています。

具体的な活動計画

【読書会】

「新潮文庫の100冊」から選んだ本を課題本とし、読書会当日までに読んできます。当日は各個人の感想や気になったところを中心に課題本について話し合います。参加者は大学生を想定しており、筑波大学だけでなく、他大学の学生も歓迎します。

新潮文庫の100冊→ <https://www.100satsu.com/>

【期間内スケジュール】

月2回（原則毎月第2、4週月曜日）予定、18時30分～20時ごろ解散予定

対面開催候補日

第1回（5/23予定）、第3回（6/20予定）

<持ち物>

- ・課題本
- ・メモ
- ・筆記用具

<当日のスケジュール（18:30～）>

- ①お気に入りの本とともに自己紹介
- ②感想と気になった点を元に課題本についての読書会



第一回

読書会をしよう！

筑波大読書サークル



【開催日時】
4/25(月) 18:30-

【課題図書】

未定

【当日のスケジュール】

- ①お気に入りの本と自己紹介
- ②感想、疑問点を元に読書会
- ③次回の課題図書の決定

【持ち物】

当日は読書会として課題本の感想、疑問点などを話し合います。少しでも興味がある方はぜひ！

・最近読んで面白かった本など
・課題本
・必要な方はメモ帳と筆記具
【形式】
春日エリア7A棟



青632-2
T-ACT
つくばアクションプロジェクト

③解散

<形式>

対面での開催を予定しております。しかし、茨城県及び筑波大の要請、新型コロナウイルス感染症の状況を鑑み、対面＋オンラインのハイブリット型で開催します。その判断は T-ACT 推進室と行います。

オンライン開催候補日

第 2 回（6/6 予定）

<持ち物>

- ・課題本
- ・メモ
- ・筆記用具

<当日のスケジュール（18:30～）>

- ①お気に入りの本とともに自己紹介
- ②感想と気になった点を元に課題本についての読書会
- ③解散

<形式>

オンラインで開催します。可能な方はカメラはオンにして参加してください。

質問などありましたらマイクをオンにして質問するか、チャットにてお伝えください。入る際の名前は本名でもニックネームでもどちらでも構いません。

活動場所

図書館情報エリア支援室に確認したところ 7A 棟 1F の教室で対面での開催を承諾を得ているので、企画承認後教室を使用できる見通しです。しかし、茨城県及び筑波大の要請、新型コロナウイルス感染症の状況を鑑み、対面＋オンラインのハイブリット型で開催します。その判断は T-ACT 推進室と行います。

オンラインでは teams を利用する予定です。

図書館情報エリア支援室に企画で使うための部屋について伺ったのですが、一ヶ月以上先の部屋の確保については受け付けておらず、申請日までには部屋が確保できないです。

※対面実施の判断については茨城県及びつくば市、筑波大学の要請等を確認し、大学の感染症対策に応じて慎重に判断する。開催 1 週間前に T-ACT と相談して決定する。

活動期間

2022/04/01～2022/09/30

対象

学生・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：和田ひかり（心理学類 3 年）

P：池内淳（図書館情報メディア系）

備考**【感染防止対策】**

- ・「読書をしよう！」活動は対面での実施も行うため、実施については茨城県及びつくば市、筑波大学の要請等を確認し、大学の感染症対策に応じて判断する。
- ・対面の活動を中止する要請が出た場合、企画は完全オンライン実施とする。
- ・感染防止策が徹底されているかについては、パートナー教員および T-ACT に確認する。
- ・企画を実施するかの判断については、開催 1 週間前に T-ACT と相談して決定する。
- ・前日に体調の記録確認をパートナー教員及び T-ACT に報告する。体調不良がある場合は活動を停止する。
- ・参加者は過去 2 週間以上の健康観察記録を付ける。当日は担当者が会場で記録を回収、管理する（いつでも提出できる状態にしておく）。
- ・活動の際は出入り、物品を触る前などで随時手指の消毒を行う。また、ハンドソープも用意しておき、手洗いをしてもらう。
- ・各自マスクを着用する。

- ・部屋の換気を行い、密集・密閉を避け、飲食を禁止する。大声を出して会話しないようにする。
- ・家を出る前に検温してもらい、体調不良者は出席しない。
- ・参加者が座る位置を、ソーシャルディスタンス(2m)を考慮して予め設定しておく。
- ・活動の以後2週間は体調に憂慮し、参加者に問題があれば報告してもらう。
- ・活動形態、場所、参加者、人数、内容をまとめた活動記録を作成し、担当者が管理する。
- ・その他筑波大学およびT-ACTの設定した感染防止対策ガイドラインに従う。

【本企画の広報について】

- ・T-ACTの許可を得たポスター・チラシの学内に掲示する。また、SNS(twitter)を活用した広報も行う。

【参加に際しての注意事項】

- ・記念撮影について

本活動の様子は、今後の「読書会をしよう！」活動の記録、広報活動などに使用するために写真撮影を行います。

参加者の皆様は、撮影についてご同意いただけない場合はプランナーにその旨をお伝えください。

使用用途は本活動の広報活動や、記録用のみとさせていただきます。

活動報告

実際の活動内容

第1回(5/23) 対面読書会

- ・課題図書：山田詠美「僕は勉強ができない」

第2回(6/13) オンライン読書会

- ・課題図書：カミュ「異邦人」

第3回(6/20) オンライン読書会

- ・課題図書：谷崎潤一郎「春琴抄」

第4回(7/2) オンライン読書会

- ・課題図書：三浦綾子「塩狩峠」

第5回(7/16) オンライン読書会

- ・課題図書：ゲーテ「若きウェルテルの悩み」

第6回(8/6) オンライン読書会

- ・課題図書：井伏鱒二「黒い雨」

第7回(8/20) オンライン読書会

- ・課題図書：上橋菜穂子「精霊の守り人」

第8回(8/27) オンライン読書会

- ・課題図書：NHKスペシャル取材班「超常現象：科学者達の挑戦」

第9回(9/3) オンライン読書会

- ・課題図書：恩田陸「夜のピクニック」

第10回(9/10) オンライン読書会

- ・課題図書：小野不由美「残穢」

以上の全10回、10冊の課題図書についての読書会を行った。

読書会は各回90分程度で本を読んだ感想、気になった点などを参加者が自由に話し合う方式で実施した。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒100%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

参加者の不足。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

twitter等で呼びかけを行ったり、既存の参加者に友人への声かけをお願いすることで、参加者の増加を図った。結果としては、新規参加者の獲得に成功したので解決したといえる。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

私は、以前から本活動と同様の内容(読書会)をサークルとして行っており、T-ACTは活動の刷新や広報を目的として企画した。本活動を通して、読書体験を共有することの楽しさ、嬉しさを改めて実感するとともに、企画を実世界の活動として成立させることの難しさを痛感する良い機会となった。

読書会は、われわれ青年期の学生が内面にため込んでしまう考えや思いを言語化し、その場しのぎでない深い

話題を掘り下げることのできる場である。確かに読書それ自体は孤独な趣味として満足できるが、同年代の他者と語り合う楽しさもあると知れた。また、活動をかたちにするとき、企画（詳細な活動内容）、広報、対面なら場所のセッティングなど少くないプロセスがあり驚いた。このようなプロセスをこなすプランナーの大変さを知れたのは貴重な経験である。T-ACT は私にとって、読書の新たな楽しみ方および企画運営の大変さを知れた貴重な体験であった。

参加者への影響

当初、読書会というものに参加したことがない人ばかりで感想を話すのが難しい場面も見受けられたが、回を追うごとに自由闊達な意見を話し合える場を参加者の相互作用で作り出せるようになった。読書会の雰囲気一体感が出てきたように感じた。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

広報を頑張ってください。人がいないと始まりません。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

良かったのは企画を添削していただける点です。企画を検討する機会として非常に有用だと思いました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5

Campus Asia6 秋の音楽祭 ～ Musication night ～ (22002P)

T-ACT プランナー 宮本 有美 (人間エリア支援室 世界展開力事業プログラムコーディネーター)

活動目的

世界展開力事業 (Campus Asia6) <https://campusasia6.education.tsukuba.ac.jp/> のプログラムでは、現在アジア各国 (中国、韓国、タイ、インドネシア) から14名の留学生が来日しており、地球規模課題解決のための教育政策へ繋げるための学際的・国際的協働の研究交流活動について筑波大学で学んでいます。音楽は言葉の壁を超えた世界共通言語ではないかと思っています。純粋に音楽を楽しみながらお互いを知るコミュニケーションが出来たらと願いこの企画を発案しました。ミュージック+コミュニケーション=Musication ♪で国や文化を超えた交流を行うことを目標としたいと思います。

Currently, in the Campus Asia 6 program < <https://campusasia6.education.tsukuba.ac.jp/> >, 14 students from Asian countries (China, Korea, Thailand, and Indonesia) are currently visiting the University of Tsukuba and studying interdisciplinary and international collaborative research exchange activities to apply this knowledge to educational policies for solving global issues. We believe that music is a universal language that transcends language barriers.

We conceived this project with the hope that we could communicate and getting know each other while genuinely enjoying music.

Music + Communication = Musication ♪

We hope to have a goal of mutual exchange, transcending the country and cultural differences with this Musication event.

具体的な活動計画

[活動内容]

- ・活動内容：Campus Asia6留学生や関係者を対象に音楽（楽器、歌、合唱、ダンス）などの発表や紹介を通じてコミュニケーションを図る
- ・出演者・参加者：CA6留学生、日本人学生、事務局員、関係教職員、
- ・対象人数：30名位まで
- ・日時：2022年11月24日（木）18：00-20：00
- ・場所：2A棟 306室（音楽室）
- ・練習日時：11月～週2、3回 教室の空日を予約
- ・プログラム内容（案）：ピアノ、ダンス、コカリナ、ウクレレ、ハンドベル、各国の歌、合唱 他

[活動準備]

1. CA6学生を中心に参加者（出演者、参加者）を募り、「事前登録制」とする
2. プログラムとポスターを作成する
3. プランナー、オーガナイザーは2週間前からの健康記録をとる
4. 練習について：練習場所と時間、感染症対策も含めた使用時の注意事項を告知する
5. 開催当日は「T-ACT 新型コロナウイルス感染対策チェックリスト」に沿って、参加者の体調を確認する
6. 開催2週間後にT-ACT推進室に報告を行う

[Activities]

- ・Activities: Communication through presentations and introduction of music (instruments, songs, chorus, dance, etc.) for Campus Asia6 international students and related people.
- ・Performers/participants: CA6 students, Japanese students, administrative staff, related faculty staff, etc.
- ・Number of participants: Up to 30 people
- ・Date: November 24, 2022 (Thursday) 18:00-20:00 (tentative)
- ・Place: Bldg. 2A, Room 306 (Music Room)



- ・ Practice dates: 2 or 3 times a week starting in November, on days when the classrooms are available.
- ・ Draft program: Piano, dance, kocarina, ukulele, handbells, international songs, chorus, etc. [Prepare activities].
- 1. Call for participants (performers and attendees), mainly CA6 students, and “pre-register” all.
- 2. Prepare the program and posters
- 3. Planners and organizers take health records for 2 weeks prior to the event
- 4. As for practice: announce the place and time of practice, and precautions for its use, including infection control
- 5. On the day of the event, check the physical condition of participants according to the “T-ACT New Coronavirus Infection Control Checklist”
- 6. Report to the T-ACT Promotion Office two weeks after the event

活動場所

2A 棟 306室（音楽室）

活動期間

2022/11/01～2023/01/31

対象

学生・教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：DUANGNGERN PORNPISUT Campus-Asia6 プログラム学生（人間総合科学学術院教育学学位プログラム）
P：大手昇一（人間エリア支援室）、福田真巳、北村恵子（世界展開力事業事務局）

備考

< 感染防止対策 >

- ・ 「T-ACT 新型コロナウイルス感染対策チェックリスト」に基づいて準備を行う
- ・ 参加者は「事前登録制」とする
- ・ 対面の活動を中止する要請が出た場合、企画を中止・延期する
- ・ 体調不良がある場合は活動を停止する
- ・ ブランナーとオーガナイザーは、開催前 2 週間の体温測定を行い、体調の記録をする
- ・ 活動の際は出入りの際、物品を触る前などで随時手指の消毒を行うこととします。
- ・ 活動中のマスク着用を促す
- ・ ソーシャルディスタンス（2m 程度）を保つ
- ・ 部屋の換気を行い、密集・密閉を避け、飲食を禁止する。大声を出して会話しないよう伝える。
- ・ 使用物品は、個々で持参し、共用しない
- ・ 活動の以後 2 週間は体調に憂慮し、参加者に問題があれば報告してください。
- ・ 活動形態、場所、参加者、人数、内容をまとめた活動記録を作成し、担当者が管理する。

< Infection prevention measures >

- ・ Prepare the event based on the “T-ACT New Coronavirus Infection Control Checklist”
- ・ Participants must be “pre-registered”.
- ・ When there is a request to cancel a face-to-face activity, the project will be canceled or postponed.
- ・ If there is a physical condition, the activity will be suspended.
- ・ Planners and organizers will record their physical condition for two weeks prior to the event.
- ・ Encourage the wearing of masks during activities.
- ・ Maintain a social distance (approximately 2 meters).
- ・ Ventilate the room, avoid crowding and sealing and prohibit eating and drinking. Tell them not to talk loudly.
- ・ Bring own items and will not share them.
- ・ Concerned about your physical condition for two weeks after the activity and report any problems to the participants.
- ・ Keep an activity record, location, number of participants, number of people, and details, and have the person in charge maintain the record.

活動報告

実際の活動内容

世界展開力事業（Campus Asia6）＜<https://campusasia6.education.tsukuba.ac.jp/>＞のプログラムでは、2022年10月～12月までの約3カ月間、アジア各国（中国、韓国、タイ、インドネシア）から14名の留学生が来日し、筑波大学で地球規模課題解決のための教育政策へ繋げるための学際的・国際的協働の研究交流活動について学びました。

国籍、文化、年齢、性別、言葉、専攻の違いを超えて互いに交流を深めるきっかけとなるイベントが何かないかと模索していました。そして、世界の共通言語である音楽を通じて、純粹に音楽を楽しみながらお互いを知るコミュニケーションが出来たらと願いこの企画を発案し、ミュージック＋コミュニケーション＝Musication♪と名付けました。

留学生に呼びかけたところ、全員から参加希望がありました。夕方の時間に週に2～3日音楽室を借りて何度か練習の時間を設けたところ、積極的な参加がありました。特筆すべき所は、職員のリードのもと、多国籍混成ハンドベルチームが結成されたことです。全員がハンドベルは初めてで、ドキドキしながらのスタートでしたが、後半には学生同士でも教え合う場面も見られ、本番では素晴らしい演奏を奏でられるまでになりました。また、各国の母国語の歌と職員のピアノ伴奏のコラボによる交流においても、互いの国の曲を知る素敵なきっかけとなりました。

本番では、Campus Asia6の留学生はもちろん、筑波大の日本人学生、多くの留学生の方々、教職員など、総勢31名が参加する祭典となりました。バラエティに富んだプログラムは、職員チームによる合奏、タイチームによる歌、ブラジルからの留学生による歌とギター、多国籍ハンドベルチームの名演奏、4か国の混成ダンスチームによるパフォーマンス、参加者全員による熱い戦い「椅子取りゲーム」、インドネシアチームによる民謡、各国（中国・韓国・日本・タイ・インドネシア）の民族楽器の紹介プレゼンテーション、韓国人留学生によるテノール歌唱とウクレレ、教職員による「もみじ」歌唱、最後は参加者全員で「カントリーロード」を歌いました。

たくさんの笑顔と拍手に囲まれた温かくも心に残る交流になったと思います。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒100%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

コロナ禍ということもあり限られた部屋の広さの中でパフォーマーと観客の間の距離をとること。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

事前に舞台と客席との距離を測り床にテープを貼って感染予防に備えた。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

全てが初めて尽くして手探りで始めた企画でしたが、多くの協力者のお力添えのもと、参加者全員にとって特別な Musication Night ♪ を過ごして頂けたのではないかと思います。

音楽の不思議な力に後押ししてもらい、各自が練習の時点から少しずつ一体感を感じ、国籍を超えた交流となったのではないかと思います。

少し大げさな感想になってしまうかもしれませんが、Musication ♪ を通じて、様々な国の方々が一つの目標に向かって互いに学び合い、助けあい、喜びあうことで生まれる力や音楽の素晴らしさはこれからの世界に必要なことなのかなと感じました。

参加者への影響

本番も勿論ですが、練習を経て交流を深めていく中で、参加者の互いの距離が少し近くなった様に感じました。留学生の中には帰国後も「カントリーロード」を聞くと筑波大での日々を思い出すと語ってくれました。

各国の歌や音楽、そして民族楽器の紹介では夫々が興味深く見聞きしている場面が印象的でした。（パフォーマーとしても、オーディエンスとしても、身近な海外の友人の文化に触れることが相互理解の一因になったかもしれません。）

大変多忙な中で、準備を進めてくれた参加者の皆さんに感謝しています。

また、運営の面でも場所を提供して下さった先生や、設置にご協力頂いた教職員の皆様に感謝申し上げます。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

私達のチームも「初めてだけど大丈夫かなあ？参加してくれる人はいるかなあ？」と不安な気持ちからスタートしましたが、実際始まってみると大変多くの方の協力の下、予想以上の実り多い音楽祭となりました。もし、「どうしようかなあ？」と迷っていらっしゃる場合には、まずははじめてみることをお勧めします。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

コロナ禍で感染症予防をしながらの開催が難しい状況のもと、丁寧に相談にのって下さり、物品を貸出して下さったり、心強いサポートに深く感謝しております。機会があれば、是非第二回開催に向けてご相談したいと思います。ありがとうございました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか?⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか?⇒5



人工言語作成プロジェクト～筑波大生の「共通語」を一から作ろう！～(22003A)

T-ACT プランナー 尾坂 拓郎（芸術専門学群3年）

活動目的

言語学や語学の学習が好きで、人工言語を作ることに興味をもったのでこの企画を提案しました。

筑波大生の『共通語』をコンセプトに、音素・文法・語彙など一から言語を作りたいと思っています。一番の目的は、「自分たちの手で言語を作る」というロマンある活動を楽しむことです。また、未知の言語を習得することの楽しさを多くの方に知ってほしいと思っています。そこで、将来的には、作った言語を筑波大生に教える講座などのイベントもしたいと考えています。もしかしたら筑波大生としてのアイデンティティを育み、学生同士の一体感を生むことにも繋がるかもしれません。

【人工言語とは】

人工言語とは、その名の通り人為的に作られた言語のことを言います。日本語や英語など、みなさんが知っている大抵の言語は自然発生した言語であり、長い歴史の中で文法や語彙が形成され、変化していつています。一方人工言語は、個人や少人数の団体が意図的に文法や語彙などを決定するものなので、文法や語彙が変化しにくいのが特徴です。

【人工言語のメリット】

人工言語は、当たり前ではありますが誰の母語にもなりません。つまり、どんな人でも外国語として勉強し習得しなければ話せるようにならないため、全ての人が共通のスタートラインに立っています。ある特定のコミュニティで英語や日本語などの自然言語が共通語になると、その母語話者がどうしても有利になってしまいます。一方、人工言語はどんな人にとっても中立的な存在です。その点で人工言語は共通語とするのに向いている言語と言えるかもしれません。

具体的な活動計画

< 定期ミーティング >

毎週土曜 or 日曜14:00～16:00

- ・言語の作成 (Teams で議事録を共有)
- ・辞書の作成 (デスクトップ版 ZpDIC を用いる。)
- ・文字とそのフォントの作成

< 広報活動 >

- ・SNS で活動を発信する。

参加を希望される方は本ページの下記「参加希望・問い合わせ」からご連絡ください。

活動場所

人文エリア支援室に確認したところ、1B201,1B204,1B304,1B401,1B404が貸出可能な教室であるので、その中から空き状況を見て使用できる見通しです。

対面活動を中止する茨城県及び筑波大学の要請が出た場合はオンライン開催とする。

活動期間

2022/04/01～2022/09/30

対象

学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：溝口圭太（人文学類4年）、竹内翔一郎（人文学類3年）、森伸之介（人文学類2年）

P：池田潤（人文社会系）



備考**【感染防止対策】**

- ・対面での実施については茨城県及びつくば市、筑波大学の要請等を確認し、大学の感染症対策に応じて判断する。
- ・対面の活動を中止する要請が出た場合、企画は完全オンライン実施とする。
- ・感染防止策が徹底されているかについては、パートナー教員および T-ACT に確認する。
- ・企画を実施するかの判断については、開催 1 週間前に T-ACT と相談して決定する。
- ・前日に体調の記録確認をパートナー教員及び T-ACT に報告する。体調不良がある場合は活動を停止する。
- ・参加者は過去 2 週間以上の健康観察記録を付ける。当日は担当者が会場で記録を回収、管理する（いつでも提出できる状態にしておく）。
- ・活動の際は出入り、物品を触る前などで随時手指の消毒を行う。
- ・各自マスクを着用する。
- ・部屋の換気を行い、密集・密閉を避け、飲食を禁止する。大声を出して会話しないようにする。
- ・家を出る前に検温してもらい、体調不良者は出席しない。
- ・参加者が座る位置を、ソーシャルディスタンス (2m) を考慮して予め設定しておく。
- ・活動の以後 2 週間は体調に憂慮し、参加者に問題があれば報告してもらう。
- ・活動形態、場所、参加者、人数、内容をまとめた活動記録を作成し、担当者が管理する。
- ・その他筑波大学および T-ACT の設定した感染防止対策ガイドラインに従う。

活動報告**実際の活動内容**

活動日時：毎週土曜14:00-16:00

活動場所：1B204、1B304

5月から7月までは毎週土曜日に対面でミーティングを行い、夏休み中は Teams を用いてオンラインで活動した。9月はミーティングを週2回に増やした。

まず、この人工言語を「どこで」「誰に」「どのように」使ってもらうために作るのか、どのような言語を目指すのかというビジョンを参加者に共有した。その上で語順や音素などを一から話し合いで決めていった。何度も修正を重ねながら大まかな文法が決まっていき、単語の数も250以上になった。辞書の作成にはオンラインのソフト ZpDIC を用いた。当初の計画では SNS での発信をして参加者を募集しようとしていたが、言語の作りははじめの段階では少人数の方が話し合いが進みやすいということで、あえて発信をしなかった。今後は単語数をどんどん増やす必要があるため、第2弾では多くの方に参加してもらうために積極的に SNS での発信を行いたいと考えている。また、文字やフォントの作成も第2弾に回すこととした。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒60%

実施中の困難と解決策**実施中に困ったこと**

- ・参加者の都合がつかず、ミーティングをするのに十分な人数が集まらない日が何度かあった。そのためかなり進みが遅くなってしまった。
- ・議事録を取ってはいたが、何度も音韻や文法の変更を重ねているため自分達でも把握しきれないことがあった。特にミーティングの欠席者が議事録だけ見て内容を理解するのは困難だったように感じる。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

- ・9月は土曜に加えて火曜にもミーティングを行い、遅れを取り戻した。
- ・音韻・文法についてまとめたファイルを1つ作成し、そこに加筆修正していく形にすることで議事録の代わりとした。

活動の体験について**自分にとってどんな体験であったか**

人工言語を作るという活動は、実は1人でもできることではあるが、人と協力することで色々なアイデアを出し合うことができた。自分の専攻は言語学ではないため、言語学専攻の学生に協力してもらうことで非常に良い刺激になった。他にも色々な学類の学生と協力することができれば、自分たちだけでは思いつかないようなアイデアが生まれるのではないかなと思う。また、この活動を通して改めて言語の面白さを実感できた。色々な人に言語の面白さを知ってもらうためにも、今後は宣伝活動も含め積極的に活動をおこなっていききたいと思う。

参加者への影響

だんだんとミーティングに参加する人の数が減っていった。

人工言語を作るのは初めてという人が多く、今までにない経験ができたのではないかと思う。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

当初の計画通りに進めていくのは簡単ではないので、臨機応変に対応することが必要になります。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

プロジェクトの計画段階で色々なサポートをしていただいたのが非常にありがたかった。

協力者を募るとき、個人的な活動よりも T-ACT の活動である方が信頼が得やすく、人が集まりやすい。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感ありましたか？⇒4

活動目的

筑波大学 (社会学類・国際総合学類) でのゼミ活動を行ってきた。ゼミの卒業生も数多く社会で活躍している。ゼミでどんなことを研究しているか、その後どのように大学での経験を生かして社会で活躍しているかについては、現在の学生を含めて実はほとんど知られていない。ゼミ生の卒業論文の話や卒業生の活動を人に話すと、とても多くの人に興味をもってもらえる。しかしそれを広く知ってもらう機会がない (毎年学園祭でゼミの学内研究企画をだしていたが、ここ 3 年は行っていない)。そこで、ポッドキャストでの配信を通じて、ゼミでの学生生活や研究・地域での活動、また卒業生がどのような活躍をしているかについて知ってもらってはどうかと考えた。筑波大学でのゼミの様子や留学生活・研究・地域貢献などを発信していくことを通じて、多くの人に筑波大学に興味をもってもらいたい。

具体的な活動計画

【配信頻度】

1 ～ 4 週間に 1 回のペースで配信を行う予定。

【プログラム】

- ①挨拶・紹介 (0 ～ 5 分)
- ②ゲスト・トーク (5 ～ 25 分)
- ③挨拶 (5 ～ 30 分)

※パーソナリティ・ゲストは随時募集 (同意書を用いて出演者にメールにて承諾を得る。同意した旨の返信メールを保存)

【収録方法】

- ・ Zoom などを用いたオンライン収録。
- ・ 配信形式はポッドキャスト。使用するアカウントは本企画管理。
- ・ 配信予定テーマ (ドイツ・フランスでの留学生活紹介、ゼミ生が行う大学・地域貢献活動、卒業論文紹介、ハンガリー留学生によるハンガリー紹介、卒業生の仕事紹介など)

活動場所

オンライン環境のある自宅・研究室等

活動期間

2022/11/09～2023/03/31

対象

学生・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O: 野津真衣 (国際総合学類 4 年)

備考

【感染防止対策】

- ・ 対面で打合せ、収録等を行う場合は、茨城県及びつくば市、筑波大学の要請等を確認した上で大学の感染症対応ガイドランに準じた活動を行う。
- ・ 対面活動を中止する要請が出た場合、打合せ、収録等は完全オンライン実施とする。
- ・ 感染防止策が徹底されているかについては、プランナー自身で確認し、適宜 T-ACT へ相談・報告する。
- ・ プランナー、オーガナイザーの体調記録確認を T-ACT に報告する。体調不良がある場合は活動を停止する。
- ・ 参加者は過去 2 週間以上の健康観察記録を付ける。当日は担当者が会場で記録を回収、管理する (いつでも提出できる状態にしておく)。
- ・ 活動の際は出入り、物品を触る前などで随時手指の消毒を行う。
- ・ 各自マスクを着用する。
- ・ 部屋の換気を行い、密集・密閉を避け、飲食を禁止する。大声を出して会話しないようにする。
- ・ 家を出る前に検温してもらい、体調不良者は出席しない。
- ・ 活動の以後 1 週間は体調に憂慮し、参加者に問題があれば報告してもらう。
- ・ 活動形態、場所、参加者、人数、内容をまとめた活動記録を作成し、担当者が管理する。

・その他筑波大学および T-ACT の設定した感染防止対策ガイドラインに従う。

活動報告

実際の活動内容

2022年12月より筑波大学 TY チャンネルの収録を開始した。

筑波大学からの留学・海外インターン体験や、逆に海外から筑波への留学体験、卒業研究の紹介などを伝えることで、筑波大学での学生生活を多くの人々に紹介してきた。

海外留学シリーズ第一弾 ドイツ・ケルン大学編

海外留学シリーズ第二弾 フランス ボルドー大学編

海外留学シリーズ ドイツ・デュッセルドルフの留学生活

海外留学シリーズ：日本人ドイツ留学者3名+ドイツ人日本留学者がドイツを語る座談会

海外インターン ミラノ・ファッション・ウィークで働く

卒業研究シリーズ：サッカーの指導者養成システムの比較研究

卒業研究シリーズ：環境問題が変える食生活 --- ドイツの菜食市場拡大

卒業研究シリーズ：循環型経済に進むフランス・AGEC 法の衝撃

卒業研究シリーズ 日本の非正規・貧困問題に取り組む全国ユニオンとその限界

外国人留学生シリーズ第一弾：ハンガリーからみた日本の学生生活

外国人留学生シリーズ第二弾 ハンガリー人が紹介するハンガリーと中東欧の歴史

ゼミ生活動シリーズ第一弾・クラウドファンディングと寄付で5000万円資金調達

ゼミ生活動シリーズ第二弾：南米コロンビア・ロスアンデス大学研修報告

ゼミ活動シリーズ：伝統的日本酒・生酛の酒造りを丸ごと紹介

2023年1月より、Anchor、Spotify だけでなく、Apple Podcast、Amazon Music での配信も開始した。

現在の再生数は200回程度と少人数であるが、大学生、23-34歳を中心に、高校生や45-59歳の視聴も伸びている。

視聴者の2割は米・独・仏・デンマーク・スウェーデン、シンガポール、モロッコの海外在住者となっている。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒100%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

仕事が忙しくて自分一人で行う編集の時間がなかなかとれなかった。

チラシで広報しようと考えたが、協力してくれる人がおらず頓挫した。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

T-ACT でチラシを作成してくれるスタッフを探してくれることになったが、うまく見つからなかったのか、連絡なく、進まず。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

田中洋子ゼミの活動を多少とも紹介できたのはよかった。

自分が緊張しすぎて、固い口調になってしまった。いつになったら慣れられるのかわからない。

参加者への影響

聞いてくれた何人かの視聴者から直接、とても面白かったという感想を受けた。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

忙しくてもやる。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

いろいろ支援があると期待していたが、特に何もなかったのが残念。せめて広報活動だけでも手伝ってほしい。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5

● サッカーボールをパスしてみんなと対話しよう！ 2nd ステージ

Pass the soccer ball and interact with everyone! 2nd Stage (22005P)

T-ACT プランナー 北條 英次（体育センター）

活動目的

本企画「サッカーボールをパスしてみんなと対話しよう！

Pass the soccer ball and interact with everyone!」は、スポーツ、とくに「サッカー」の力で、コロナ禍により学内の交流が停滞した状況を打破して、いこうという目的で2021年12月から活動を開始しました。

活動開始後はほぼ週1回、定期的な練習を継続的に実施しています。また、2022年3月には、「多文化共生促進ワークショップーサッカーボールでキャンパス内の見えない壁を壊していこうー Multi-cultural promotion workshop -Kick the soccer balls to break the invisible walls of the campus-」を開催しました。学生、教職員含め10数名に参加していただき、有意義な機会をもうけることができました。

活動に加わってくれる人数も順調に推移し、2022年6月で70名程度になっています。本企画で集まったメンバーでサッカーチームを結成し、チーム名を「KickChat FC」と名付けました。春季スポーツ・デーのフットサル競技に参加するなど、活動の幅を広げています。

なお、この6ヶ月間は、下記計画の②ウェビナーと③フットサル交流イベントの実現に向けて注力していきたいと考えています。

引き続きスポーツの持つ力を信じて、ボールをパスしあうという「対話」を通し、キャンパス内の異文化理解の深化と多文化共生の促進を進めていきたいと思えます。

We started our activities “Pass the soccer ball and interact with everyone!” in December 2021 with the aim of using the power of sports, especially “soccer,” to break through the stagnation of interactions on campus caused by the Corona disaster.

Since the start of activities, regular practice sessions have been held almost once a week continuously. In March 2022, we held a “Multi-cultural promotion workshop -Kick the soccer balls to break the invisible walls of the campus-”. More than 10 students, faculty, and staff participated in the workshop, which proved to be a meaningful opportunity.

The number of participants has been steadily increasing, and as of June 2022, approximately 70 people have joined our activities. A soccer team was formed with the members gathered through this project and named “KickChat FC”. The team has expanded its activities to include participation in the futsal event of the Spring Sports Day.

In addition, we would like to focus on the realization of (2) webinar and (3) futsal exchange event in the following plan during these 6 months.

We continue to believe in the power of sports, and through the “dialogue” of passing the ball to each other, we hope to deepen cross-cultural understanding and promote multicultural conviviality on campus.

具体的な活動計画

本企画の2022年7月から12月にかけての活動計画は以下のとおりです。

①サッカー練習を通しての異文化交流

日時：毎週土曜日17時から2時間程度を予定

場所：筑波大学第2サッカー場

内容：ウォームアップ、基礎練習、ゲーム形式など

未経験の方には経験者がサポートします。

各自持参するもの：運動できる服装、サッカーシューズ（スパイク付きのものが望ましいです）、飲み物（ボール、感染対策グッズは当方で準備します）

お願い：練習日の2週間前から健康観察をとり、体調がすぐれないときは参加をお控えください。

②国際交流理解促進ウェビナー

日時：2022年9月

場所：GSI 棟セミナー室と Zoom のハイブリッド形式

内容：国際的に活躍する筑波大学卒業生複数名をゲストスピーカーに招き、スポーツ（サッカー）、多文化、国際交流をキーワードに対談形式のウェビナーを行います。



③フットサル交流イベント

日時：2022年12月

場所：筑波大学第2サッカー場

内容：本学の体育施設の開放方針によりますが、学外者の利用制限が解除されたら、フットサルの1Day トーナメントを開催します。主に茨城県内在住の外国籍の方を参加対象とし、大会を通してキャンパス内外の国際交流を促進したいと思います。

The planned activities of this project from July 2022 to December 2022 are as follows

1) Cross-cultural exchange through soccer practice

Date: Every Saturday from 17:00 for about 2 hours

Location: University of Tsukuba 2nd soccer field

Content: Warm-up, basic practice, game format, etc.

Experienced players will support those who have no experience.

What to bring: Wear clothes you can exercise in, soccer shoes (preferably with spikes), drink (we will prepare ball and items to prevent infection)

Please note: Please take a health observation two weeks prior to the practice date and refrain from participating if you are not feeling well.

2) Webinar to promote understanding of international exchange

Date: September 2022

Location: Hybrid format of GSI building seminar room and Zoom

Content: Guest speakers will be University of Tsukuba alumni who are internationally active. The webinar will be a dialogue style with the keywords of sports (soccer), multiculturalism, and international exchange.

3) Futsal Exchange Event

Date: December 2022

Location: University of Tsukuba 2nd soccer field

Content: Depending on the University's policy of opening its athletic facilities to the public, a 1-day futsal tournament will be held once the restrictions on use by off-campus players are lifted. We would like to promote international exchange on and off campus through the tournament, mainly targeting international residents living in Ibaraki Prefecture.

活動場所

引き続き体育センターの許可をとり筑波大学第2サッカー場を使用します。
University of Tsukuba 2nd soccer field

活動期間

2022/07/01～2022/12/31

対象

学生・教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：松井新（国際総合学類）、山口雅也（心理学類）

P：小井土正亮（体育系）

備考

（スポーツ保険）

本学学生（学群生、大学院生）は学生教育研究災害傷害保険（略称「学研災」）にて補償されます。研究員、教職員については各自 任意のスポーツ保険に加入することを強くお勧めします。

（感染防止対策）

- ・実施については茨城県及びつくば市、筑波大学の要請等を確認し、大学の感染症対策に応じて判断する
対面の活動を中止する要請が出た場合、企画を中止・延期する
- ・感染防止策が徹底されているかについては、パートナー教員および T-ACT に確認する
企画を実施するかの判断については、開催 1 週間前に T-ACT と相談して決定する
- ・前日に体調の記録確認をパートナー教員及び T-ACT に報告する
体調不良がある場合は活動を停止する
- ・参加者は過去 2 週間以上の健康観察記録を付ける

当日は担当者が会場で記録を回収、管理する

(いつでも提出できる状態にしておく)

- ・活動の際は出入りの際、物品を触る前などで随時手指の消毒を行う
また、ハンドソープも用意しておき、手洗いをしてもらう
- ・練習時以外は各自マスクを着用する
- ・ウェビナー開催時は部屋の換気を行い、密集・密閉を避け、飲食を禁止する。大声を出して会話しないようにする
- ・家を出る前に検温してもらい、体調不良者は出席しない。
また、事前に申し込みした参加者のみ出席可とする。
- ・参加者が座る位置を、ソーシャルディスタンス(2m)を考慮して予め設定しておく
- ・活動の以後2週間は体調に憂慮し、参加者に問題があれば報告してもらう
- ・活動形態、場所、参加者、人数、内容をまとめた活動記録を作成し、担当者が管理する
その他筑波大学およびT-ACTの設定した感染防止対策ガイドラインに従う

(Sports Insurance)

University students (undergraduate and graduate students) are covered by the Personal Accident Insurance for Students Pursuing Education and Research (abbreviated "Gakkensai"). It is strongly recommended that researchers and faculty members purchase their own sports insurance.

(Infection prevention measures)

Confirm requests from Ibaraki Prefecture, Tsukuba City, and Tsukuba University, and make decisions according to the university's infection prevention measures. If there is a request to cancel face-to-face activities, cancel or postpone the project.

Confirm with partner teachers and T-ACT to ensure that infection prevention measures have been thoroughly implemented. Consult with T-ACT one week prior to the event to determine if the project will be implemented.

Report to the partner teacher and T-ACT the day before the event to confirm the physical condition of the participants.

Participants should keep a health record for the past two weeks or more. On the day of the activity, the person in charge will collect and manage the records at the venue.

Disinfect hands as needed before entering, exiting, and touching items during the activity.

Hand soap should be available for hand washing. Wear masks except during practice.

During the presentation, the room should be ventilated, not crowded or sealed, and no eating or drinking should be allowed. Do not talk loudly.

Participants have to check body temperature before leaving home. Only participants who have applied in advance will be allowed to attend.

The position where the participants will sit should be set in advance considering the social distance (2m).

In the first two weeks of the activity, be concerned about the physical condition of the participants and ask them to report any problems.

Make a record of the activity, including the type of activity, location, participants, number of participants, and contents, and have the person in charge manage it.

Follow the infection prevention guidelines set by the University of Tsukuba and T-ACT.

活動報告

実際の活動内容

「サッカーボールをパスしてみんなと対話しよう! Pass the soccer ball and interact with everyone!」に引き続き、キャンパス内の異文化交流と多文化共生のさらなる促進のため、企画を継続しました。2nd Stageでは定期的な練習のほか、アスレチックデパートメントのフューチャークリエイションプログラムと連動して近隣の外国人と日本人の小学生を対象に英語で行うサッカースクールと、筑波大学生ら若者にグローバルな挑戦を促すウェビナーを開催しました。また、「KickChat FC」としてスポーツデーサッカー種目に出場したり、テンプル大学ジャパンフットサルサークルと交流試合を行うなど、活動の幅を徐々に広げました。ウェビナーについては別企画を立てたのでそちらで活動詳細を報告します。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒100%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

第2サッカー場の予約が取りづらく、定期的練習の継続が困難な時期がありました。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

活動場所を春日体育館に移し、室内フットサル練習を行いました。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

小学生対象のサッカー教室の発案は私でしたが、学生が企画実現まで尽力し見事成功させ、改めて学生の能力に驚嘆しました。

参加者への影響

サッカー教室では、たくさんの子どもたちの笑顔を目の当たりにすることができ、学生は開催して良かったという達成感や満足感を得るとともに、次回開催へのモチベーションとなっていました。

未来のプランナーに伝えたいことがあれば自由どうぞ

T-ACT スタッフはいつでも協力的です。思い立ったらとにかく相談してみましょう。実現までサポートしてくれます。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

企画を続けるにあたり、T-ACT スタッフに色々なアイデアをいただきました。感謝しています。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5



令和4年度筑波大学社会貢献プロジェクト
2022 University of Tsukuba Social Contribution Project

Organized by KickChat FC,
University of Tsukuba Athletic Department
and University of Tsukuba Football Club

Soccer School in English

Date: November 27 (Sun) 8:30-11:30
Place: University of Tsukuba Soccer Field
Target: Elementary school students
Fee: Free

University of Tsukuba Football Club players and international students coach soccer in English!
This school is for children up to elementary school age.
Regardless of nationality.
Feel free to join our school!

Application: Please scan the QR code and Check the details
Deadline: November 22 (Tue)
Contact: hojoeiji@icloud.com

URL: <https://docs.google.com/forms/d/1c17xhghlanJdJlUk0UjEDUvY8tB4RUG0KUSC/edit>

筑波大吃音会 ―ツクスター v2 (22006A)

T-ACT プランナー 青木 瑞樹 (人間総合科学学術院障害科学学位プログラム 博士前期課程2年)

活動目的

本活動は吃音に関心のある方のための「吃音・流暢性障害研究会」と当事者のためのセルフヘルプという2つの側面の活動を行う場です。筑波大学の学生や学外の方に参加いただける会で、吃音のある人の交流及び吃音に関心のある方が当事者とともに知識を深め多様な学びを行うことを目的としています。

筑波大吃音会―ツクスター v1では勉強会、セルフヘルプ活動で計150名の方にご参加いただきました。v2では更なる内容の充実や会の拡大、啓発活動に力を入れていきます。

・1つ目の側面【吃音・流暢性障害研究会】

本企画を通して、勉強会のための「吃音・流暢性障害研究会」を創設します。月1回行われる「吃音・流暢性障害研究会」では、筑波大学人間系障害科学域宮本昌子研究室の宮本昌子先生にご参加いただき、専門的内容から吃音関連の話題など幅広いトピックを扱い意見交換を行います。吃音のない方も参加いただけるため当事者とともに知識や考えを深めることが可能です。吃音に興味のある方、吃音のあるお子さんの親、支援者の方などの参加を想定しています。

・2つ目の側面【吃音セルフヘルプ・グループ】

セルフヘルプの活動では、悩みの共有・意見交換・テーマに沿ったディスカッション・発表練習・レクリエーション・演劇・映画鑑賞など各会によって当事者セルフヘルプ・グループならではの「当事者目線で考える」様々な活動を行います。吃音当事者の方ならどなたでも参加していただけます。

【企画立案の背景】

本企画のプランナーは筑波大学人間系障害科学域宮本昌子研究室に所属する学生です。宮本昌子研究室は音声言語障害の研究・臨床を行う国内で数少ない研究室の1つです。吃音は人口の1%に存在するといわれ、目に見えない障害のため他者に理解されにくく様々な困難を抱えます。吃音の研究や臨床を行う上で豊かな環境であると言える本大学を拠点に吃音当事者やその支援者等の交流・勉強の場を設けたいと考えたことが本企画を行う1番の動機です。吃音・流暢性障害研究会では宮本昌子先生のご協力をいただき研究会を開催でき、非常に有意義な活動になると考えています。

具体的な活動計画

・「吃音・流暢性障害研究会」：参加費：無料

月1回(原則毎月第2週火曜日)、18時15分～20時15分。

筑波大学人間系宮本昌子先生・宮本研究室の所属学生と学内・学外参加希望者で吃音の専門的知識の習得、吃音トピックに関するディスカッション、交流を行います。

・「吃音セルフヘルプ・グループ」：参加費：無料

月1回(原則毎月第4週水曜日)、18時15分～20時15分。

悩みの共有・意見交換・テーマに沿ったディスカッション・発表練習・レクリエーション・演劇・映画鑑賞など各会によって様々な活動を行います。実施方法は、対面とオンラインのハイブリッドで行います。吃音当事者であればどなたでも参加していただけます。

また、今後の活動として筑波大吃音会 ―ツクスター v3にて、ツクスタシンポジウムの開催を計画しております。これは宮本研究室のゼミ生が中心に研究発表を行うシンポジウムで学内・学外の参加者に参加いただける会を目指していきたいと考えています。v2ではこの活動の計画立案を行います。

活動場所

・「吃音・流暢性障害研究会」

オンライン開催(オンライン参加のURLなどの詳細情報はTwitter及び公式HPで告知します)。

・「吃音セルフヘルプ・グループ」



オンラインと対面を活用し、実施します。場所は人間系学系棟 B225（学外者は当面の間オンライン参加のみ）です。参加希望数が教室の定員を越えた場合は、オンラインでの参加を勧めます。オンライン参加の URL などの詳細情報は Twitter 及び公式 HP で告知します。

活動期間

2022/06/30～2022/12/30

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：遠藤優（医学群医学類 4 年）、栗脇杏実（障害科学類 1 年）、柳井孝太（障害科学類 1 年）、中村恭輔（人文学群 1 年）

P：宮本昌子（人間系）

備考

【感染防止対策】

- ・ 吃音・流暢性障害研究会及びセルフヘルプ活動は対面での実施も行うため、実施については茨城県及びつくば市、筑波大学の要請等を確認し、大学の感染症対策に応じて判断する。
- ・ 対面の活動を中止する要請が出た場合、企画は完全オンライン実施とする。
- ・ 感染防止策が徹底されているかについては、パートナー教員および T-ACT に確認する。
- ・ 企画を実施するかの判断については、開催 1 週間前に T-ACT と相談して決定する。
- ・ 前日に体調の記録確認をパートナー教員及び T-ACT に報告する。体調不良がある場合は活動を停止する。
- ・ 参加者は過去 2 週間以上の健康観察記録を付ける。当日は担当者が会場で記録を回収、管理する（いつでも提出できる状態にしておく）。
- ・ 活動の際は出入り、物品を触る前などで随時手指の消毒を行う。また、ハンドソープも用意しておき、手洗いをしてもらう。
- ・ 各自マスクを着用する。
- ・ 部屋の換気を行い、密集・密閉を避け、飲食を禁止する。大声を出して会話しないようにする。
- ・ 家を出る前に検温してもらい、体調不良者は出席しない。
- ・ 参加者が座る位置を、ソーシャルディスタンス (2m) を考慮して予め設定しておく。
- ・ 活動の以後 2 週間は体調に憂慮し、参加者に問題があれば報告してもらう。
- ・ 活動形態、場所、参加者、人数、内容をまとめた活動記録を作成し、担当者が管理する。
- ・ その他筑波大学および T-ACT の設定した感染防止対策ガイドラインに従う。

【その他の規則について】

- ・ セルフヘルプの活動では発言やハラスメントに関すること等の参加マニュアルを作成し、参加規則とする。
- ・ トラブル防止のため参加時に企画運営者のみが閲覧可能な参加者名簿に参加者の名前を書いてもらう。会への参加は匿名でもよい。
- ・ 参加者の個人情報及びプライバシーの管理について、参加者情報は本企画運営に携わるもののみが閲覧し、その管理を徹底する。また、本企画内で取り扱った具体的事例や内容を本企画外で開示することの無いよう上記の参加者マニュアルに記載する。

【本企画の広報について】

- ・ T-ACT の許可を得たポスター・チラシの学内に掲示する。また、SNS（twitter・facebook）を活用した広報も行う。

活動報告

実際の活動内容

本会では、主に 2 つの活動を行いました。①吃音・流暢性研究会（以下、勉強会）、②吃音セルフヘルプ・グループの活動です。それぞれの実際に活動した内容について下記に報告します。

①吃音・流暢性研究会（勉強会）

月に 1 回、計 5 回の会を開催しました。この会は筑波大学人間系の宮本昌子先生と研究室の所属学生及び学外参加者（吃音当事者・保護者・支援者・その他）が参加する会で、会の主な内容は、吃音の基礎的に知識に関する講義形式の勉強会と、架空の事例について支援や関わりを考えるディスカッションです。全てオンラインで実施し、5 回の開催で計 124 名（1 回あたり平均 24 名）の参加者の方に参加いただきました。

②吃音セルフヘルプ・グループ

月に1回、計6回の会を開催しました。この会の参加者は学内・学外を問わず吃音当事者が集い、当事者同士の交流会をする会です。会では、悩みや情報の共有・カードゲームなどのレクリエーションを用いた交流会、マインドフルネスの体験などの活動を行いました。全6回のうち3回は対面・オンラインのハイブリッド形式（対面参加者は学内者に限る）、6回のうち3回はオンライン形式で行いました。6回の実施で70名（1回あたり平均11人）の参加者の方に参加いただきました。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか？⇒70%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

コロナ禍での活動形態の変更：各回は、オンラインと対面（学内）でのハイブリッド開催をしました。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

コロナの状況の中で、より多くの方に会に参加していただけるよう、オンラインと対面（学内）でのハイブリッド開催をしました。

オンライン会場と対面会場を繋ぐハード面の問題（共有モニターやマイクなど）で実施中は困ることがありました。

対面会場でも参加者は各自PCを持ち寄ってオンライン会場と繋ぐという工夫をしましたが、今後の開催に向けてより良い方法を模索中です。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

今回の活動は「筑波大聴音会 ―ツクスター―」の2期目の活動になります。毎月2回の開催で、約半年間コンスタントに会を実施しました。

1期目の活動の参加者数を上回る数の方が参加してくださり、まずは自分の実施している活動が意味のあるものであると実感できて嬉しい気持ちでいっぱいです（参加人数199名、前期比較：1.33倍）。そして、この活動を支えてくださるパートナーの方々、オーガナイザーの先生には感謝しかありません。

今回の活動では、主に、リーダーシップという観点で、私自身成長を感じました。今期の活動から、この活動の運営を支援してくださる人が増えました。具体的には、この活動に継続して参加してくださる学外の方や学内の新入生などです。運営に携わってくださる方が増えることで、活動の範囲が広まり、また作業を分担できるので、非常にありがたいことでした。その一方で、私自身としては、それらの方々とまとめるリーダーシップ能力が今回一層求められたように思います。リーダーシップという観点で特に私が重視したのは、運営の方々のモチベーション管理です。私たちの活動は1回の開催ではなく、月2回の活動を毎月行うものなので、運営の人々は毎回会に対するモチベーションが高いわけではありません。このモチベーションをいかに継続して高めるか、運営に携わる1人1人が楽しく活動できるかを探求しました。

モチベーションを高めるために行ったこととしては、運営内の関係性の構築（定期的な打ち合わせ兼食事会など）と、将来の活動や展望に紐づけた会の構想を考える、という2点です。

- ・「運営内の関係性の構築」では、主に定期的な打ち合わせ兼食事会をしました。運営陣の関係性が良好でないと1つ会を完成させることはできないと思いますし、言いたいことが言える関係を作ることを意識しました。定期的にこのような打ち合わせをすることで、日頃の不満点を改善したり、今後のアイデアを出したりと有意義な時間になっていたと思います。また、学内生に限定すると、学類1年生から大学院生までの層が運営に携わるので、学校や勉強のことを聞いたり教えたりすることができたのも良かったかもしれません。
- ・「将来の活動や展望に紐づけた会の構想を考える」では、運営陣のそれぞれが、なんのためにこの会に参加するのかを明確にすることです。運営側にも何かメリットがないと、継続的に仕事を続けるのは難しいと思います。私の場合、吃音の啓発（社会に知ってほしい、吃音の知識を持ってほしい）がメインのモチベーションになりますし、他の方では、吃音当事者の友達作りや、自己理解のため（吃音を持つ人という観点で）、今後研究がしたいなど、その動機は様々でした。この点を明確にすることは、会の活動内容を決める際もその内容に即したことをするなど、会全体の運営にも役立ちました。

上記の点でリーダーシップという観点で、私自身成長を感じました。

来期も継続してこの活動を続ける予定なので、今回の成長を活かしてより充実した会の開催に挑戦したいと考えています。

参加者への影響

流暢性障害というトピックについて、「勉強会」・「自助グループ活動」を行いました。この勉強会や自助グループ活動によって様々なメリットが参加者にあったということはもちろんですが、流暢性障害の啓発という観点でも一定の効果を示していると考えています。

具体的には、今期は約半年で199名の方々が会に参加をされていますが、このほとんどの方はSNSで情報を見て参加される方です。ツクスタは、主にSNS（Twitter、Instagram）を活用した活動の周知を行っています。

Twitter のフォロワーは3000人強であり、毎回の活動に関する投稿や流暢性障害を知ってもらうためのポスターを作成・投稿したりしています。このような観点では、この活動の SNS を通じた広報活動が一定の流暢性障害の啓発にもつながっていると考えています。

また、勉強会では、音声言語障害分野の研究室である宮本昌子先生の研究室のゼミ生と先生と合同で行っています。音声言語障害分野の研究室は国内には数えられる程しかなく、研究室と合同で実施することにより質の高い勉強会を実施できていると自負しています。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

参加者の募集という観点では、SNS の活用は非常に有用です。参加者を学内に限って考える場合でも、筑波キャンパスは広いので、ポスターのみでは学内に情報が行き渡らないことが現状です。SNS を活用することにより、立地や分野にとらわれない広報を行うことができます。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

- ・良かった点
学内10箇所にポスターを掲示できる点
- ・要望について：貸し出し機器の充実

コロナ禍が続く中で、オンラインでの開催も主流になってきたように思います。一方で、大人数が参加する会をオンライン上で実施するには個人で所有している備品では適応が難しいこともあるように思います（具体的にはマイクやカメラなど）。現在 T-ACT で貸出をされている備品は対面実施を想定したものが多く、例えばマイクであれば拡声器のようなものが多く、PC に音声を入力できるようなマイクはないように思います。オンライン実施を想定した備品の貸し出しもあるとハード面での実施のハードルが下がるなど、学生にとって有用であると思います。

また、オンライン実施で必ず必要なのはオンライン接続ソフトです。私たちの活動では主に Zoom を使用しています（Teams などは事前にアカウント同士でつながっておく必要があり、手間が増える＆学外参加者などには難しいということで zoom にしました。）。Zoom は現在、学生用のアカウントでも時間無制限サービスが終了し、40分の時間制限があります。したがって現在はパートナーの先生にお願いをし、有料アカウントの定期ミーティング作成をお願いしていますが、ご多忙の先生に月に2回ミーティングの URL を発行していただくのは心苦しいです。したがって、T-ACT で有料アカウントの貸出や URL の発行を行っていただけると非常にありがたいと思っています。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5



● HPV ワクチンプロジェクト (22007A)

T-ACT プランナー 坂本 菜生 (看護学類3年)

活動目的

HPV (ヒトパピローマウイルス) は女性の多くが“一生に一度は感染する”といわれるウイルスです。感染しても、ほとんどの人は自然に消失しますが、一部の人はがんになってしまうことがあります。それが子宮頸がんです。毎年約1.1万人の女性が子宮頸がん罹患し、約2900人の女性が亡くなっているのはご存じでしょうか。しかし、HPV ワクチンを打つことによって、発症リスクを下げる事が出来ます。2013年4月から、HPV ワクチンの公費助成の定期予防接種が行われていました。しかし、接種後の副反応が報告され、メディア報道も相次ぎ、HPV ワクチンの定期予防接種は2013年6月～2021年11月までの間、国が積極的な勧奨を中止していました。HPV ワクチンは小学校6年生～高校1年生までの間に接種することが最善とされており、定期予防接種の対象年齢とされていますが、中止されていた期間にこの年齢にあたる平成9年度～平成17年度生まれ(誕生日が1997年4月2日～2006年4月1日)の9年間に該当する女性は、接種する機会を逃し、未接種または接種回数が不十分な人が多くいると考えられています。そんな中、2022年4月1日から接種を逃した9年間に該当する女性を対象に、3年間、無料で HPV ワクチンを接種できる、ということが決まりました。これを『キャッチアップ接種』といいます。

その9年間に私自身も該当しています。当事者意識を持つとともに、「同じ9年間に該当する筑波大生はこのことを知っているのだろうか…？もし知らなければ知ってほしい。」と思うようになりました。そこで本企画を立ち上げようと考えました。もうすぐ、キャッチアップ接種の通知が各市町村からもうすぐ皆さんのもとへ届く、もしくは既に届いていると思います。そんな今、私たちと一緒に HPV や子宮頸がん、そして HPV ワクチンに関しての知識を深めませんか。また、大学生になり、自身の将来についてプランを考えたことがある人も少なくないと思います。そのプランを実現するためにも生活や健康に向き合うこと、妊娠・出産をしたいと思った時にできる体にしておくことはとても大切だと思います。

この企画の目的は HPV に関するセミナーを行うことであり、この企画を機に HPV ワクチンを接種するの可否か、また接種するとしたらどの種類のワクチンを打つのか、といったことを自分自身で考えるきっかけにして頂ければ幸いです。

キャッチアップ接種の対象者ではない性別、年齢の方、どなたでも大歓迎です。たくさんのご参加、心よりお待ちしております。

具体的な活動計画

【企画内容】

- ・企画日：8月9日(火) 16:00～17:00 オンライン
- ・場所：未定
- ・対象者：筑波大学生(性別・学類は問わない)
- ・内容：

主に HPV の基礎知識、そして HPV 感染の予防方法である HPV ワクチンと子宮頸がん検診についてお話しします。また、キャッチアップ接種についての説明も行い、ワクチン接種について具体的に考える機会を提供します。

- ・当日の流れ：

18:30～(5分) はじめのあいさつ

18:35～(7分) 自分のライフプランについて考えよう

18:42～(5分) 子宮のがんと HPV

「知る」ことは、「守る」こと。

子宮頸がん？
受けた方がいいの？
HPVワクチンのキャッチアップ接種
って何だろう？
今さら意味あるのかな・・・
将来についても考えてみたい！

HPVワクチンプロジェクト
日時: 2022年 8月9日(火) 16:00～17:00
開催方法: Zoomでのオンラインセミナー
対象者: 筑波大生
参加申込みはこちら
(前日まで) ↓

男女問わずお気軽にご参加ください！ ↓

T-ACT
プランナー: 坂本 菜生 (看護学類3年)
アドバイザー: 岡田 孝徳 (看護学類3年) 野口 真由 (看護学類3年) 中田 悠太 (看護学類3年)
アドバイザー: 岡田 孝徳 (看護学類3年) 野口 真由 (看護学類3年) 中田 悠太 (看護学類3年)
連絡先: 0210697@tsukuba.ac.jp

承認番号: 22007A
期間: 2022.08.09まで

- 18:47～(15分) HPV 感染を予防するには
 ・1次予防 (HPV ワクチン、キャッチアップ接種等について)
 ・2次予防 (子宮頸がん検診について)

19:02～(5分) まとめ

19:07～(5分) おわりのあいさつ・アンケートのお願い

【当日までのスケジュール】

- 4月19日～ 授業内、自己学習にて知識の習得
 6月14日～ 企画の内容考案、資料作成
 7月7日～ 企画内容のチェック (教授、医師による内容の確認)
 7月12日 企画申請書提出
 承認され次第 広報開始 (ポスター、Twitter、Instagram、LINE での周知)
 7月19日 岡山久代先生担当授業「ヘルスプロモーションと看護」にて、看護学類3年生を対象に授業内にてプレ実施
 7月22日 企画開催
 7月22日～ 企画終了時に行ったアンケートをもとに振り返り、報告書作成

補足: Google フォームにて①事前の参加登録、②事後のアンケートを作成致します。

本企画内容は 岡山久代先生の指導のもと、看護科学学位プログラム助産師課程 春 AB 開設科目『リプロダクティブ・ヘルス支援論』の授業にて作成致しました。

活動場所

人文エリア支援室に確認したところ、1H 棟101、201が貸し出し可能な教室であるとのお返事を頂いたため、それらの教室を承認され次第確保する予定です。

対面活動を中止する茨城県及び筑波大学の要請が出た場合は開催を見合わせ、再度日時を設定します。

活動期間

2022/04/19～2022/09/30

対象

学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O: 梅川茉優里 (看護科学学位プログラム助産師課程 M1)、大嶋恵奈 (看護科学学位プログラム助産師課程 M1)、野口百菜 (看護科学学位プログラム助産師課程 M1)、平田珠梨 (看護科学学位プログラム助産師課程 M1)、藤岡朱音 (看護科学学位プログラム助産師課程 M1)

P: 岡山久代 (医療医学系)

備考

【感染防止対策】

- ・対面での実施については茨城県及びつくば市、筑波大学の要請等を確認し、大学の感染症対策に応じて判断する。
- ・対面の活動を中止する要請が出た場合、企画は完全オンライン実施とする。
- ・感染防止策が徹底されているかについては、パートナー教員および T-ACT に確認する。
- ・企画を実施するかの判断については、開催 1 週間前に T-ACT と相談して決定する。
- ・前日に体調の記録確認をパートナー教員及び T-ACT に報告する。体調不良がある場合は活動を停止する。
- ・参加者は過去 2 週間以上の健康観察記録を付ける。当日は担当者が会場で記録を回収、管理する (いつでも提出できる状態にしておく)。
- ・活動の際は出入り、物品を触る前などで随時手指の消毒を行う。
- ・各自マスクを着用する。
- ・部屋の換気を行い、密集・密閉を避け、飲食を禁止する。大声を出して会話しないようにする。
- ・家を出る前に検温してもらい、体調不良者は出席しない。
- ・参加者が座る位置を、ソーシャルディスタンス (2m) を考慮して予め設定しておく。
- ・活動の以後 2 週間は体調に憂慮し、参加者に問題があれば報告してもらう。
- ・活動形態、場所、参加者、人数、内容をまとめた活動記録を作成し、担当者が管理する。
- ・その他筑波大学および T-ACT の設定した感染防止対策ガイドラインに従う。

活動報告

実際の活動内容

4月19日～

「リプロダクティブ・ヘルス支援論」の授業内または自己学習にてセミナー開催（企画）に必要な知識の習得を行った。

6月14日～

具体的にセミナー内容を考え、パワーポイントにてスライドの作成を行った。

7月7日～

考えたセミナー内容を教授や医師に確認してもらい、フィードバックを頂いた。

7月14日

企画申請書を提出した。

7月19日

岡山久代先生担当授業「ヘルスプロモーションと看護」にて、看護学類3年生を対象に授業内にてセミナーのプレ実施を行い、フィードバックをもらった。

7月20日

企画承認

7月20日～8月8日

広報活動を行った。具体的には、学内でのポスターの掲示、SNS（Twitter、Instagram、LINE）での情報拡散、授業後の休み時間での宣伝を行い、参加者を募った。

8月9日

オンライン（Zoom）にてセミナー『大事な子宮を守ろう！～HPVワクチンキャッチアップ接種～』を実施した。企画の内容や当日の流れに関しては、上記の「具体的な活動計画」から変更点なく行うことが出来た。

8月9日～

セミナー参加者にご回答頂いた事後アンケートをもとに振り返りと報告書作成を行った。

計画時との相違点として、当初は対面での実施を計画していましたが、新型コロナウイルスの感染拡大を踏まえ、オンラインでの開催となりました。また、広報活動期間を確保するために企画の開催を約2週間延長しました。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒80%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

①セミナーに使用するスライドを作成するにあたっての情報収集や情報の取捨選択

②未だ経験の浅いオンラインでのセミナー実施

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

①情報収集は大学院生である先輩方やアドバイザー教員の先生にアドバイスを頂きながら、よりエビデンスレベルの高い資料を使用するように心がけました。また、どの情報をスライドに載せるか、という情報の取捨選択に関しては、主観的な思いや自分自身の予備知識によって偏ってしまわない様にアドバイザー教員の先生に相談させて頂いたりしました。

②事前にアドバイザー教員の先生と共にリハーサルを行い、通信環境の調整や本番に向けての発表体制（スライドの表示、リアクションの確認、音声の確認など）を整えた。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

企画を立案することも、運営することも、全てが初めての体験であり、毎日が学びの連続でした。まだ何の資格も持っていないただの学生が、専門的な内容を含むセミナーを開催することは、想像していたよりも多くの課題がありましたが、当事者意識から始まった本活動を、無事こうしてピアの立場から開催できたことに大きな達成感を感じています。本活動を通じて、企画資料の作成から開催方法の決定、広報活動などを自分たちで主体的に取り組む楽しさや1つの企画を開催するために、どれだけ多くの時間やたくさんの方々の協力が必要になるか、ということを知りました。本企画の開催にあたり、ご指導・ご協力いただいた先生方、そして一緒に企画に取り組んでくださった先輩方にこの場をお借りして感謝申し上げます。ありがとうございました。

様々な過程を踏む中で、「今日はうまくいった！」「大きく前に進むことが出来た。」と思う日もあれば、「全然上手くいかなかった。」「この企画は誰も必要としていないのではないか。」と落ち込む日も勿論ありました。しかし、そんな日々を乗り越えられるくらいの『熱意』が私自身にも備わっている、ということに気づくことも出

来ました。企画当日に参加者の方が集まってくれた時の喜びや、事後アンケートで成果が得られた時のなんとも言えないあの気持ちは一生忘れることはないと思います。そのくらい、私にとっては大きな経験となりました。

また本活動は、将来保健医療分野で働く上でも大変勉強になりました。情報を提供することで、目の前の対象者の意識を変えていくことができ、それがその後の行動変容に繋がっていくんだ、ということを肌で感じられたことは貴重な体験となりました。またそれに伴う「責任」も身をもって感じる事ができ、「早く、その責任を果たせるくらいの専門性を私も身につけたい！」という思いで今は溢れています。

今後もこの熱意を保ちながら、本経験を糧に様々なことに挑戦していけたら良いなと思います。ありがとうございました。

参加者への影響

セミナー開催後に事後アンケートの回答をお願いし、7回答（回収率約38.9%）得ることが出来たため、その結果を以下に示します。

【選択式の質問】

- ・「本セミナーに参加して良かったと思いますか？」という質問に対し、「とても良かった」71.4%、「良かった」28.6%と肯定的な回答を100%頂くことが出来ました。
- ・「HPV ワクチンを接種するかどうか」に関しての質問では、セミナー前では「考え中」57.1%、「受けようと思っていた」42.9%と回答したのに対し、本企画のセミナー後では、「受けようと思った」100%という結果となりました。単純計算ではありますが、事後アンケートに回答頂いた参加者うち57.1%の方の意識に変容が見られたこととなります。
- ・またセミナーを通して自身の「ライフプランについて考えることが出来ましたか？」という質問に対し、85.7%の方ができた（「とてもできた」「できた」を合わせた値）との回答を頂き、「プレコンセプションケアについて理解することが出来ましたか？」という質問に対しても100%の人ができた（「とてもできた」「できた」を合わせた値）との回答を頂きました。

【自由記述の質問】

- ・「印象に残ったことや感想などございましたら教えてください。」という質問に対し、『私自身接種券が届いており、前から受けた方がよいとは思っていたものの、安全性や有効性がどの程度エビデンスとして裏付けされていたのか分からなかったため、今回のセミナーでそこまで示して頂けて、とても参考になりました。』『私は既に HPV ワクチンを接種していますが、子宮頸がんや HPV ワクチンの必要性についての知識が深まり、友人等に伝えていきたいと思いました。』『いい機会になりました。自分の問題としてもう一度考えたいと思います。』などの回答を頂きました。
 - ・また、「セミナー全体についてご意見等ございましたら教えてください。（改善点など）」との質問に関しては、『前半でライフプランについて考える時間がありましたが、子宮頸がんなどの疾患に罹患してしまった場合にどのように人生に影響してくるのか、もう少し具体的に説明などが後からもされると、自分で考えたライフプランと子宮頸がんなどの疾患をもっとリンクさせて考えることが出来たと思いました。』『このアンケートに既に HPV ワクチンを接種済みの人が選択する項目がなかったため、それがあるといいと思います。』『スライドや説明もすごく分かりやすかったです。』などのご意見が寄せられました。
- 以上の事後アンケートの結果から、参加して頂いた人において本セミナーは HPV や子宮頸がんに関して情報を提供し、ワクチン接種や自分自身のライフプランについて考える一助になれたのではないかと考えます。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

主体性や興味関心を延ばすことのできる貴重な機会だと思いますので、ぜひ、挑戦してみることをお勧めします！！

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

「考えた企画が上手くいくのか」「対象者に興味を持ってもらえるか」といった漠然とした不安から、「企画の申請はどの様にしたらよいのか」「開催日の設定はどうしたら良いか」「ポスターを作成するにはどうしたら良いのか」といった具体的な疑問まで T-ACT の専任スタッフの方はその時々に応じたアドバイスを下さったり、励ましのお言葉を下さったりと、大変心強かったです。

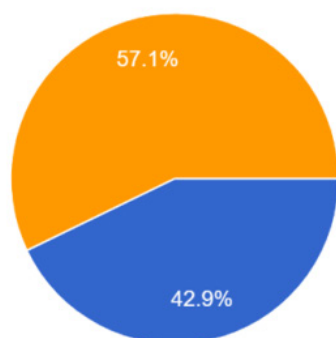
ベースとしては主体性をもって企画の立案や実施を行いながらも、本当に困った時はこのようなサポートが受けられる環境は大変貴重であると感じました。利用して本当に良かったと思っています、ありがとうございました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒4

HPVワクチン接種について（セミナー前）

7件の回答



- 受けようと思っていた
- 受けないでよかったと思っていた
- 考え中だった
- 知らなかった

HPVワクチン接種について（セミナー後）

7件の回答



- 受けようと思った
- 受けないでよかったと思った
- 考え中

● 文系／理系ってなんだろう？～文理選択の“いま”について考える～(22008P)

T-ACT プランナー 古畑 翼（総合学域群専門スタッフ）

活動目的

この企画は、学生が「文理の枠を超えた学び」を実現するための必要な支援について、学生と教職員が共同で考案することを目的としたワークショップです。

本学は、「専門智」と「汎用智」がバランスよく培われた高度な知的人材を育て上げるための教育体系として「総合智教育」を掲げており、専門分野にとらわれることのない柔軟な発想を涵養していくことを目指しています（『学群スタンダード』10頁）。特に2021年度に一期生が入学した総合学域群では、「履修計画を中心に様々な修学支援を行うこと」を通じて、学生が幅広い視野から文理の区別にとらわれない学問的発想を磨き、そこから自らの関心に適した専門分野を選択することに資すること、さらに、こうした学びを通じて、将来のキャリアを主体的に切り拓く力を涵養する一助になること」を教育上の目的としています（同24頁）。総合学域群では、選抜区分は「文系、理系Ⅰ～Ⅲ」に分かれているものの、例えば文系の区分で入学した学生が応用理工学類に移行したり、理系Ⅰの区分で入学した学生が人文学類に移行したりできるような制度になっています。

皆さん一度は文理選択について悩まれたことがあるでしょう。

「高校時代に選択していなかった科目の知識を大学から身に着けるのって大変」

「やりたいことを決めきるのが難しい」

「そもそも文理選択って必要？その理由は？」など、

さまざまな悩みや葛藤は、大学生であれば誰でも一度は経験したことと思います。

そこで、いわゆる「文転／理転」を経験した／検討している学生や、文理選択に悩んだ／疑問を持ったことのある学生らによる対話を通じて、「文理の区別にとらわれない学問的発想」を形にしていこうとどのような障壁があり、どのようにそれを乗り越えていくことができるのか、考えるためのワークショップを行いたいと思います。

この会に参加することで少しでも問題が解消されたり、一人ではないことに安心していただけると嬉しく思います。

具体的な活動計画

文理選択をテーマとしたワークショップを実施。

日程：9月30日（金）14:00～

場所：人間系学系棟 A113

対象：本学学生（総合学域群の学生、総合学域群から移行した学生、文転／理転を経験したことのある学生、文理選択に悩んだ経験のある学生など）及び関係教職員

参加方法：Microsoft Forms で事前受付（当日参加も可）

→ SNS、ポスター、総合学域群の manaba 等にて告知を行う。

（Twitter：@scs_tsukuba、instagram：@scs.tsukuba）

【プログラム】

14:00～14:10 趣旨説明・話題提供

（参考文献：隠岐さや香（2018）『文系と理系はなぜ分かれたのか』星海社新書 など）

14:10～14:25 わたしの文理選択体験談の披露

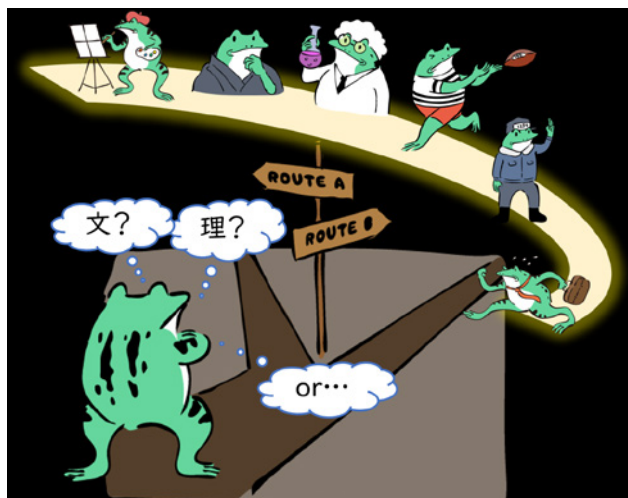
・ 事前に集めたエピソードの紹介（総合学域群の Twitter 上で募集した、「文理選択の体験談」https://twitter.com/scs_tsukuba/status/1555418373512908800?s=20&t=B2cHuMAbwXUVRO79VOu4JQ を紹介）

・ フロアからのコメント

14:25～14:45 グループワーク

[フリーディスカッションテーマ：文理を越えた学びのために何が必要か？、文理選択とジェンダー、など]

・ 現状障壁となっていることは何か、どのような解決策があるか？について、参加者同士で自由にディスカッションする



14:45～14:55 グループごとにシェア
14:55～15:00 アンケート記入

活動場所

人間系学系棟 A113

<https://www.tsukuba.ac.jp/access/tsukuba-campus/humanscience-a.html>

活動期間

2022/08/23～2022/09/30

対象

学生・教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：岡林菜子（教育学類 3 年）

P：山口桃香（総合学域群専門スタッフ）、植田丞（総合学域群専門スタッフ）

備考**【感染防止対策】**

- ・対面での実施については茨城県及びつくば市、筑波大学の要請等を確認し、大学の感染症対策に応じて判断する。
- ・対面の活動を中止する要請が出た場合、企画は完全オンライン実施とする。
- ・感染防止策が徹底されているかについては、パートナー教員および T-ACT に確認する。
- ・企画を実施するかの判断については、開催 1 週間前に T-ACT と相談して決定する。
- ・前日に体調の記録確認をパートナー教員及び T-ACT に報告する。体調不良がある場合は活動を停止する。
- ・参加者は過去 2 週間以上の健康観察記録を付ける。当日は担当者が会場で記録を回収、管理する（いつでも提出できる状態にしておく）。
- ・活動の際は出入り、物品を触る前などで随時手指の消毒を行う。
- ・各自マスクを着用する。
- ・部屋の換気を行い、密集・密閉を避け、飲食を禁止する。大声を出して会話しないようにする。
- ・家を出る前に検温してもらい、体調不良者は出席しない。
- ・参加者が座る位置を、ソーシャルディスタンス (2m) を考慮して予め設定しておく。
- ・活動の以後 2 週間は体調に憂慮し、参加者に問題があれば報告してもらう。
- ・活動形態、場所、参加者、人数、内容をまとめた活動記録を作成し、担当者が管理する。
- ・その他筑波大学および T-ACT の設定した感染防止対策ガイドラインに従う。

活動報告

実際の活動内容

「文理の枠を超えた学び」を実現するための必要な支援について考えるためのワークショップを実施した。

ワークショップの詳細については以下の通り。

日時：9 月 30 日（金）14:00～15:00

場所：人間系学系棟 A113

内容：

冒頭 7 分間ほど、昨今の文理選択を取り巻く状況について、プランナーから話題提供した後、事前にオンラインフォーム（Microsoft Forms）を使って収集した「文理選択の悩み体験談」を紹介した。その後、グループに分かれてディスカッションを行った。ディスカッションのテーマは次のとおり；①文理選択（高校、大学）で悩んだこと／決め手となったこと、②大学で「文理を越えた学び」を実現するために、どのような支援／取り組みが必要か？

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒100%

実施中の困難と解決策**実施中に困ったこと**

プランナーが家庭の事情により、当日対面で参加できなかった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

話題提供の部分を動画で事前に撮影し、当日流す形式に変更した。ディスカッションの運用をパートナーに委任した。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

私（プランナー）は、文系／理系の選択は、履修科目選択→大学の学部選択→将来の職業選択という具合に自分の進路を規定づけるもの（のよう感じられる）ので、10代の生徒・学生にとって決して軽くない選択だろうということは理解していたつもりである。ただし、文理選択や大学の学部選択が将来のキャリアに直結しない例というのもあり、途中でルートを変更することが十分可能であるということも、自身や周りを見て知っていた。学生の進路に関わる相談を担う立場として、「今、この時点で決めきれないことが怖い」という心情と、「この時点で決まったことが一生を決めるわけではない」という事実とのギャップをどのように埋めていくかのヒントを得たいという思いが、今回の企画を実行に移した動機の一つであった。

対面参加者の体験談や、事前にMS-Formsで集めたアンケートの回答からは、人生の早い（高校1～2年生）時点で文理選択をすることを、まるで将来の自身の進路を固定してしまうかのように捉える様が見れていた。この様子を見るに、自身の将来像が具体的に描けていない段階では、主に職業という観点で、一時の選択が将来の進路を規定してしまうという不安が悩みに繋がっているのだろうと考えた。また、オンライン参加者の「文系／理系が自身の属性を決めるもののようにになっている」という趣旨のコメントを見て、文系／理系の選択が、将来の進路のみならず、自分が生きていく上での“属性”（例：文系人間、理系人間）と関わっているように感じられることが、その選択をより難しくさせているのだろうと思いついた。以上の様々な新たな視点の獲得によって、文理選択の裏側にある、選択者自身の悩みや葛藤が具体的に想像できるようになったと思う。

参加者への影響

特に総合学域群の学生に対しては、多様な興味・関心から進路を選択する際の心細さ（例：理系の第2類に所属しているが、文系の学類に移行したい等）を共有する機会を与えることができたのではないかな。また高年次の参加者に自身の選択を振り返って伝えてもらうことで、「文系／理系ってなんだろう？」「選択ってなんだろう？」という問いについて、実体験を踏まえて考えを巡らせる空間を構築することができた。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

「機会を作る」というイベントの難しさを感じた。来てほしい／手を差し伸べたい相手を想定参加者（ターゲット）として、イベントの趣旨を考えていくことは重要だが、イベントを通じて繋がりを作って欲しいという観点からすると、ある程度の参加者がいないことには目標の達成度が変わってくると思う。したがって、広報を充実させると共に、色々な人を巻き込みながら企画を構築していくことを目指してほしい。あと運営側の情報共有は大切に…！

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

企画に悩んでいた時、T-ACT フォーラムで相談に乗っていただけたのが大変ありがたかった。アイデアを練り上げるには一人では難しく、かつ運営側以外の第三者からの視点があるとより良いものになるため、今後T-ACTで企画を実行したいと思う人はぜひ頼ってみると良いと思う。

学内掲示板（学生宿舍など）への掲載プロセスが非常にスムーズだったことも助かった。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒4



KickChat FC主催 ウェビナー「スポーツ×グローバルの視点で『今』-2023年-を語り合おう」(22009P)

T-ACT プランナー 北條 英次 (体育センター)

活動目的

昨年から活動している T-ACT プラン「サッカーボールをパスしてみんなと対話しよう！」から生まれたサッカークラブ「KickChat FC」が、筑波大学の卒業生でグローバルに挑戦している数名をパネリストに招いて、ハイブリット形式のウェビナーを開催します。

参加者は筑波大学学生、教職員等学内関係者のみならず、例えば将来筑波大学への進学を考えている高校生や、スポーツや国際問題に興味関心のある他大学生など学外者も対象にしたいと考えています。

パネリストには、「コロナ」、「紛争」、「気候変動」などで激動する2023年の「今」をテーマにディスカッションしてもらい、世界規模から日常生活のレベルまで、社会が抱える課題を提起したうえで、「スポーツ」の持つ力でいかに現状を打破できるか、筑波大生他若い世代の参加者に課題解決への筋道を考えてもらう機会としたいと思います。

パネリスト

- ・井上由惟子 (元なでしこリーガー選手、現所属：一般社団法人 S.C.P.Japan 共同代表)
- ・森下仁道 (サッカー選手、前所属：ガーナ共和国 Ebusua Dwarfs FC)
- ・中村脩人 (サッカー選手、前所属：関西社会人サッカーリーグ FC.AWJ)

司会

- ・北條英次 (プランナー)

運営メンバー

- ・山口雅也 (オーガナイザー)

具体的な活動計画～プログラム～

【開催日】

日程が決定いたしました！

2023年2月20日(月)

【当日の流れ】

- 18:15-18:35 パネリスト自己紹介
- 18:35-18:40 主旨説明
- 18:35-19:00 パネルディスカッション
- 19:00-19:25 質疑応答
- 19:25-19:35 まとめ
- 19:35-19:45 アンケート回答
- 19:45 閉会の挨拶

当日に向けた準備

【1 か月前まで】

- ・スチューデント・コモンズ所有の Zoom アカウント、会場 (スチューデントコモンズ貸室) の予約をとる
- ・イベントの告知をする (ポスター作成と掲示、SNS の活用等)

【前日まで】

- ・パネリストとの事前打ち合わせを行う
- ・Google フォームによる申込受付をする
- ・Zoom 運用方法を習得する

【当日】

- ・会場設営
- ・ウェビナー運営
- ・アンケート回収

KickChat FC主催ウェビナー

「スポーツ×グローバルの視点で『今』-2023年-を語り合おう」

2023年2月20日(月) 18:15～20:00

Zoomによるオンライン形式



中村脩人

10歳からオーストラリア・アデレードで生活しながらオーストラリア1部のチームでプレー。17歳でアデレードユナイテッドのユースチームに半シーズン所属。高校卒業後、筑波大学体育専門学部に2018年度入学。野球部で4年間プレーし、卒業時には1軍に所属。2019年、大学卒業後ドイツ・ケルン、フライブルグで2年間プレー。その後帰国し、パーソナルトレーナーとして活動しながら、つくば・水郷湖で半シーズンフットボール。昨年は筑波大学のFC.AWJでプレーしながら株式会社バトングループで勤務。社会人として働きながら、プロを目指してサッカー選手として活動している。

参加申込み

2023年2月19日(日)まで



井上由惟子

2004年からジュニアユースでプレー。2007年に14歳で女子代表に選出され、AFC U-16女子選手権優勝に貢献。2008年 FIFA U-17女子ワールドカップ出場。2009年 AFC U-19女子選手権優勝を果たす。2011年シーズンを終ったジュニアユースでプレーを再開。2012年はアメリカのニューヨークマリナでプレーし、同シーズン終了後21歳で選手生活は再開した。その後、後半戦は能力者としてチームで3年連続優勝をなし、帰国後2017年からは日本サッカー協会 (JFA) のこのプロジェクトで活動。2018年に筑波大学大学院に入学し、スポーツ国際研究科で学びながら、一般社団法人 S.C.P. Japan を設立し、スポーツを通じてダイバーシティ&インクルージョンについて実践及び研究を行っている。



森下仁道

筑波大学国際総合学部卒業。ガーナ最優秀のリーグ「Ebusua Dwarfs FC」所属。ポジションはFW。試合中はオランダで過ごし、サッカーを通じて、自身の価値観を1年休学しインドネシアにサッカー留学。帰国後は筑波大学に入学し、体育会サッカー部(サッカー部)に入部するも夢だったリーガーになれず引退。アメリカへ。2019年秋にサンディエゴ最優秀のリーグ「FC MESA」とプロ契約を締結し、同年3月プロデビュー。選手活動以外にも「スポーツを通じての価値観」分野のW60やスポーツ産業でのサッカー指導 (JFA公認トレーニングライセンス保持)、トラック事業やオンライン英会話サービス運営など多岐にわたる。2021年3月よりガーナにて先着のアジア人プロサッカー選手としてプレー。自身の選手をお見せするYouTubeチャンネル「JinDo」を運営。2020年筑波大学校友会役員、連絡スポーツ協会の会長 (global sports week) (主催「次世代ヤングスポーツリーダー世界30人」選出)。

問い合わせ先
北條英次 hojoeji@icloud.com

T-ACT

・事後振り返り

活動場所

オンライン（Zoom）開催

活動期間

2022/09/20～2023/03/20

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：山口雅也（心理学類）

P：山口拓（体育系）

備考

【参加方法】

注意事項をご確認の上、下記の「参加申込フォーム」より必要事項を記入してください。

・参加申込みフォーム

https://docs.google.com/forms/d/1nr5QZ_XPHPVOFw1wJ25ahj7KMqNZuBK2kdVNhxPWRl/

当日のイベント参加 URL は、事前にメールにてご連絡いたします。

【参加対象者】 どなたでもご参加いただけます。※未成年の方が参加する場合には保護者の同意が必要です。

【参加費】 無料

【その他】 途中参加、退場自由です。

【ウェビナー参加時の注意事項】

（１）参加の際には、ご自身の Web カメラはオフにしてください。

（２）本イベントの様子の録画を予定しています。今後の KickChat FC の広報活動に使用するために、録画や写真撮影を行うことにご了承の上、ご参加ください。

（３）不審な行為や会の進行を妨げる行為が見られる場合は、予告なしに退出させる場合がございます。

（４）参加申込を行うことによって、上記の事項に同意いただけたものといたします。

【当日の質問方法】

「質疑応答」の時間に、参加者の方も質問やコメントを行えます。

ミーティングへ参加してから「チャット」に入力することで、質問やコメントを会場全員と共有することができます。

質疑応答では、チャットから抜粋して、司会より登壇者へ質問させていただきます。

時間の都合上、質問は全てお答えできないこともございます。

【対面感染防止対策】

・対面での実施については茨城県及びつくば市、筑波大学の要請等を確認し、大学の感染症対策に応じて判断します。

・対面の活動を中止する要請が出た場合、企画は完全オンライン実施とします。

・感染防止策が徹底されているかについては、パートナー教員および T-ACT に確認します。

・企画を実施するかの判断については、開催 1 週間前に T-ACT と相談して決定します。

・前日に体調の記録確認をパートナー教員及び T-ACT に報告します。体調不良がある場合は活動を停止します。

・参加者は過去 2 週間以上の健康観察記録を付けてもらいます。当日は担当者が会場で記録を回収、管理します（いつでも提出できる状態にしておく）。

・活動の際は出入り、物品を触る前などで随時手指の消毒を行います。

・各自マスクを着用します。

・部屋の換気を行い、密集・密閉を避け、飲食を禁止する。大声を出して会話しないようにします。

・家を出る前に検温してもらい、体調不良者は出席しない。

・参加者が座る位置を、ソーシャルディスタンス (2m) を考慮して予め設定しておきます。

・活動の以後 2 週間は体調に憂慮し、参加者に問題があれば報告してもらいます。

・活動形態、場所、参加者、人数、内容をまとめた活動記録を作成し、担当者が管理します。

・その他筑波大学および T-ACT の設定した感染防止対策ガイドラインに従います。

その他不明点がございましたら、下記のお問合せ先までご連絡下さい。

お問合せ先：hojoeiji@icloud.com

活動報告

実際の活動内容

2013年2月20日（月）18:15-20:00 スチューデントコモンズ

【当日の流れ】

18:15-18:35 パネリスト自己紹介

18:35-18:40 主旨説明

18:40-19:15 クロストーク

①大学生の時の自分→海外に行った経緯

②留学してよかった点

③留学中大変だったこと、どう乗り越えていったか

④異文化の中でスポーツをしてよかったこと／スポーツがどのように役立ったか

⑤今から海外に挑戦しようとしている人へのメッセージ

最終ゴール：筑波大学は異文化に富んでいる。筑波大学で異文化交流ができる。活用しよう！

19:15-19:25 KickChat FC の紹介

19:25-19:40 質疑応答

19:40-19:45 アンケート回答のお願い

19:45 閉会の挨拶 全員

【パネリスト紹介】

井上由惟子

2006年からジェフユナイテッド千葉レディースに所属しなでしこリーグでプレー。2007年に U-16日本女子代表に選出され、AFC U-16 女子選手権準優勝に貢献。2008年 FIFA U-17女子ワールドカップ出場、2009年 AFC U-19 女子選手権優勝を果たす。2011年シーズンを終了後ジェフユナイテッド千葉レディースを退団。2012年はアメリカのニューヨークマジックでプレーし、同シーズン終了後21歳で選手生活を引退した。その後、青年海外協力隊としてブータンで2年間体育教員をし、帰国後2017年からは日本サッカー協会（JFA こころのプロジェクト）で勤務。2019年に筑波大学大学院に入学し、スポーツ国際開発学を学びながら、一般社団法人 S.C.P. Japan を設立し、スポーツを通じたダイバーシティ&インクルージョンについて実践及び研究を行っている。

中村脩人

10歳からオーストラリア・アデレードで生活をしながらオーストラリア2部のチームでプレー。17歳でアデレードユナイテッドのユースチームに半シーズン所属。

高校卒業後、筑波大学体育専門学群に2015年度入学。蹴球部で4年間プレーし、卒業時には2軍に所属。2019年、大学卒業後ドイツ・ケルン、フライブルグで2年間プレー。その後帰国し、パーソナルトレーナーとして活動しながら、つくば・木更津で半シーズンずつプレー。

昨年は関西1部の fcAWJ でプレーしながら株式会社パソナグループで勤務。

社会人として働きながら、プロを目指してサッカー選手として活動している。

森下仁道

1995年生まれ。筑波大学国際総合学類卒業。ガーナ最高峰のリーグ「Ebusua Dwarfs FC」所属。ポジションはFW。幼少期をオランダで過ごし、サッカーをはじめる。17歳の頃高校を1年休学しインドネシアにサッカー留学。帰国後は筑波大学に入学し、体育会蹴球部（サッカー部）に入学するも夢だったJリーガーになれず1年休学し、アフリカへ。2019年1月ザンビア最高峰のリーグ「FC MUZA」とプロ契約を締結し、同年3月プロデビュー。選手活動以外にも「スポーツを通じた国際開発」分野の NGO やスポーツ組織でのサッカー指導（JFA 公認C級ライセンス保持）、トゥクトゥク事業やオンライン英会話サービス運営など精力的に取り組む。2021年3月よりガーナにて史上初のアジア人プロサッカー選手としてプレー。挑戦の様子をお届けする YouTube チャンネル【JinDo】を運営。2020年筑波大学校友会賞受賞。通称スポーツ版ダボス会議「Global Sports Week (globalsportsworld.com)」主催【次世代ヤングスポーツリーダー世界30人】選出。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒75%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

SNS 活用があまりうまくいかず参加申込数を思うように伸ばせませんでした。メインターゲットである大学生にリーチする宣伝方法が最後まで見つからないという課題が残りました。当日は聴覚障害者のために UD トークを使用したかったのですがテスト不足で Zoom 設定がうまくいかず大変迷惑をかけてしまいました。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか
実施中には解決できませんでした。今後の課題として残りました。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

ウェビナーの開催は初めての経験で全く手慣れていなく四苦八苦しました。準備不足を痛感しましたがオーガナイザーのサポートでどうにか乗り切ることができました。

参加者への影響

事後アンケートから回答者の75%が満足したという結果でした。今後英語でのウェビナーを開催したら参加したいかという質問に対しても3/4が参加したいという回答だったので、グローバルな話題に興味があり英語ウェビナーの需要があることがわかりました。

未来のプランナーに伝えたいことがあれば自由どうぞ

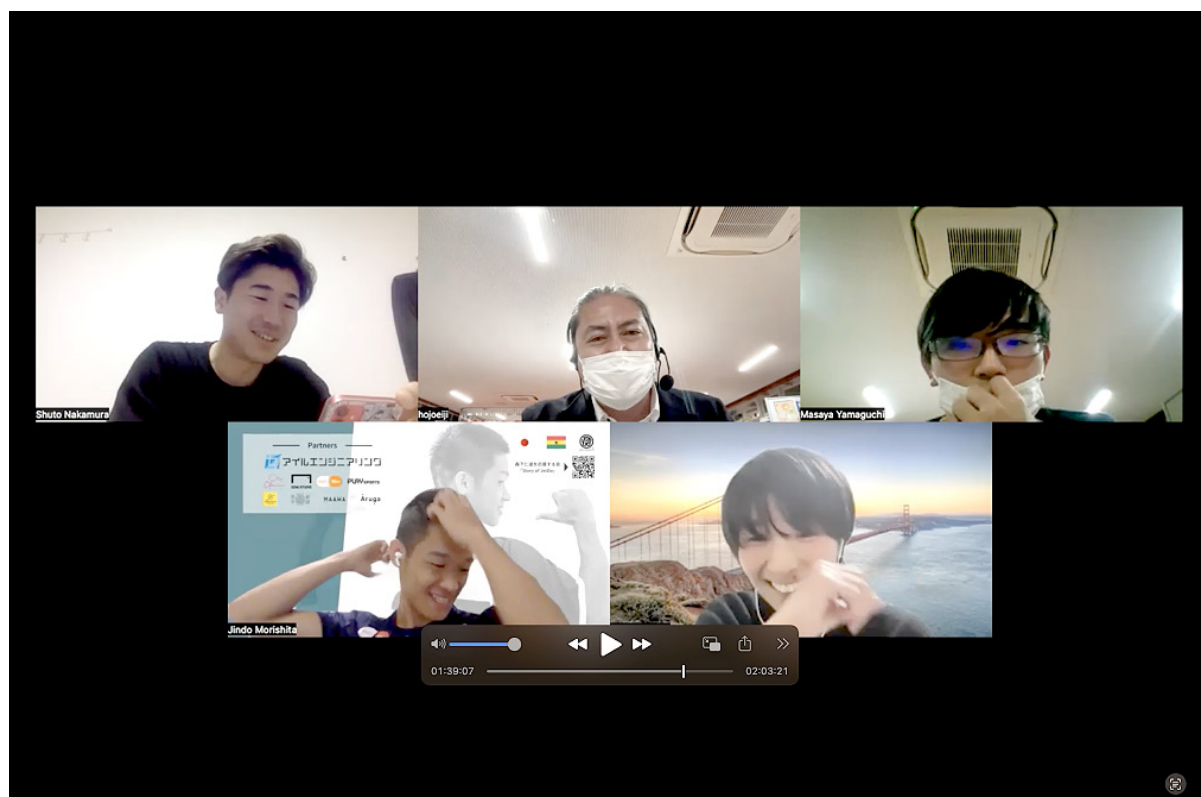
T-ACT スタッフはいつでも協力的です。思い立ったらとにかく相談してみましょう。実現までサポートしてくれます。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

今回もポスター作成やイベント周知、当日もサポートいただき感謝しています。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5



匿名note—筑波大学交流ノート— (22012A)

T-ACT プランナー 大久保 伊織 (比較文化学類3年)

活動目的

＜きっかけ＞

①パスカル・キニャールの作品「さまよえる影たち—最後の王国—」を読んだことで、筑波大学でも同様の作品を製作することができないか考えたため。本作品は、小説や随筆といった様々なジャンルの断片的な記述が連続的に繋がって一つの作品として成立している。小説として位置づけられている本作は、先述の特徴から、小説という分野の新たな領域を開拓する作品と言える。そのため、同じく断片的な記述が蓄積されることによって、このノートそのものが文化的、文学的要素を持つものになるのか検証してみたいと考えたため。

②一年次の頃、コインランドリーに置かれている交流ノートを目にした。それは利用者が洗濯の待ち時間等に書いて交流を行うものであり、実際に悩み相談や雑談など匿名性を守った交流の場として成立していた。私はネット環境さえあれば全世界の誰とでも簡単にやり取りができる時代において、アナログのノートでのやり取りという交流が活発に行われていることに衝撃を受けた。それと同時に注目すべき事実であると思った。SNSが発展してなお無くなっていない、ということはつまり何かそこに人々が求めるものがあると考えたからだ。私は、それを「向こう側に確実に人がいるという実感」だと考える。SNSでは、皆同じ電子上の文字になってしまうが、アナログではそうではない。必ずその人の個性が反映される。そのため、デジタルよりも人間と交流している感覚が強いと考えられる。これはあくまで私の予想であり、実際のこととは分からない。だからこそ本企画を通して、こうしたアナログの文化は何故消えないのか、を分析したいと考えた。また、コインランドリーの交流ノートを見る限り、内容は断片的で連続的な記述で①と共通する部分が多い。加えて、そこには文化の形成が見られるため、筑波大学の学生を対象に企画を行ってみたくなった。

③SNSが発展した時代、筑波大学の学生の多くもTwitter等で交流を行っている。だが、私は彼らのように実名とむすびつけたアカウントでの発信ができない。それは個人情報漏洩の観点もあるが、自分のことを知っている人間に相談をむやみに行うことができないからである。同様の考えを持つ人間は他にもいると考えられる。誰かは知らないが、同じ大学に通っているからこそ、相談できる、話をできることがあるはずだと考える。

＜ゴール＞

①記述を読み、どのような文化が形成されるのかを観察する。

②-1 (アナログ媒体 (ノートブック：クローズドな交流場所))

公式SNSアカウントで記入内容の具体的な内容に触れずに、「どんな傾向がみられるか」などの結果を公開する。

②-2 (デジタル媒体 (公式SNS等：オープンな交流場所))

公式SNSアカウントでテーマに沿った記入内容を公開する。

＜公式SNSアカウントで発信することのねらい＞

本企画 (匿名ノート) に関する広く意見や感想、デジタル媒体における次月のテーマ等を募集するためである。そして、参加してくれた方あるいは参加していない人も含めた交流の場を構築するという狙いもある。

③筑波大生の中でも、中々人に相談することのできない人々、あるいはその他の人々の会話だけでは得られない交流の場として成立させる。本ノートは一時的な企画であるが、本企画の終了後も交流が残る、交流の輪が拡大する企画であることを目標とする。

④私は現時点で、卒業論文において前項の②で触れたような「消えない文化」を対象に研究を行いたいと考えている。本企画を通して、自分の研究の方向性を確かめたい、という狙いもある。

具体的な活動計画

＜活動内容＞

①アナログ媒体 (ノートブック：クローズドな交流場所)

- 1 大学図書館入り口付近と体芸図書館等に匿名ノート、消毒用アルコール液等を設置する。このノートは誰もが記入できるものである。
- 2 参加者には自由に書き込んでもらう。次項の〈匿名ノートへの記載内容について〉に記載したルールに抵触しない内容であれば削除等の対応は行わない。
- 3 まずは約1か月間ノートを設置し、ノートの回収を行う。
- 4 直接内容を公開するのではなく、各ノートにどのような傾向がみられたのか、といった分析結果をSNS等で公開する。



②デジタル媒体（公式 SNS 等：オープンな交流場所）

- 1 大学図書館入り口付近と体芸図書館等に設置した匿名ノートの横に QR コード（『Google Form』や『質問箱』を用いた記入フォーム）を貼る。また、公式 SNS アカウントでも匿名ノートと QR コード（上記記入フォーム）について取上げ参加者を広く募る。
- 2 上記の QR コード（『Google Form』や『質問箱』を用いた記入フォーム）から寄せられたコメント等は運営メンバーのみが閲覧することができ、また、内容の確認を行った上でテーマに基いた記入内容に限り公式 SNS アカウントで公開を行う。
- 3 記入にあたっては、月ごとにテーマを設定する。（例『好きな作品は？』）そのテーマに沿った記述を行ってもらう。テーマを設定することで、記述内容に制限は出るものの、焦点を絞ることで交流の輪は広がりやすくなるを考える。また、テーマを設定することで SNS での発信に軸が生まれ、新規の参加者を取り込みやすいと考える。
- 4 <ゴール>の②-2で示した通り、デジタル媒体に集まった意見については、公式 SNS で内容の公開を行う。公式 SNS で公開するのは、テーマに沿った内容のみとする。テーマから外れる記述は SNS で公開を行わない。参加してくれた方あるいは参加していない方も含めた交流の場を公式 SNS 等で構築できると考える。そのことによって、更に本ノートへの関心が高まり、筑波大生の交流の輪が拡大していくと予想される。多くの関心が集まった場合は、参加者や興味のある人間同士が意見を交わせる交流の場を形成することも視野に入れる。

<匿名ノートへの記載内容について>

・各ノートの見開きに、公式 SNS、『Google Form』や『質問箱』等に、記入内容について以下のルールを厳守することを明記する。

1. アナログ媒体（ノートブック：クローズドな交流場所）

- ①内容がそのまま公開されることはありませんが、記入者を特定できない形でプランナーが編集したものが公開される可能性があります。同意された方のみ記入をお願いします。「記入したいが、非公開にしたい。」という場合は、記入した内容に非公開にしたい、という旨をご記入ください。

公開場所は以下を予定しています。

- ・公式 SNS アカウント (@Tsukubanote)
- ・活動の広報・分析目的のための媒体

- ②匿名ノートの持ち出しやページを破る等の行為は禁止です

- ③匿名ノートに記載されている内容の撮影、SNS への投稿等は禁止です（撮影希望の場合は必ず事前にプランナーに許可を得ること）

- ④特定の個人が特定されるような書き込みはしないでください（住所・電話番号・氏名等）

- ⑤他者が不快になるような書き込みはしないでください

- ⑥匿名ノートに関する質問や要望等があればプランナー、T-ACT までご連絡ください。

2. デジタル媒体（公式 SNS 等：オープンな交流場所）

以下の内容を記入フォームの概要欄に記載する。

- ①公式 SNS、『Google Form』や『質問箱』に寄せられたコメント等が公開される可能性があります。同意された方のみ記入をお願いします。「記入したいが、非公開にしたい。」という場合は、記入した内容に非公開にしたい、という旨をご記入ください。

公開場所は以下を予定しています。

- ・公式 SNS アカウント (@Tsukubanote)
- ・活動の広報・分析目的のための媒体

- ②提示したテーマに沿っていない上、第三者への誹謗中傷等を含む記述につきましては、プランナーの判断で削除させていただきます。

- ③特定の個人が特定されるような書き込みはしないでください（住所・電話番号・氏名等）

- ④他者が不快になるような書き込みはしないでください

- ⑤匿名ノートに関する質問や要望等があればプランナー、T-ACT までご連絡ください。

<スケジュール（ノートの設置期間）>

企画申請が通った後、各所に匿名ノートを設置する。

まずは1か月間各エリアにノートを設置し記述を集める。その後、公式 SNS アカウントで内容を公開し、意見や感想を集めて公開する。継続してノートを設置するか否かについては、ノートの記入状況を踏まえて T-ACT 職員と協議を行った上で決定する。誹謗中傷等の記述が連続し、企画の継続に支障が出た場合は中止するものとする。

<デジタル媒体とアナログ媒体における差異について>

- ①テーマ設定の有無について

アナログ媒体ではテーマ設定は行わない。それに対して、デジタル媒体ではテーマ設定を行う。それはひとえに媒体の特性が異なるからである。

(1)アナログ媒体（ノートブック：クローズドな交流場所）

アナログ媒体では参加者同士がノート上で直接交流を行うことができる。こちらは参加者を中心としたコミュニケーションを取ってもらう形になる。

(2)デジタル媒体（公式 SNS 等：オープンな交流場所）

デジタル媒体では、企画自体を発展させるためにも、参加者から意見を集め、関心を集めることが重要になる。そのため、参加者と匿名 note との交流という形を取る。テーマ設定を行うことで、集まった意見をまとめた形で公開しやすい。まとめて公開することで、拡散もされやすく、非参加者の目にも止まりやすい。こちらは、匿名 note を中心としたコミュニケーションを取ってもらうことになる。企画自体が軌道に乗れば、アナログ媒体と同様の形を取ることも検討する。

②公開内容について

(1)アナログ媒体（ノートブック：クローズドな交流場所）

こちらは、記入傾向など、大まかな内容について伝える。記入者個人が特定できる形での発信は行わない。傾向等について公式 SNS での発信を行うのは、アナログ媒体の存在の周知のためである。

(2)デジタル媒体（公式 SNS 等：オープンな交流場所）

こちらは設定したテーマに沿っているとされるものに関しては、公式 SNS で公開を行う。それは、①で示したデジタル媒体の特性も関係している。さらに、デジタル媒体はアナログ媒体とは異なり、匿名性が保たれているからである。

活動場所

下記エリア（予定）にノートを設置する。

- ・中央図書館入り口付近
- ・体芸図書館
- ・スターバックスコーヒー筑波大学中央図書館店
- ・サザコーヒー筑波大学アリアンサ店

（※本企画申請の実施許可が得られた後、各管理部局・店舗にノート等の設置許可依頼を行う。依頼には T-ACT のボランティアアドバイザーである木田が同行する。断られた場合は、T-ACT フォーラムメンバーと相談の上、他の配置場所を検討する。）

（※設置場所については、防犯上、加えて誹謗中傷等が記入されるリスクの軽減のために観点から人目につく場所を予定している。）

活動期間

2022/10/11～2023/03/31

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：大橋翔和（比較文化学類 3 年）

P：小川美登里（人文社会系）

備考

- ・筑波大学および T-ACT の設定した感染防止対策ガイドラインに従う。
- ・対面での実施については茨城県及びつくば市、筑波大学の要請等を確認し、大学の感染症対策に応じて判断する。
- ・感染防止策が徹底されているかについては、パートナー教員および T-ACT に確認する。
- ・対面での活動を実施するかの判断は、前日までにパートナー教員と相談して決定する。
- ・参加者は必ず過去 2 週間以上の健康観察記録をつけ、持参するとともに、担当者が記録表を管理する。
- ・対面での活動中は、マスクの着用、消毒を徹底する。
- ・活動形態、場所、参加者、内容をまとめた活動記録を作成し、担当者が管理する。
- ・活動の以後 2 週間は体調に憂慮し、参加者に問題があれば報告してもらう。
- ・プランナー・オーガナイザーに感染の疑いがある場合、「新型コロナウイルス感染が疑われる場合の本人の行動フロー」に従って行動し、発生状況を担当者が T-ACT 推進室へ必ず報告すると同時に、対面での活動を停止する。

活動報告

実際の活動内容

○匿名 note とは

大学各所にノートを設置して、大学生の「交流」と「文化形成」を観察する企画である。

○設置場所

- ①三学フリースペース
- ②スターバックス中央図書館店前様
- ③一学食堂
- ④サザコーヒーアリアンサ店様
- ⑤縁 counter / Trigger 様
- ⑥春日エリア7A 棟入口
- ⑦和歌山大学

○各ノートの特徴

本項では、各ノートの特徴について列挙していきます。

①三学フリースペース

食堂に隣接する広いスペースで、朝から晩まで数多くの学生に利用されている。人通りも多く、閑散としていることは少ない。

- ・初めて書いた人間が日付を記したことによって、日付と共に記述する文化が生まれた。
- ・ノートの枠線に沿って文章が書かれている。(枠線に沿って空間が使われている。)
- ・各文章は一文から二文。
- ・フリースペースという場所の性質から、同じ人物が繰り返し書いている場合が多い。(追記、というような形で後日ノートに記述が付け加えられる場合がある。)

②スターバックス中央図書館店前

大学中央に位置する図書館の中に併設されているスターバックスの店頭に設置したノート。

- ・一言で説明するなら、カオス
- ・日付を書く文化が定着しない。
→ノートをじっくりと読む時間が存在しないため、日付まで気に留めていられないのではないかな。
- ・ノートの空間が自由に使われている。(上下左右、ノートの枠線に沿うことなく記述がされている。ページが埋まらなくても次のページに移行することがある。見開き使用、白紙のページが存在していたりする。)
→文脈が存在しない。
- ・四月に入ってから、サークルや学園祭実行委員会による勧誘コメントが増えるようになった。(記入者がスターバックス利用者の年齢層から、宣伝に適していると判断したためか。)
- ・新歓に関する名刺が貼り付けられていることがある。
→三次元的用いられ方。ノートからはみ出している。
- ・スターバックス前、あるいは図書館の出入り口に面していることもあって、短文で書かれていることが多い。
- ・コメントに対して矢印で追加のコメントが書き加えられることが多い。
- ・同じ人物が繰り返し書く頻度は三学に比べて高くない。(カオスすぎるため、特定が難しい。)
- ・スターバックスに対する要望が寄せられることがある。
- ・使用ページが最も多い。(58頁。他のノートの約三倍。)

③一学食堂

一学一階に位置するノート。一学食堂は大学では地下に相当する場所であり、昼食時以外は閑散としている。

- ・記述が徐々に増え始めているが、他のノートに比べてそこまで量は書かれていない。
- ・学習の記録が付けられている。
→ノートの記述が少ない分、個人ノートに近い用いられ方がされているのではないかと考える。

④サザコーヒーアリアンサ店

筑波大学敷地内に位置しているカフェ。筑波大生が中心となって利用するスーパーに隣接する独立した店舗。

- ・他のノートに比べて、記入者の年齢層が幅広い。
→三回、四回生・社会人・卒業生・筑波大生の家族、友人・筑波大学を目指す学生、その家族
→筑波大生本人よりも、その周縁に位置する人による記述が大半を占めている。
→本人の幸せな学生生活を祈る旨の記述が大半を占めているため、非常に温かい内容のノートとなっている。
- ・「社会人一年目です。」や「四年生です。」といった名乗りが冒頭に書かれ、そこから四行ほどの文章が書かれることが多い。
- ・中途、最初のページから記述の最後に日付が書かれるようになって、日付が書かれ始めた。
- ・各コメント同士の関わり合いは少ない。
- ・自分の近況について語っている場合が多い。

- ・サザコーヒーのメニューに関わるイラストが多く書かれている。
- ・四月にカラーイラストが描かれたことをきっかけに、カラーイラストが登場し始めた。

⑤縁 counter / Trigger

- 筑波大学近辺に位置しているカフェ & バー。筑波大生によって運営されている。利用者にも筑波大生が多い。
- ・集団での記入。（設置していない同じペンによる複数の記述。）
- ・誰かを「待つ」間に記入されることが多い。
 - 店員さんからの発言。
- ・文章はほぼ書かれていない。
- ・有名キャラクターの絵が多い。
 - 集団でノートに接している場合、個人的な記述がしにくいのではないか、と考える。また絵は、その場に
いる人間に伝わりやすく、他の人間の参加も可能な媒体となるから、文章よりも多く書かれているのではない
かと考える。
 - サザコーヒー同様、独立した店舗内で時間がある。しかし、各店舗の利用方法によって、ノートの記述も大
きく異なることが分かる。

⑥春日エリア7A 棟入口

- 夏休みから設置を開始したため、現時点ではノートへの記述は少ない。現時点で考察できる点としては、
 - ・日付は付けられていない
 - ・前向きな記述が多い
 - ・入り口付近であるからか、記述が乱れている
- といったことが挙げられる。

⑦和歌山大学

和歌山大学の学生団体『AKINAI』の学生との交流を行い、ノートを設置させて頂いた。今後は和歌山大学の田代優秋先生から内容について報告を頂く予定である。

○現時点での考察

- ・日付が書かれていると、日付が書かれる。イラストが描かれ出すとイラストが増える。新歓のメッセージが書かれ出すと宣伝が乗るようになる。カラーイラストが描かれると、色が使われ始める。
 - 参加者同士の中で暗黙の了解、というよりも「このコンテンツを規約の中でどこまで自由に利用していいの
か」という模索が見られる。その過程に、各場所における特徴が加わり、各ノートは独自の変化を遂げている。ここに、文化の形成の過程を見ることができる。
- ・在学生と卒業生による記述によって、今の筑波大学と過去の筑波大の記述が入り混じる。そして、筑波大学生の中心（筑波大生が利用するフリースペースや食堂、カフェといった空間）と周縁（筑波大学に位置しつつも筑波大学と筑波大学外との境界に位置している部分）がノートに記される。
 - 筑波大学の生活史と呼ぶこともできるのではないかな。
- ・SNS が発展した時代に、アナログ媒体での活動が盛んになった。
 - 実際に文字を書くことで、ノートには筆跡が残る。SNS とは異なり、文字の向こう側に確実に人がいる。
 - ノートを通して、人とのつながりがより強く感じられるからではないか。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒95%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

一般学生が設置しているノートであるため、ノートの知名度が広がりにくい、記述が集まらないのではないか、という懸念があった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

各 SNS での発信や各広報媒体への出演を積極的に行い、様々な層の学生にノートの存在が知れ渡るようにした。ただ、あくまでもその場で楽しむ、というノートの雰囲気崩さないように努力した。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

自分の興味関心がどこにあるのか、ということが明確になった。実際、匿名 note での活動を行う中で、自分はものがたりが好きだということに気が付いた。そしてその物語は、人と人を結び付けることで生まれる。そうすることが可能になるコンテンツ制作を将来の仕事としたい、と思うようになった。

また、T-ACT 報告会の際、様々な人から「アナログで説明だけでは行う意味が不明確な企画が成功するとは思わなかった / 成功すると（あなたは）思っていたのか。」という旨の感想や質問を頂いた。その時どのように答えたかは定かではないが、もちろん私も不安だった。ノートに記述は集まらないかもしれない。その想いは活動前から常に抱えていた懸念だった。だが、私はこれを「面白い」と思った。だから、とりあえずやってみよう

と取り組んだ。記述が集まらないという未来もあったかもしれない。それなら、どう工夫したら記述が集まるだろう、という風に計画をシフトするつもりだった。どんな結果だったとしても、「それをどのように読み解くか」が重要であると私は考えている。

各ノートを見て頂けると理解して頂けると思うが、見た目はどのノートもそこまで変わらない。この企画を行う際に私が抱いていた懸念は「どのノートにも差が見られなかったらどうしよう」ということだった。ノートから何も読み解けない可能性を私は危惧していた。しかし、そんな危惧とは裏腹にノートは独自の進化を遂げていた。明確な違い、というよりもサイゼリヤの間違い探しのような差ではあった。

だが、私はその違いを見つけようとノートを読み込んだ。結果として報告会の際には、教授陣からノートの記述に対する考察が優れていると評価して頂いた。これはひとえに楽しんで参加してくれた人たちの記述に、まともとなった物語に真摯に向き合った結果だ。目の前のテキストを深く読み込んで自分の中に落とし込んで考える、大学で学んだ姿勢を活かし、それを更に高められた挑戦でもあった。

参加者への影響

ノート上の反応、ノートへの記述が進んでいることを踏まえると、新たな交流を生む本企画は楽しんで頂けているものと考えている。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

「やってみたい」と少しでも思ったなら、T-ACTを訪れてみてください。別にT-ACTじゃないといけない、ということはありません。でも、ここには同じ志を持って、貴方の「やってみたい」を聞いてくれる学生が教職員の方々がいいます。そこで「やってみたい」を言語化することは、たとえ企画を実現させないとしても未来の糧になります。筑波大学の一点でも、一日でも貴方色に染められるかもしれない。それがプランナーの楽しさだと私は思っています。

T-ACTを利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

堅苦しすぎないのが良いと思う。初めて訪れた時、また来たいと思うようになった。

ただ、学生内の知名度がそれほど高くない気がしている。せっかくいい場所なのだから、もう少し知名度を上げてでもいいのかもしれない。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5



● 人工言語作成プロジェクト 第2弾～筑波大生の「共通語」を一から作ろう！～ (22013A)

T-ACT プランナー 尾坂 拓郎（芸術専門学群3年）

活動目的

春学期に引き続き、人工言語作成プロジェクトの第2弾です。

春学期の活動では音韻や基本的な文法事項が決定し、単語数も着々と増えてきました。しかしまだまだ実用には程遠いので、第2弾ではより多くの方々に協力していただき、日常会話ができるようなレベルまで作り上げたいと思っています。色々なアイデアを出すためにも、さまざまな分野の学生の方々に協力していただきたいです。また、日本語母語話者でない留学生のご参加もお待ちしております！

【企画立案の背景】

言語学や語学の学習が好きで、人工言語を作ることに興味をもったのでこの企画を提案しました。

筑波大生の『共通語』をコンセプトに、音素・文法・語彙など一から言語を作りたいと思っています。一番の目的は、「自分たちの手で言語を作る」というロマンある活動を楽しむことです。また、言語の面白さを多くの方に知ってほしいと思っています。言語は習得することも楽しいですが、自ら単語や文法を作ってみると今まで気づかなかった言語の奥深さを知ることができます。

将来的には、作った言語を筑波大生に教える講座などのイベントもしたいと考えています。もしかしら筑波大生としてのアイデンティティを育み、学生同士の一体感を生むことにも繋がるかもしれません。

【人工言語とは】

人工言語とは、その名の通り人為的に作られた言語のことを言います。日本語や英語など、みなさんが知っている大抵の言語は自然発生した言語であり、長い歴史の中で文法や語彙が形成され、変化していつています。一方人工言語は、個人や少人数の団体が意図的に文法や語彙などを決定するものなので、文法や語彙が変化しにくいのが特徴です。

【人工言語のメリット】

人工言語は、当たり前ではありますが誰の母語にもなりません。つまり、どんな人でも外国語として勉強し習得しなければ話せるようにならないため、全ての人が共通のスタートラインに立っています。ある特定のコミュニティで英語や日本語などの自然言語が共通語になると、その母語話者がどうしても有利になってしまいます。一方、人工言語はどんな人にとっても中立的な存在です。その点で人工言語は共通語とするのに向いている言語と言えるかもしれません。

具体的な活動計画

[定期ミーティング]

毎週土曜日14:00から2時間程度 中央図書館セミナー室

文法事項の他、各自が作成した単語に問題がないか等について話し合う。

[単語の作成・辞書の管理]

辞書はZpDICを用いる。各自で単語を作成し、ZpDICに追加する

[文字とそのフォントの作成]

BirdFontを使用し、実際に使用できるフォントを制作する。

[SNSでの宣伝]

Twitterで活動内容を発信し、参加者を募集する。

活動場所

中央図書館セミナー室

人数制限がされているため、参加人数が増えた場合は1H棟などの大人数で利用できる教室を使用する予定です。対面活動を中止する茨城県及び筑波大学の要請が出た場合はオンライン開催とする。



活動期間

2022/10/12～2023/03/31

対象

学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：溝口圭太（人文学類 4 年）、竹内翔一郎（人文学類 3 年）、森伸之介（人文学類 2 年）、飯田陽斗（人文学類 1 年）、鈴木花歩（人文学類 1 年）

P：池田潤（人文社会系）

備考**【感染防止対策】**

- ・対面での実施については茨城県及びつくば市、筑波大学の要請等を確認し、大学の感染症対策に応じて判断する。
- ・対面の活動を中止する要請が出た場合、企画は完全オンライン実施とする。
- ・感染防止策が徹底されているかについては、パートナー教員および T-ACT に確認する。
- ・企画を実施するかの判断については、開催 1 週間前に T-ACT と相談して決定する。
- ・前日に体調の記録確認をパートナー教員及び T-ACT に報告する。体調不良がある場合は活動を停止する。
- ・参加者は過去 2 週間以上の健康観察記録を付ける。当日は担当者が会場で記録を回収、管理する（いつでも提出できる状態にしておく）。
- ・活動の際は出入り、物品を触る前などで随時手指の消毒を行う。
- ・各自マスクを着用する。
- ・部屋の換気を行い、密集・密閉を避け、飲食を禁止する。大声を出して会話しないようにする。
- ・家を出る前に検温してもらい、体調不良者は出席しない。
- ・参加者が座る位置を、ソーシャルディスタンス (2m) を考慮して予め設定しておく。
- ・活動の以後 2 週間は体調に憂慮し、参加者に問題があれば報告してもらう。
- ・活動形態、場所、参加者、人数、内容をまとめた活動記録を作成し、担当者が管理する。
- ・その他筑波大学および T-ACT の設定した感染防止対策ガイドラインに従う。

活動報告**実際の活動内容****【毎週のミーティング】**

メンバー 3～4 人で毎週ミーティングを行った。実際に例文を作ってみながら、文法を修正したり単語を作ったりした。単語の数は 500 語を超え、簡単な文章を作れるぐらいになった。

【SNS での発信】

第 2 弾からは Twitter アカウントを開設し、活動の進捗状況などを発信した。また、単語や文字、言語の名称を決めるにあたって Twitter のアンケート機能を活用するなど、プロジェクトメンバー以外の意見も取り入れながら言語制作に取り組んだ。

【その他】

文法テキストの原稿を作成するなど、作る段階から人に見せる段階に移行するための準備をした。2023 年度にはワークショップの開催を計画している。

アルファベットを作った。また、その筆記体の試作やフォントの試作も行った。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒80%

実施中の困難と解決策**実施中に困ったこと**

言語作成のメンバーに新たに加わる人に、今までに決定している文法事項等を初めに教える必要があるが、わかりやすくまとめた資料がなかったために苦労した。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

議事録などの資料を作成するにあたって、「参加した自分たちが分かればいい」というメモ程度のものでなく、初めてみた人にもわかるよう書くことを心がけた。このプロジェクトは始まって 1 年しか経っていないが、今後でもできるだけ長く続けていきたいので、しっかりとした引き継ぎ資料の作成が重要だと実感した。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

SNSでの発信を始めたことで、外部の方の反応をたくさんもらうことができた。今回の第二弾では言語を公開する段階には至らなかったが、ワークショップなどの対外的な活動を行う次のフェーズに移行するにあたって、新たに考えなければならないことがたくさん出てきた。

春学期の第一弾を始めた当初から「筑波大生に使ってもらうための言語」という一貫したコンセプトを持ちつつも、ミーティングを重ねていくうちに初期に決めたことを修正したりすることもあった。かなり時間をかけて試行錯誤しながら1つのもの作り上げるという体験をすることができたと感じている。

ITF フリーマーケット (22016A)

T-ACT プランナー 宮崎 桜 (芸術専門学群2年)

活動目的

フリーマーケットという自由な売買交流の場を学生に提供することで、リサイクル・リユースの促進及び学園の活性化を目的とします。

フリーマーケットならではの開かれたコミュニティによる人々の交流を楽しめる空間や、数々の出展品の中から自分のお気に入りを見つける「宝探し」のようなワクワクする感覚といった魅力を広めたいです。

新生活の準備によって出てくるであろう処分予定の古着・古本、小物雑貨類など収集しやすい時期である春休み頃の開催を目標し、このことで学生側のサークル参加をしやすいように想定しました。また、自主制作を行なっている方には、年度末の集大成として作品やハンドメイド雑貨を出品してもらいたいです。



具体的な活動計画

イベント開催までの流れ：

- 11月 SNS アカウント・サークル募集ポスター制作、運営募集
- 12月 フリーマーケットに参加したい出展者を募集、イベントポスター制作
- 1月 場所の決定、テント5張使用予約（学生生活課）、その他消毒用アルコール等の物品予約（T-ACT）、再度サークル募集・イベント宣伝
- 2月 サークル募集締切、設営準備

ITF フリーマーケット開催日：

2/23（木（祝日））、予備日3/5（日）

イベント当日の流れ：

- 08時 運営メンバーによる設営準備開始、（出展者）搬入開始
- 10時 （参加者）受付開始
- 16時 （参加者）受付終了、（出展者）搬出開始、運営メンバーによる設営撤収開始
- 17時 イベント終了

※出展希望者は、備考の「ITF フリーマーケット出展要項」をよくご確認の上、参加申込みを行ってください。

※イベント参加希望者は、備考の「ITF フリーマーケット参加にあたってのお願い・注意事項等」をよくご確認の上、参加申込みを行ってください。

活動場所

運営メンバーの打合せ、事前準備：5C 棟の教室（予定）

イベント開催場所：石の広場（予定）

活動期間

2022/11/15～2023/03/19

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：橋本萌花（芸術専門学群2年）、福田瑠華（芸術専門学群2年）

P：渡和由（環境デザイン領域）

備考

【ITF フリーマーケット出展要項】

「ITF フリーマーケット」に関する禁止事項及び注意事項等です。出展希望者は、当日トラブルがないよう熟読の上お申込み・ご参加ください。

出展対象者：出展者は本学（大学院を含む）の学生、教職員、研究者のいずれかであること。

(1) 出展お申込み

本要項に同意された方のみ申込みを受付けます。ブースの又貸し等、申込者と出展者が異なる場合は、出展をお断りさせていただきます。また、虚偽の内容で申込みされていたことが発覚した場合、出展を取り消すことがあります。出展場所に関してのご希望はお受けできません。

出展者の都合によるお申込みの変更・キャンセルがあった場合は速やかにプランナーにご連絡ください。出展申込の際にご連絡頂く個人情報については、ITFフリーマーケットの出展管理・コロナウイルス感染症感染拡大防止の為に連絡時等に使用させていただきます。

ITFフリーマーケット運営からの連絡は、基本的にT-ACT企画ページ、メール、公式SNSより行います。登録した連絡先（メールアドレス等）に変更があった場合には必ずプランナーへご連絡ください。メール未着等によるトラブルについては、ITFフリーマーケット運営は一切責任を負いません。

(2) 出展に関して

搬入について：

2月23日（水）8：00～搬入作業を開始可能。参加者受付が始まる10時までに原則搬入作業を完了させてください。

搬出について：

2月23日（水）17：00までに搬出作業を完了させること。※出展の際に出たゴミは各自でお持ち帰りください。

販売禁止品目：

1. コピー商品（著作権侵害物）、商標権（キャラクター等）や著作権を侵害した作品 ※著作物については著作権所有者に確認をとった上でご使用ください。
2. 盗品や法律で禁じられている物品
3. 風船、動物、医薬品、嗜好品、飲食物（ペットフードを含む、飲食物全般）・刃物・エアガン・アダルト関連商品・金券・教科書や授業内容を書き記したノート・汚れ破損した衣類、自作の化粧品（身体に使用する石鹸・香水など）等
4. 日本での所持、販売、譲渡が法律で禁じられている物品
5. ITFフリーマーケット運営が販売に対して不適当と判断した作品
※ ITFフリーマーケット運営スタッフが会場内を巡回し出展内容の確認を行ないます。上記販売品目を見つけた場合、撤去していただきます。

禁止行為：

1. 危険物の持込及び火気・発電機の使用
2. 社会通念上不適当と思われるもの、及び法律・関係諸条例に抵触する物品の持ち込み、販売、及び行為
3. 周囲の美観を損ねたり風紀を乱す行為および他の出展者の出展の妨げとなる行為
4. 『PR』『勧誘』『布教』『契約行為』を目的とした出展
5. 偽ブランドや海賊版・コピー商品などの違法商品、盗品、危険物、生き物、飲食品全般（ITFフリーマーケット運営が認めた場合を除く）、医薬品、嗜好品の場内への持ち込み、及び販売。また射幸心をあおるくじ引き類や、掛け売り行為など
6. 学内は全面禁煙のため喫煙不可
7. ブース外でのチラシの配布および客引き
8. 会場の床面にガムテープ等を貼る行為（剥せるテープ、養生テープ等は可）
9. 拡声器の使用
10. 会場内での調理
11. 開催時間前の物品・金銭のやり取り。また会期中の場内で他の出展者から購入した物を自分の出展場所で販売すること。
12. ITFフリーマーケット運営が不適当と判断した行為
※ 禁止行為を見つけた場合、退出していただく場合があります

その他注意事項：

1. 出展品の返品や交換については出展者の責任において対応願います
2. 出展品が完売した場合には、早閉まいを認めます
3. 出展の際に出たゴミは各自でお持ち帰りください
4. 大声での呼び込みなど周辺からクレームが出ないように販売してください
5. 会場内では両替が出来ませんので、十分なつり銭をご用意ください
6. 会場内での盗難や事故に関しては、ITFフリーマーケット運営では一切の責任を負いません

7. 出展品の販売価格設定は各出展者に委ねます
8. 天災等不可効力原因（盗難・紛失・火災・地震等）による損失または損害に関して ITF フリーマーケット運営は一切責任を負いません
9. 会場内での ITF フリーマーケット運営による撮影及び録画にご協力をお願いします（写真の使用権は ITF フリーマーケット運営・T-ACT に属します）

（3）感染防止対策

- ・「T-ACT 新型コロナウイルス感染対策チェックリスト」に基づいて準備を行う
- ・基本的にイベント参加者は「事前登録制」とし、当日参加の場合は名前、2 週間前の体調不良の症状の有無、当日の体温、緊急連絡先を記入登録してもらう
- ・受付で手続きを済ませた者のみにイベント参加を許可する（受付後シールを配布し各自確認しやすい部位に貼ってもらい、手順の有無を明確にする）
- ・対面の活動を中止する要請が出た場合、企画を中止・延期する
- ・体調不良がある場合は活動を停止する
- ・オーガナイザーとプランナー、サークル参加者は、開催前 2 週間の体温測定を行い、体調の記録をする
- ・会場への出入りの際、物品を触る前などで随時手指の消毒を行うこととします
- ・会場ではマスクを着用してください
- ・ソーシャルディスタンス（2m 程度）をなるべく保ちながら活動してください
- ・密集・密閉を避け、水分補給以外の飲食を原則禁止する。参加者に対して大声を出して会話しないよう適宜注意喚起する
- ・イベント参加以後 2 週間は体調に憂慮し、参加者に体調異常等がみられる場合は ITF フリーマーケット運営に報告してください

※本要項は、「第48回筑波大学雙峰祭 一般企画用募集要項」を基に ITF フリーマーケット運営が作成したものです。本企画に参加する者は上記の条件を全て満たしている必要があります。

【ITF フリーマーケット参加にあたってのお願い・注意事項等】

「ITF フリーマーケット」に関する禁止事項及び注意事項等です。本イベントの参加希望者は、当日トラブルがないよう熟読の上お申込み・ご参加ください。

イベント参加対象者：どなたでも参加いただけます。（未成年者の参加には保護者の同意が必要です。）

（1）参加お申込み

本参加にあたってのお願い・注意事項等に同意された方のみ参加いただけます。申込の際にご連絡頂く個人情報については、ITF フリーマーケットの出展管理・コロナウイルス感染症感染拡大防止の為に連絡時等に使用させていただきます。

ITF フリーマーケット運営からの連絡は、基本的に T-ACT 企画ページ、メール、公式 SNS より行います。登録した連絡先（メールアドレス等）に変更があった場合には必ずプランナーへご連絡ください。メール未着等によるトラブルについては、ITF フリーマーケット運営は一切責任を負いません。

（2）禁止行為

1. 危険物の持込及び火気・発電機の使用
2. 社会通念上不適当と思われるもの、及び法律・関係諸条例に抵触する物品の持ち込み
3. 周囲の美観を損ねたり風紀を乱す行為および他の出展者の出展の妨げとなる行為
4. 『PR』『勧誘』『布教』『契約行為』
6. 学内は全面禁煙のため喫煙不可
7. 本イベントに関係のないチラシ配布および広報活動
8. 拡声器の使用
9. 会場内での調理
10. 開催時間前の物品・金銭のやり取り。また会期中の場内で出展者から購入した物を会場内で販売すること
11. ITF フリーマーケット運営が不適当と判断した行為
※ 禁止行為を見つけた場合、退出していただく場合があります

（3）その他注意事項：

1. 出展品の返品や交換については出展者の責任において対応致します
2. ゴミは各自でお持ち帰りください
3. 会場内では両替が出来ませんのでご注意ください

4. 会場内での盗難や事故に関しては、ITF フリーマーケット運営では一切の責任を負いません
5. 出展品の販売価格設定は各出展者に委ねておりますため、ITF フリーマーケット運営では値段交渉等の管理は致しません
6. 天災等不可抗力原因（盗難・紛失・火災・地震等）による損失または損害に関して ITF フリーマーケット運営は一切責任を負いません
7. 会場内での ITF フリーマーケット運営による撮影及び録画にご協力をお願いします（写真の使用権は ITF フリーマーケット運営・T-ACT に属します）

（４）感染防止対策

- ・基本的にイベント参加者は「事前登録制」ですが、当日参加の場合は受付にて名前、2週間前の体調不良の症状の有無、当日の体温、緊急連絡先を記入登録してください
- ・受付で手続きを済ませた者のみイベント参加を許可します（受付後シールを配布し各自確認しやすい部位に貼ってもらい、手続完了の有無を明確にする）
- ・対面活動を中止する要請が出た場合、企画を中止・延期する場合がありますのでご了承ください
- ・体調不良がある方は、本イベントへの参加をお断りさせていただきます
- ・会場への出入りの際、物品を触る前などで随時手指の消毒を行うこととします
- ・会場ではマスクを着用してください
- ・ソーシャルディスタンス（2m 程度）をなるべく保ちながら活動してください
- ・密集・密閉を避け、水分補給以外の飲食を原則禁止する。参加者は大声を出して会話しないようお願い致します

活動報告

実際の活動内容

中央図書館前「石の広場」にて筑波大学の学生を主体としたフリーマーケットを開催した。最終的には出展者35団体、来客数約300名の参加者と予想以上の規模になった。出展者と主催者で、前日に会場準備を進めた。当日は、出展者に販売場所を決定してもらい10時からイベントを開始した。コロナ対策のため、参加者には氏名、体温、連絡先を記入してもらい、受付完了の印としてシールを配布した。あとは参加者には自由にフリーマーケットを見てもらう形式にした。16時を終了時刻とし、再び出展者に協力してもらいながら搬出作業と会場撤退をした。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒90%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

会場準備の人出が足りず、大変だった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

協力してくれた出展者に効率的な動き方をアドバイスしてもらった。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

自発的に何か行動することが苦手で、今回もイベントを企画したはいいいものの、連絡や報告が遅れてしまうことがあり協力してくれた方々に迷惑をかけてしまった場面があった。

今回のフリーマーケットを通して、自身も所属する芸術専門学群の作品だけではなく、サークルや個人の自主制作作品をイベント参加者に見てもらうとこで、従来の芸術祭とは異なるコミュニティの場を設けられたのではないかと感じた。このことをきっかけとして、創作者と顧客の繋がりを広めてほしい。

参加者への影響

イベントに参加してくれた留学生の方に、「自分も来年、出展者として参加したいです」といった話をもらいこうした場の需要はまだ拡大できると感じた。

出展してくれた芸術専門学群の友達にもこのイベントについて「作品を多くの人に見てもらうことができた。」「制作活動のアピールになった。」など肯定的な意見を貰った。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

何事にもルールや拘束がつきものです。しかし、そこには何かしらの理由があり、それを理解した上で行動することが大切だと感じました。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

推進室の方々の協力がなければここまで辿り着けなかったと思います。このイベントは友達と何となく企画を提案したもので、初めは実現性は低いかなと思っていましたが無事にイベントを開催できてよかったです。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5



世界の食文化に触れてみよう会 (22022A)

T-ACT プランナー 服部 真吾 (情報学群情報メディア創成学類3年)

活動目的

筑波大学は、建学の理念にある「国内的にも国際的にも開かれた大学」として、さまざまな取り組みをおこなっている。

国内向けとして、学内に設置された各センターは共同研究を積極的に受け入れており、また外部組織との連携をおこなっているセンターも数多い。授業についても、科目等履修生制度による外から中に開かれた構造及び、法人細則に基づく、他大学等における授業科目の履修制度による中から外に開かれた構造を持っている。

海外向けについては、68カ国・地域の大学や研究機関と378協定を2022年12月22日時点で締結しており、またスチューデントサポートセンターが留学相談を親身におこなってくださるなど、中から外への充実した開かれた構造を持っている。

しかしながら、私が生活する限りは、海外向けについて外から中に向けた構造、つまりは海外の文化を学内に持ち込む構造が最も充実していると感じる。例えば、積極的な留学生の受け入れをおこなっており、全学生約15,000人に対して2000人近くの留学生が学びを深めている。そのため、筑波大学には留学生をメンバーとする団体が複数存在し、留学生と日本人学生の文化交流を主とした団体も存在している。また、文化の根幹をなす食についても充実しており、ハラルに対応した食堂が2店舗あることに加え、アフリカ料理をはじめとした、海外の郷土料理を提供するキッチンカーが頻繁に出店しており、異国の文化を理解しやすいと考えている。これらの構造により、大学内は国際性が十分に日常化し、豊かな人間性を育むに相応しい場所になっていると考えられる。

ところがこの構造で提供される異国文化は、大学などがある程度フィルタリングを行った、誰に対してもほとんど害のない文化であり、これらを吸収したところで、真の理解を獲得することは難しい。この構造を例えて言うならば、和食の紹介の際に味噌汁や御節料理を紹介し、納豆やくさや、イカの塩辛など、文化に根ざし地域性をもつが、その特徴ゆえに回避されがちな食材を紹介しない行為に等しい。このように、誰に対しても好まれる海外文化のみを吸収しては、海外文化には好き嫌いが分かれる要素がないという偏見を持つ可能性がある。また、その文化の真髄に迫りうる要素を見落とす可能性があり、真の理解を獲得することが困難となる。この状態を回避するためにさまざまな調査を行おうとするも、特徴的で回避されがちな食品は国内で入手することが難しく、他者の経験をもとにした知識を蓄えることで対応せざるをえなくなる。この対応にも問題があり、他者の意見を鵜呑みにすることで、他人の経験によるバイアスを無視したり、経験した他者の個人的な意見を忘れたりすることがある。また、他者の経験をもとに議論をしては、自己の考えを育てることができず、創造的な知性を育むことは困難になる。

そこで本活動では、スウェーデンの文化に根ざしたシュールストレミングを実食し、なぜ国外で敬遠されるこの食材が現地で食べられているのかについて考察することで、真の国際理解と多面的な視点を持つ創造的な知性の育成を始めるきっかけを提供する。また同時に、匂いの原因であるガスの成分を分析することにより、なぜ特有の匂いが発生するのかを考察する機会も提供する。

具体的な活動計画

本企画は、「ac.jp」で終わるメールアドレスを持つ方ならどなたでも参加できる。本企画にかかる経費は全て企画申請者である服部が負担するため、参加費用は無料である。

本企画は食品を扱うイベントであるため、イベントの実施について保健所に申請を行い、指導及び受理を受けている。また万が一に備え、レクリエーション保険に加入する。

参加枠には、招待枠30名と一般枠20名を設ける。招待枠のうち10名は試食者であり、残りの20名は傾嗅者である。一般枠は全て傾嗅者であり、超過した場合はそれぞれ抽選とする。

試食者はシュールストレミングを試食する方である。傾嗅とは造語であり、「相手の話を、相手の立場に立って、相手の気持ちに共感しながら理解しようとする」行為である傾聴の嗅覚版である。

招待枠は、プランナー及びオーガナイザーが、是非ともシュールストレミングを体感してほしいと招待状を送った方々であり、試食や、一般枠よりも近い距離からの傾嗅ができる。一般枠は、やや遠い位置から傾嗅をする。

招待枠については、プランナー及びオーガナイザーが個別に申し込みフォームを送信し、参加者を募る。一般枠については、本企画 Web ページに掲載したフォームを用いて参加者を募る。



控

様式1 イベント等における食品提供施設開設届 (2部提出)

2021年 1月 20日

茨城県つくば保健所長 殿

届出者 住所 氏名 服部 真吾 電話

茨城県つくば保健所 交付 5.1.20 受付

下記のとおり食品を取り扱いますので届出します。

行事名	世界の食文化に触れてみよう会
行事の主催者	服部真吾
出店名	世界の食文化に触れてみよう会
出店の目的	国際理解活動(異国の食文化について知見を得る)
出店場所	筑波大学石の広場 (茨城県つくば市天王台1-1-1)
出店期間 (時間帯で記載)	2023年 2月 19日 ~ 2023年 2月 19日 (午前) 午後 10時 00分 ~ (午後) 1時 40分
食品取扱責任者 氏名・連絡先	氏名 服部 真吾 電話
取扱食品一覧及び 施設概要一覧	別紙のとおり
提供方法	販売 ・ 無料提供 ・ その他
調理従事者総数	2 人

特記事項
本イベントにおいて調理従事者は開封のみを行う。実際の盛り付けは試食者が行い、その際に使用する道具は使いまわさず、着用するゴム手袋と合わせて一度きりの使い捨てとする。試食者は、出店場所付近にある筑波大学中央図書館において手洗いをし、テント内の手洗いタンクにおいて、調理者は手洗いをし、試食者は手指消毒を行う。

所長	次長	課長	課員
----	----	----	----

レクリエーション補償プラン お見積書
(行事参加者の傷害危険補償特約セット 普通傷害保険)

SOMPO 損保ジャパン

服部 真吾 様

令和 5 年 1 月 20 日

お見積り番号

拝啓 早速はお見積りをご高配を頂き、厚く御礼申し上げます。
さて早速ですが、保険料お見積りにつき、下記のとおりご案内致しますので、ご検討の上、ご用命願いますようお願い申し上げます。 敬具

行事(レクリエーション)

【保険項目】行事(レクリエーション)参加者の傷害危険補償特約セット 普通傷害保険

保険期間	令和 5 年 2 月 19 日 午後 10 時 00 分 ~ 令和 5 年 2 月 19 日 午後 1 時 40 分
参加人数	1 人 (1 名)
性別	男
年齢	20 歳 (1 名)
性別	男
レクリエーション項目	食卓

補償内容

傷害(死亡・高度障害)保険料	100,000 円
入院保険金(1日額)	1,000 円
手術保険金(1手術)	50,000 円
治療費(1日額)	2,000 円
通院保険金(1日額)	3,000 円
総合傷害危険補償特約	あり

行事(レクリエーション)お見積り保険料 1,000 円
※任意保険料が適用されています。

(ご注意)
本見積書は補償する金額や範囲、保険料の概要をご説明したものです。
詳細内容の詳細は、傷害保険普通保険約款、各特約により決まりますので、取扱代理店に
お問い合わせください。

本企画においては、シュールストレミングやその他食品を配布する際に利用するテント、机、使い捨て食器、消毒液、水が必要となる。テントについては学生生活課より貸与を受ける。それ以外の物品については、服部が用意し、十分に洗浄して利用する。本企画の活動は以下に示す順で行う予定である。

企画実施前

本企画はシュールストレミングを実食し、国外では敬遠されがちにもかかわらず現地で食べられている理由を考察することで、真の国際理解と多面的な視点を持つ創造的な知性の育成を始めるきっかけを提供するものであり、ただ食べる企画ではないため、シュールストレミングの歴史、現地における立ち位置などをまとめた資料を当日に配布し、参加者全員に適切な事前知識を持ってもらう。

企画実施中

本企画は、2/19(日)(雨天決行)において以下のスケジュールで行う予定である。

10:00 - 11:30 会場設営。石の広場に机、テント、立ち位置を示すテープを設置する。

11:30 - 12:00 受付。事前申し込みの通り受付を行う。

12:00 - 12:10 開封。シュールストレミングを開封する。開封時には、内圧の上昇を考慮し、参加者に物的損傷が起こらぬよう細心の注意を払う。同時に、発生するガスを測定する。

12:10 - 13:00 配布、試食。スウェーデン式に則り、フラワートルティーヤと呼ばれる薄いパンの上に、試食者自らがポテトサラダとシュールストレミングを乗せ、丸めて食べる。

13:00 - 13:10 終了宣言、解散

13:10 - 13:40 撤収。石の広場を現状復帰し撤収する。

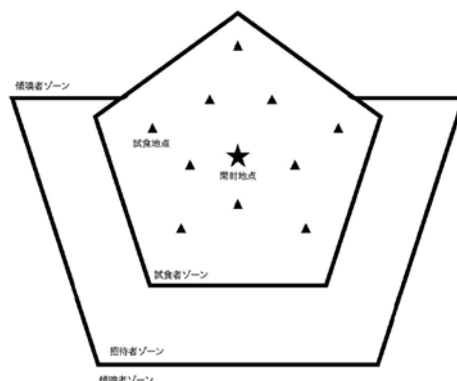
参加者全員に新型コロナウイルス対策として、前日までの二週間分の体温を Google form に入力していただくとともに、受付時に表面体温を測定する。

立ち位置の概念図は添付画像のとおりである。

ガスの測定において、シュールストレミング缶にはラップなどをかぶせ、埃が入らないよう注意を払う。

試食において、プランナーとオーガナイザーは開封のみを行い、盛り付けは試食者が行う。

廃棄物は実験系廃棄物として取り扱うよう手続きが済んでいるが、開催日である日曜日は廃棄物の受け入れを行っていないため、厳封した後服部が保管する。



企画実施後

シュールストレミングを食べた感想の言語化を行う。匂いが強烈すぎる場合を考慮し、考察と感想は後日回収する。これらは今後の企画運営、並びに本企画の効果測定に利用する。

活動場所

筑波大学 天王台地区 石の広場

シュールストレミングを味わずとも、その匂いについて独自の解釈を持つことは有意義であると考えており、多くの人間がシュールストレミングの開封に立ち会うことができ、また、シュールストレミングの特有な匂いが広がっても問題がないためである。

試食者と傾嗅者で立ち位置を分割することにより、感染症拡大防止策を図る。試食者には、十分な距離を保って立ち位置を示すテープを設置し、この上で実食していただく。傾嗅者には、試食者の周辺にテープを設置し、そのテープより後方からしていただく。概念図は添付画像の通りである。

活動期間

2023/02/01～2023/02/28

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：山崎翠香（物理学類 3 年）

P：登大遊（客員教授 国際産学連携本部）

備考

本企画は無料で参加可能である。

本企画では万が一に備え、有限会社サカタ企画が代理店を務める、損保ジャパンの保険商品である「行事（レクリエーション）参加者の傷害危険補償特約セット 普通傷害保険」に試食者のみ加入する。レクリエーション種目は会食会であり、本保険の費用についても服部が負担する。

本企画で万が一食中毒などが発生した場合、保険などを用いて補償を行うが、このことに同意を得るための申込み文書は厳密性が求められ、適切に記述できていない場合は、リスクを回避することができない。そのため、主催者個人、参加者および大学関係者のリスク回避を万全とするために、最適な開催方式、同意取得法について現在 T-ACT 顧問弁護士に相談中である。なお、リスク回避が不可能である場合は、開催を取りやめる。

偽装を防ぐため、申込は 2 段階に分けて行う。初めに、申込者は自身の「ac.jp」で終わるメールアドレスを Google form に入力する。服部は、このフォームに入力されたメールアドレスに対して、本申込フォームへのリンクを申込締切日に送信する。また申込において、申込者のメールアドレスと所属、学年、氏名を取得する。この個人情報本企画の運営及び結果の集計のみに利用し、利用後は適切に処分する。

本企画では、招待枠と一般枠の 2 枠が存在し、招待枠のうち試食者については食中毒予防の観点から十分な衛生管理を行う必要があり、傾嗅者と区別する必要がある。そのため、試食者であることが一目でわかるネックストラップを作成し、企画実施中は常に着用するよう求める。また、招待枠は一般枠と比較してより近い位置から傾嗅することができる。一般枠参加者がこの特権に対して不平を述べ、招待枠の立ち位置に侵入することで、三密を回避できる配置を崩すことが考えられる。そのため、招待枠についても、招待枠であり他と立ち位置が異なることが一目でわかるネックストラップを作成し、企画実施中は常に着用するよう求める。

本企画は食品を扱うため、以下を遵守する。

- ・保健所にイベント等における食品提供施設開設届を提出し、食品の扱いについて指導を受ける。
- ・食材の持ち込み、持ち帰りは許可せず、主催者が用意した食品のみをその場で食べる。
- ・新品かつ使い捨ての食器を利用し、食品を配布する。
- ・調理時、運搬時、配布時には、プランナーは三角巾・エプロン・マスクを着用する。
- ・フラワートルティーヤ及びポテトサラダは当日に購入し、試食直前まで十分に冷蔵する。

なお、本企画で利用するシュールストレミングは、2021/12/26に三幸貿易株式会社 (<https://store.shopping.yahoo.co.jp/happyfood/>) より購入した正規輸入品の Roda Ulven Surstromming 300g であり、消費期限は2023/2である。

保健所からの指導に基づき、試食においてプランナー及びオーガナイザは食品の開封のみを行い、それらの盛り付けは参加者が行う。参加者はまず中央図書館手洗い場を利用し手指を洗浄する。その後、匂いの付着防止のためにゴム手袋を着用する。着用後、机の上においてある使い捨て食器を利用し、同じく机の上においてあるフラワートルティーヤ、シュールストレミング、ポテトサラダを盛り付ける。プランナー及びオーガナイザは、参

加者同様に中央図書館手洗い場を利用し手指を洗浄する。その後、匂いの付着防止のためにゴム手袋を着用する。試食前に中央図書館の手洗い場を利用することについては、中央図書館利用者担当より承諾を得ている。

試食時に、シュールストレミングを解体する必要がある場合に備え、食品を配布する機のほかに、解体用の机を用意し、こちらを利用可能にする。

雙峰祭一般企画用募集要綱を参考にし、本企画では新型コロナウイルス感染拡大防止策として以下を遵守する。

- ・他者（企画者・来場者問わず）との接触を最小限にする。
- ・大声での発声を行わない。
- ・直近2週間以内の体温記録を google form より回収し、T-ACT 事務局に提出する。
- ・企画実施場所に入る前に手指消毒をする。
- ・高頻度接触部位（机・椅子等）をこまめに消毒する。
- ・トングなどの道具は使い捨てを利用する。
- ・「いばらきアマビエちゃん」を掲示し、来場者に登録を呼びかける。
- ・企画実施場所内に来場者が飲食するスペースを、十分な間隔を保って設ける。
- ・食事の黙食及び食事中以外のマスク着用を来場者に呼びかける。
- ・来場者の基本情報を申し込み時に入手する。

対面での活動が終了した際には T-ACT 推進室への報告を服部が行い、その後2週間の時点で参加者にその同居者を含めた感染の有無の確認を行う。万が一参加者に新型コロナへの感染が発生した場合、発生状況をパートナー及び T-ACT 推進室に報告する。

廃棄物に関して、本企画で発生すると予想される廃棄物（使い捨て食器、残渣、ペーパータオルなど）は、高分子凝集剤やウエスなどを用いて全て固化し、ゴミ袋に投入する際に悪臭を発するものとそうでないものに分ける。悪臭を発しないものについては、一般の可燃廃棄物として処理する。悪臭を発するものについては、環境安全管理室の指導に基づき、タッパーなどの密封できる容器や、ビニール袋に投入する。ビニール袋を利用する場合は空気をなるべく追い出し、ビニールの口は【片結び】として逆さにしても液が漏れないようにする。これら一次容器を更に厚手のビニール袋に包み、こちらも【片結び】で中身が漏れないようにする。もし、二重の梱包程度では臭いが漏れてくるようであれば、更に何回か袋に入れる、これらの処理を行い、匂いが漏れないようにした上で、実験系廃棄物として後日に実験廃棄物管理棟に搬入する。なお、搬入日までの保管は服部が行う。

活動報告

実際の活動内容

この企画では、前日準備と当日の開催の二日に渡って活動した。

前日では、学生生活課からテントを借りるなどの物品輸送、水や皿、ブルーシートなどの物品購入をおこなった。また、入門 *surströmming* と題する資料を作成し、シュールストレミングがスウェーデンの食生活に根付いていた食品であることが十分に伝わるようにした。

当日は、石の広場に集合したのちに、物品の一時保管場所から会場までの物品輸送を行なった。この際は、私一人では人手が足りなかったため、参加者のうち数名とオーガナイザに補助を依頼し、輸送を完了した。また、テントや机といった会場の切意においても参加者に協力をお願いし、全員でイベントを作り上げる形とした。

設営が完了したのちに、受付を行い、体温確認シートの提出確認並びに招待者への名札の配布を行なった。開封の際は、大学の備品であるテント及び石の広場の汚損を防ぐために、石畳上にビニールシートを敷き、この上で開封した。この地点は直射日光が当たることから、開封は素早く行い、提供いただいたガス検知管を利用して、直ちにシュールストレミングガスの構成成分を調べた。ただし、当日は風が強く、開放された環境では正しく測定できないと考えられたため、シュールストレミング液の染みたキッチンペーパーの捨てられた、ある程度ガスが滞留していると考えられるゴミ箱に対しても同様に測定した。しかしながら、二回の測定のどちらにおいても、ホルムアルデヒドやアンモニアといったガスは検出されなかった。

試食者は、任意かつ個人購入で防護服を着用し、試食前に手洗いを行って感染拡大防止に努め、机の上に置かれたシュールストレミングやその他付け合わせを、使い捨ての食器を用いてとり、試食した。

片付けの際も、設営と同様に参加者に補助をお願いし、石の広場を現状復帰した。利用した物品はほとんどが使い捨てであるが、机やバケツといった再利用可能な物品は、表面にビニール袋などを被せておいたため、これらの物品は全て、シュールストレミングの残液とまとめて適切に廃棄した。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒80%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

本イベントは、国外で敬遠されがちであるシュールストレミングが、スウェーデンで食べられている理由につ

いて考察することで、真の国際理解と多面的な視点を持つ創造的な知性の育成を始めるきっかけを提供するとともに、噂に基づく判断ではなく、自分で積極的に体験し、その経験から判断することの重要性を広めるための活動であるため、多くの人に実食していただくことが重要になる。しかしながら、飲食物を扱うイベントであるため、食中毒やそれによる訴訟リスクが問題であった。

シュールストレミングは大変な悪臭を放つため、企画終了後の廃棄物をどのように処理するか問題であった。解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

パートナー教員と相談し、主催者側の責任を最も軽減できる開催方法を民法に照らし合わせて調査し、調査結果に基づいて T-ACT の顧問弁護士と相談することで、試食者を広く募集するのではなく、訴訟リスクの低い、比較的親しい人のみに試食をしていただく開催方式を提案いただき、それを採用することで問題の解決ができた。

また、廃棄物に関する問題は、大学内の関連部署に相談したところ実験系廃棄物として取り扱うよう手続きをしていただき、専用の廃棄容器を提供いただくことで解決できた。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

今回の企画は、私自身未体験であり噂に基づいて判断してきたシュールストレミングについて、実際に体験することを目的としたものであったが、この企画の立案から実行までを通して、イベント運営並びに周囲の説得の難しさを体感した。しかし、意図をきちんと説明し共感していただければ、さまざまな大学内部署から多大なるご協力をいただくことができ、また参加者の方々も積極的に協力してくれることがわかった。これらは、授業のみでは学習できないため良い経験になったと思う。

試食できる参加者は私の知人に限っていたが、その限りでは参加者全員が、未知の体験であるシュールストレミングに対して非常に強い興味を持っており、これまで体験する機会がなかったために噂に基づいた判断をしていたとのことだったので、積極的にイベントを開催し、機会を提供することを持続すれば、さまざまな分野において理解が広がるように感じた。

参加者への影響

イベント後に行なったアンケートによれば、試食前まではシュールストレミングに対して否定的だったり、全く知らなかったりする参加者が、試食後に違う印象を持ち、噂のみならず実体験に基づいて判断することの重要性を体感してくれたようである。コロナ及びそれによるオンライン授業によって、実体験ではなく、映像を通して伝わる擬似体験に触れる期間が非常に長かったため、今回のイベントをきっかけとして、積極的に実体験を得ることの重要性や価値を再認識していただけたようで幸いである。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

『世界一臭い缶詰を大学内で開けてみたい！』と大声で叫んでいる学生に対して、円滑にイベントを開催できるようさまざまな支援をしてくれる大学組織は、日本にそれほど数がないと思います。何かやってみようことがあれば、とりあえず T-ACT 推進室に相談しに行ってみましょう！

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

T-ACT を利用してよかったと感じられるのは、物



資面と人的資源面にある。

まず物資面について、T-ACT の持つプリンタなどをお借りして、名札を作成できたことは非常に助かった。これにより、参加者に本企画を印象付けられるとともに、名札に印刷した URL より写真を素早く共有できるため、企画後の振り返りににおいて有効に活用できた。

次に人的資源面について、T-ACT を利用することで、T-ACT の顧問弁護士と相談することができ、合理的な開催方法を提案いただけたのは有り難かった。また、T-ACT の審査委員の先生方から企画について指摘をいただけることも非常によかった。この指摘により、本企画にたりない要素を補うことができ、本企画の充実度を高めることができた。推進室の方々も、非常に不規則なタイミングで訪問する私に対して暖かく迎え入れてくださるとともに、本企画への助言をたくさんしていただき、私個人ではなし得ないレベルの企画を運営する補助をしていただき、T-ACT を利用してよかったと感じている。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒4



令和4年度茨城県警察大学生サポーター募集について (21009V)

受入団体名：茨城県警察本部生活安全部人身安全少年課少年サポートセンター (13005G)

活動内容

- 4月11日 大学生サポーター－委嘱式・研修会、街頭補導活動
- 6月15日 県立石岡第一高等学校での非行防止教室補助
- 11月20日 立直り支援活動
- 12月 警察広報アンケート
- 2月22日 ひたちなか市立市毛小学校薬物乱用防止教室（体験型）補助

活動場所一覧

- ・街頭補導～主に水戸、つくば、土浦市内
- ・非行防止教室等～県内の小、中、高校等
- ・立ち直り支援活動～県内の農場、スポーツ施設、当センター等
- ・キャンペーン～主に水戸、つくば市内

活動期間

2022/4/1 ～ 2023/3/31

参加学生

T-ACT ボランティア：1人

活動報告

●受入団体担当者

非行防止教室では、ネット社会との向き合い方を中心に、SNSの利用や文字だけのコミュニケーションの注意点などを、話していただきました。薬物乱用防止教室では、10代に大麻が蔓延している社会事情や、1回で命を落としてしまう危険性があることなど小学生の目線に合わせて丁寧な口調で説明してもらいました。

立直り支援活動では、水戸市内の農場において、問題を抱えた少年とともに、ジャガイモの収穫を行いました。

同年代の大学生が少年との共同作業を通して、生物育成の面白さと生長を見守る楽しさを体感することができたのではないのでしょうか。少年の家族からは感謝の言葉をいただきました。

年間を通し、積極的な活動をしていただいています。ありがとうございました。

●学生参加者：本間 伸太郎（生物資源科学学位プログラム 1年）

活動の成果

非行少年の立ち直り支援活動（農業体験）や学校での非行防止教室・薬物乱用防止教室の補助を行った。回を重ねるごとに少年たちと打ち解け、趣味や夢を語ってくれるようになった。非行防止のためには、子ども自身が大切にされているという実感や、存在を無条件に肯定する他者や居場所が必要だと強く実感した。将来、教員になった際には生徒一人ひとりがお互いの存在を認め合えるようなホームルームづくりを目指したいと思った。

今後の課題

コロナ禍で昨年度はあまり活動に参加できなかったが、今年は活動の機会が多くあるので、継続的に活動を重ねていきたい。少年たちとの親交をより深め、学校における非行防止教育の経験を積み、将来の子どもたちの健全育成に役立てたい。

茨城県警察大学生サポーター

募集!!



大学生サポーターを募集します。
警察と一緒に活動してみませんか!!



Recruitment of interpreter translation support in high school

結城市内の高校で通訳・翻訳サポート（ウルドゥー語等）募集！（22001V）

受入団体名：認定特定非営利活動法人茨城 NPO センター commons (16003G)

活動内容

（活動内容）

- ・ Contents: Interpretation at high school in Yuki city, translation of related documents, interview support with students, etc.
- ・ Target language: Urdu, Tagalog (Nepali, Thai, Sinhala may also be available)
* Conversational level of Japanese and ability to interpret in each language
- ・ Frequency: Interpretation is basically once a week, and translation is as needed.
- ・ Time: Weekdays 12:00-5:00pm
- ・ Reward: Paid (Unit price varies depending on the content. It will be decided after consultation with the person in charge of the group.)

- ・ 内容 : 結城市内の高校での通訳、関係書類の翻訳、生徒との面談サポート等
- ・ 対象言語：ウルドゥー語・タガログ語（ネパール語・タイ語・シンハラ語も可）
※日常会話程度の日本語⇄各言語で通訳可能なレベル
- ・ 頻度 : 通訳は基本的に週 1 回、翻訳は随時。
- ・ 時間帯 : 平日 12:00～17:00
- ・ 報酬 : 有償（内容により単価は異なります。団体担当者と相談の上決定します。）

（活動場所）

The activity location varies as follows depending on the support content. ※ For interpreter support
※ You will go to a high school in Yuki City and participate in interpreter support activities. (The name of the high school where you are active will be given only to volunteer participants.)
We can pick you up by car, but please consult us about the location.

※ For translation support ※

Can be at home (online support). You need to prepare your own personal computer and internet usage environment.

サポート内容により活動場所が以下の通り異なります。

＜通訳サポートの場合＞

結城市内の高校に赴き、通訳サポート活動へ参加していただきます。

（活動先の高校名は、ボランティア参加者のみにお伝えします。）

※車での送迎可能、場所は要相談

＜翻訳サポートの場合＞

在宅（オンラインでのサポート）可能。パソコン、インターネット使用環境等をご自身でご用意いただく必要があります。

活動期間

2022/4/1 ～ 2023/3/31

参加学生

T-ACT ボランティア：3 人

活動報告

●受入団体担当者

茨城県内の高校にて、生徒と先生間の母語通訳、学校説明会時に家族への通訳のサポートや、高校生との交流をして頂きました。普段は出会う事のない、年齢の近い様々な留学生と交流したり、母語で会話する事により、生徒自身も家族の方も安心し、楽しんでいる様子が伺えました。是非また定期的に交流して頂きたいと思っています。

●学生参加者：NGUYEN Thi Thuy Linh（人文社会ビジネス科学学術院人文社会科学研究群（博士前期課程）
人文学学位プログラム 1年）

活動の成果

I have been interpreter in Yuki First High School for a Thai student who had difficulties to communicate with Japanese teachers. I could talk to him in his mother tongue to understand his situation then reported the necessary information to school's teachers so that they would assist with appropriate aids. Through the conversation, teachers understood the student better and the student felt more confident in his language skill. I hope that I will have more chance to participate to this kind of project.



茨城県のひきこもり支援を盛り上げよう (22002V)

受入団体名：一般社団法人アイネット (18007G)

活動内容

【活動内容】

1. センター支援員同伴による不登校児童生徒宅への訪問支援
2. ひきこもりの方の居場所活動の手伝い、参加
3. 学習支援のサポート（オンラインによるサポートも可能）
4. 不登校、ひきこもり問題の周知活動（講演会、研修会）への協力

※活動開始前に、事前研修を行います。また活動は、当センターの職員の指導の下で実施します。コロナ禍で対面談、対面支援等が困難な場合には、オンラインを活用した活動を実施しています。（学習支援に関しては、オンラインでの参加も可能）

【活動場所】

- ・茨城県ひきこもり相談支援センター（筑西市）
- ・しもだて地域交流センターアルテリオ（筑西市）
- ・不登校生徒児童の自宅（茨城県各地）
- ・miniPlus フリースクール（筑西市）
- ・茨城県各地（講演会、研修会）

活動期間

2022/4/13 ~ 2023/3/31

参加学生

T-ACT ボランティア：1人

活動報告

●受入団体担当者

ひきこもりの居場所活動に参加。ひきこもりの方に対して、変にかまえることなく、違和感なく、一緒にボードゲームをしてくれた。ひきこもりの講演会の受講。参加者の気持ちを理解してもらった。親の会への参加。今後同行訪問するご家庭の感じを肌感化での理解をもらった。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

一般社団法人アイネットのボランティア活動に参加し正直なところ、最初は自分には難しいのではないかと感じました。ニート、ひきこもり、不登校、非行といった課題に立ち向かうことは、複雑で深刻な問題だと思ったためです。ですが、その一方で活動を通じて多くの気づきがありました。アイネットでの活動を通して、当事者の方々をより身近に感じ、1人ひとりに合わせた関わり方「あせらない、あわてない、あきらめない」の大切さを深く感じました。



つくばサイエンスツアー 工作実験教室と科学館見学のサポートスタッフ募集 (22004V)

受入団体名：つくばサイエンスツアーオフィス 一般財団法人茨城県科学技術振興財団 (13002G)

活動内容

【開催日】11/23 (水・祝)、12/25 (日)、1/22 (日) 予定

【内容】☆11/23 (祝) 午前：光のオブジェ オンリーワンディスプレイを作ろう！

午後：つくばサイエンスツアーバスを利用し、「地質標本館 (産総研)」「JAXA 筑波宇宙センター」を見学

☆詳細はこちら https://www.i-step.org/tour/news/news_i807_u1.html

☆12/25 (日) 午前：牛乳パックで紙すきしおりを作ろう！

午後：つくばサイエンスツアーバスを利用し、「地質標本館 (産総研)」「JAXA 筑波宇宙センター」を見学

☆1/22 (日) 午前：光るスライムを作りその仕組みを考えよう

午後：つくばサイエンスツアーバスを利用し、「地図と測量の科学館」「筑波実験植物園」予定

活動期間

2022/4/1 ~ 2023/3/31

参加学生

T-ACT ボランティア：6人 (延べ人数)

活動報告

●受入団体担当者

月1回開催している工作実験講座と科学館見学イベントのサポートスタッフとして筑波大学生の皆さんに参加していただきました。準備や参加者の実験補助、見学時の引率などを担当してもらいました。皆さんが自主的に行動してくださり、イベント運営もスムーズに進み、感謝しております。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

ボランティア活動を通して科学のおもしろさ・楽しさを子供たちに伝える機会を得ることができました。子供たちとの交流を通じて、自身の知識も深まったと感じます。子供たちが笑顔で実験や展示物に興味を持っている姿を間近に見ることで、自身も楽しみながら参加することができました。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

「つくばサイエンスツアー」の活動は子供たちにとってもボランティア参加者にとっても楽しい学びの場であると思います。普段の学生生活では得られない貴重な経験をさせていただきました。



筑波山麓秋祭り2022 矢中の杜「秋の特別公開」イベントスタッフ募集 (22008V)

受入団体名：特定非営利活動法人“矢中の杜”の守り人 (16008G)

活動内容

1、屏風絵などの設置、会場設営

10月23日（日）10時から14時くらいまで邸宅に保管されている屏風絵などを設置し、会場設営をするともに、簡単な掃除を行います。

2、「秋の特別公開」期間中のイベントスタッフ

10月29日（土）～11月20日（日）の土日、および11月3日（木）

各日10時から16時、のイベント当日の運営。

スタッフとして受付や会場案内などを行う簡単な作業です。周辺では「山麓秋祭り」に引き続き「駅からハイキング」などのイベントも開催予定で、期間中は北条の町に多くの方が訪れると期待されます。来場の方やイベントを行う皆さんと協力して楽しいイベントにしていきたいです！

期間中どこか1日だけでも大丈夫です。スタッフの人数等により公開日が変わることもありますので、事前にお問い合わせいただくか、会期前の邸宅公開日にふらっと遊びに来てみてください。

3、その他

通年で活動を行っています。

- ・邸宅公開の実施
- ・邸宅活用イベントの企画や準備
- ・庭園の整備 など

活動期間

2022/10/23～2023/3/31

参加学生

T-ACT ボランティア：4人

活動報告

●受入団体担当者

矢中の杜の通常の邸宅公開や秋の特別公開のスタッフとして、公開準備から受付、ガイド、掃除や庭の手入れ作業まで一般のボランティアスタッフと一緒に活動していただきました。また、SNSによる広報活動には主導的に関わっていただき、新しい発信方法を開拓していただいています。大変積極的に参加していただいており、現在では主要メンバーとしてなくてはならない存在でとても頼りにしています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

●学生参加者：森根瑞喜（社会学類 3年）

活動の成果

つくば市北条にある旧矢中邸の保存維持活用を行う NPO 法人「矢中の杜の守り人」で公式ボランティアガイドとして活動した。訪れる人々に矢中邸の価値を伝えると同時に、北条商店街全体の活性化に繋がることを目的とし、地域の魅力を合わせて発信することを心掛けた。また、矢中の杜は文部科学省より重要文化財に指定されることが正式に発表された。

今後の課題

来訪者のほとんどが中年層・高齢層のため、若年層の割合を増加させたいということが学生ボランティア全体としての認識である。本年も割合的に大幅な変化は見られなかったが、イベント時などに情報を届けた若年層が訪れることが多くなった印象を受けた。継続して若い人々にも魅力を伝えていきたい。



NPO 法人チャリティーサンタつくば支部 ボランティア募集 (22010V)

受入団体名：NPO 法人チャリティーサンタつくば支部 (18005G)

活動内容

- ◎12月24日に向けての準備
 - ・保護者、ボランティア、本部との連絡
 - ・ボランティアへの説明やサンタ講習会の開催など
 - ・11月からは、だいたい2週間に1回のペースでスタッフミーティングを実施

◎12月24日

- ・子どもたちに笑顔を届けるボランティア

◎12月24日～3月まで

- ・活動報告会、反省会の実施
- ・12月以降はだいたい月1回のペースでスタッフミーティングを実施

活動場所一覧

- ・街頭補導～主に水戸、つくば、土浦市内
- ・非行防止教室等～県内の小、中、高校等
- ・立ち直り支援活動～県内の農場、スポーツ施設、当センター等
- ・キャンペーン～主に水戸、つくば市内

- ★現時点での運営メンバー全員が、仕事・学校・アルバイトなどを大切にしながら、このボランティア活動に取り組んでいます！自分のペースで参加できるボランティアなので、初めてのボランティアにもぴったりです！
- ★普段は中々関わることが出来ない人たちとのつながりが出来るのも、この活動の素晴らしさです。
- ★運営メンバーの中には筑波大学の学生もいるので、相談もお待ちしています！一緒に素敵なクリスマスをご過ごしませんか？

活動期間

2022/11/1 ～ 2023/3/31

参加学生

T-ACT ボランティア：5人

活動報告

●受入団体担当者

筑波大生の倉掛さんは、運営スタッフ副代表としてつくば支部を纏めてくれました。ご家庭からの依頼や当日ボランティアの担当割りなど、積極的に進めていってくれました。他の大学生の方々は、イブ当日のボランティア希望であり、当日ボランティアする為に必要なサンタ説明会・講習会とクリスマスイブ当日と一緒に活動しましたが、他の参加者と楽しく関わっているようでした。また、皆さん訪問ご家庭から帰宅した時にイキイキとした表情をしていたのが印象的でした。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

サンタクロースのボランティア活動という、とても楽しくめずらしい経験をさせていただきました。筑波大学生の方も何名か参加していたところも参加のきっかけになりました。これから子どもたちにとって素敵なクリスマスになるように、一緒に活動を盛り上げることができたらいいと思います。



【学習支援ボランティア募集！】貧しい子どもたちのための無料塾 (21003V)

受入団体名：特定非営利活動法人居場所サポートクラブロベ (16006G)

活動内容

【内容】

ボランティアさんには担当の児童・生徒についていただき、学習計画及び目標にそって学習指導を行っていただきます。小学生は主にドリルの採点、中学生は強化科目の指導をお願いしています。

また、子供達の学習指導経過については、ロベスタッフとボランティアさんの間で振り返りミーティングや研修等を行い、チーム一丸となって子供達の「安心できる学習環境づくり」に取り組んでいきます。

【対象】小学生・中学生・高校生

【日時】毎週土曜日、10時～12時が基本的な活動時間になります。

【活動場所】万博記念公園駅前教室（つくばエクスプレスでつくば駅から2駅）また、それ以外の場所にて活動をする場合もございます。基本的にはつくば市内での活動となります。

【その他】

子供が成長していくところが一番うれしくて面白いところです。成績面でも、人間としても。また、ボランティアさんは、大学生も多数おります！他にも高校生や社会人、主婦の方、シニアの方といろいろな人がいます。そんなこの活動がなければ普段関われない人とも関われるのが、みなさんにとって大きな財産になると思います。また、実際に活動する際のイメージですが、細かな指示があるというよりは、みなさまひとりひとりの生徒への接し方を尊重します。ある程度は自由にできると思います。勉強はもちろんやるのですが、必ず〇〇ページ進めさせましょうというようなプログラムはないです。あくまで生徒たちが学ぶ喜びに気付いてもらうのが目標です！興味本位からでもよいのでぜひお問い合わせくださいね！

活動期間

2021/4/12～2022/3/31

参加学生

T-ACT ボランティア：4人

活動報告

●受入団体担当者

無料塾はボランティアの方々の大きな貢献で成り立っており、学生の皆さんの参加には心から感謝しております。皆さんには熱心に取り組んで頂き、直接の学習支援のみならず子どもたちとのよいコミュニケーションも取って頂きました。子ども達の成長のみならず、学生の皆さんも長く続けて頂いた方々は、人間的にも大きく成長し、ご自分の目指す進路に到達、合格できた先輩方々も沢山おられます。引き続き、子ども達の成長をともに感じられ、ボランティアで参加して良かったと思えるような無料塾を運営して行きたいと考えています。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

中学生を対象とした学習支援を行った。活動の中で、子ども達がひたむきに学習に取り組む姿や成績が向上して喜ぶ姿に立ち会うことができ、私自身も大きなやりがいを感じる事ができた。

今後の課題

学習そのものに対する興味・関心を引きだしたり、子ども達の望む進路を実現したりするためには、効果的な問い掛けや声掛けを行っていくことが必要だと感じた。子ども達と関係性を築きつつ、今後の活動で模索していきたいと思う。



2022 年度 実施状況報告

つくばアクションプロジェクト（以下、T-ACT）は、学生が自らの関心に基づく多種多様な自発的活動を、新たな人間関係を構築しながら実行するよう促進することで、学生の人間力を育成する筑波大学の人間力育成事業である（図1）。その始まりは、2008年度に文部科学省の「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援GP）」に採択された事業「共創的コミュニティ形成による学生支援—学生・教職員が一体となった新たな自主的活動の創生—」にある。学生支援GPが終了後も、筑波大学の人間力育成支援事業の一環として続けられている。

T-ACTには、学生が企画立案し展開するT-ACTアクション、教職員が企画立案し展開するT-ACTプラン、地域活動団体が実施する社会貢献活動に学生が自発的参加をするT-ACTボランティア（2012年度から開始）の3種類の活動がある。

T-ACTが支援する諸活動は、学生・教職員・地域による共創的コミュニティをベースに、半年以下の単発的・短期的活動であるため、アクティブな流動性をもつことを特徴としている。学生はそれらの活動を通して、様々な活動へ積極に加わる参加力、経験からより豊富な気持ちや教訓を感じ取る体験力、他者と関わり協調するコミュニケーション力、人をまとめ率いる統率力、ビジョンを具現化し創造する企画力といった「人間力」を養うことになり、自主性と社会性を備え、将来社会を担う人材として成長することができると期待されている。2018年度からは、T-ACTアクションの支援対象として、ビジネスにつながりうる活動も含めるようになった。すなわち、プレ的なビジネス体験を支援し、ビジネスに関するノウハウを体感しつつ、さらに発展的な支援につなげるという機能も担いつつある。

本報告では2022年度のT-ACTの支援活動についてのデータをまとめる。なお、データは2023年3月までにT-ACT推進室で把握できたものに限られる。その中でも過去10年分のデータを示すこととする。データの出自である学生からの活動報告等の資料は、提出されるタイミングが様々であるため、これまでの活動の全てが本報告の執筆時点で出揃っているわけではない。したがって、本報告のデータは今後更新されることがある。

1. T-ACTで申請された企画等の状況

2022年度のT-ACTアクション・プランの企画申請数は44件（アクション38件、プラン6件）であり、そのうち23件（アクション17件、プラン6件）が承認された（図2）。また、2022年度までの累積承認企画数は965件となった。2022年度に申請された企画における、プランナーは44名（重複者を除く実数は38名）であり、そのうち教職員のプランナーは4名であった（図3）。なお、プランナー数がアクション・プラン企画申請数と同数ではあるが、前年度に申請された企画が次年度に承認される等によって、当該年度の申請企画として認められる企画は異なる。学生オーガナイザーは102名（実数は95名）、教職員パートナーは35名（実数は31名）であった（図4、図5）。T-ACTボランティアに登録されている団体数は24件であり、登録団体から申請され、募集が承認されたボランティア企画は13件であった（図6）。T-ACTボランティアに参加した筑波大学生の実数は144名であった（図7）。

2022年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、2021年度に引き続き全学的に課外活動が制限さ

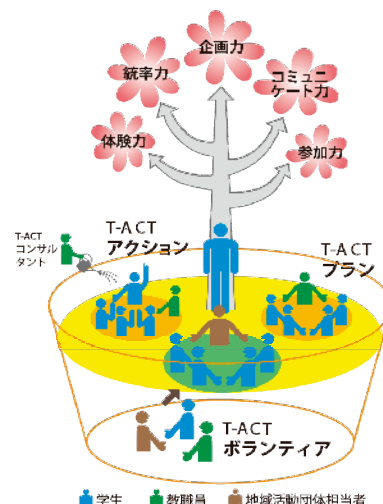


図1 共創的コミュニティ形によるT-ACTの展開と学生の成長

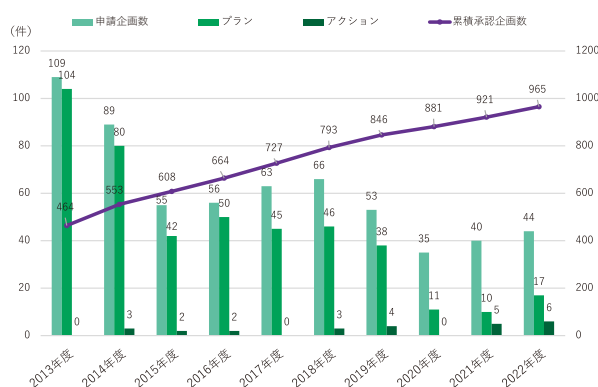


図2 アクション・プランの企画承認数の変遷

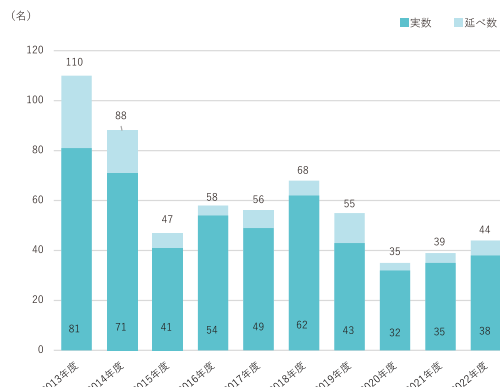


図3 プランナー数の変遷

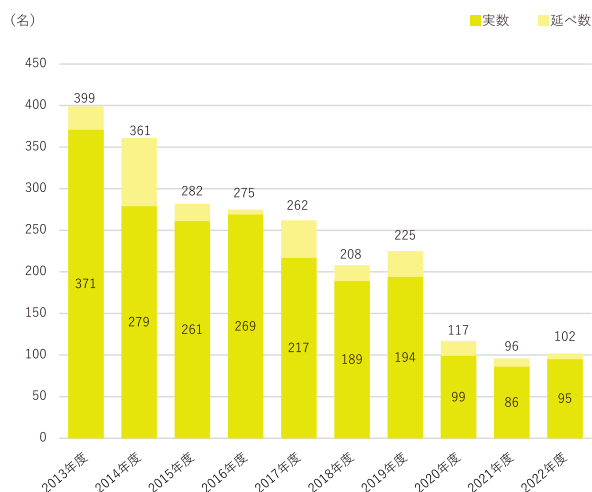


図4 学生オーガナイザー数の変遷

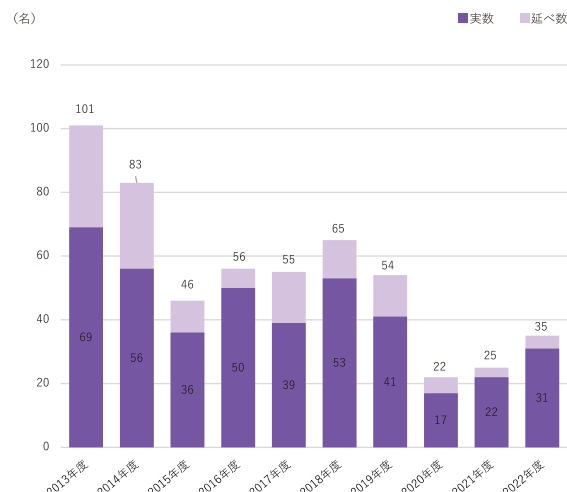


図5 教職員パートナー数の変遷

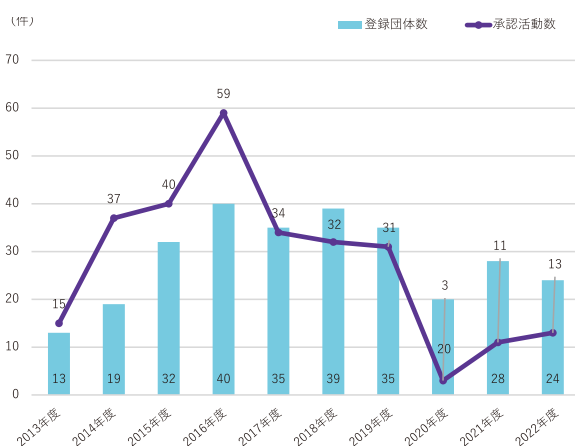


図6 T-ACT ボランティアの登録団体数と承認活動数の変遷

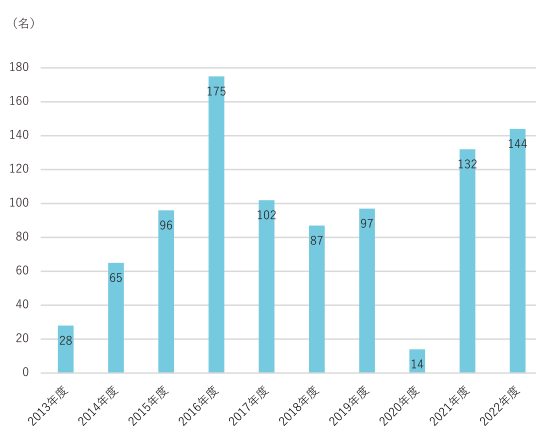


図7 T-ACT ボランティアに参加した学生数の変遷

れている状態が継続されていたが、2022年度下半期より対面での授業が増えるなど制限が緩和されたことで、企画申請数も多少増加された。しかし、T-ACTにおける各種の活動は課外活動の一環であることから、全学的な制限の中での活動となったため、2021年度と同様に全ての活動において例年を大きく下回る企画数・参加者数となった。

T-ACT アクション・プランにおいては、昨年度より継続されていた全学的な課外活動への制限が緩和された傾向により、感染予防対策を万全としたうえで対面での面談や外出を伴う活動を認める体制に徐々に取り戻された。年度の前期では月ごとに感染状況に伴う課外活動の方針のため、オンライン上での活動及びオンラインと対面での活動を併用したハイブリットな活動の形態を用いた活動がなされたが、感染対策を守りながら対面で実施された企画も半数近く見られた。対面で実施された企画は、プランナーとT-ACT フォーラムとの間で感染予防のために活動内容及び会場の大きさの確認等の想定されるリスクを防ぐために慎重な判断が求められる一年であった。対面で行われた授業がひと段落した年度の終わりに向かうにつれ、T-ACT フォーラムの来室者も増え、さらに対面での実施及び学内外での交流を求める多種多様な活動企画の相談も増えたことで、企画申請数の回復にもつながったと考えられる。T-ACT 新型コロナウイルス感染対策チェックリストに基づき、企画承認のために考慮しなければならない事項は前年度と変わらないが、既に実施済みのハイブリット企画にならうことが可能であるため承認までの困難さが増えたとは言えないだろう。そのため、承認数は回復に向かっていると考えられる。

T-ACT ボランティアは、2021年度に引き続き新型コロナウイルス感染拡大の影響を大きく受けた。長期にわたり全学的に課外活動の制限されている状態が継続され、学外での地域の人々との共同作業が前提となるボランティア活動の実施が困難であり、このことはT-ACT ボランティアの登録団体数、承認活動数に影響を及ぼしたと考えられる。T-ACT ボランティア登録団体においては、オンラインを活用した活動形態を取り入れる等の取組みや、感染症対策を徹底する等の対応が引き続き求められた。T-ACT ボランティアでは、T-ACT アクション・プランとは異なり、まずは主催側である地域団体において実施の可否が検討されるが、先述の対策を講じてもそもそもの利用者数の減少が響いたことにより、いくつかの地域団体においては活動を縮小せざるを得ない状況であった。一方、こういった状況下であっても複数の新たな地域団体がT-ACTへ団体登録し、そのボランティア

活動に学生が参加した。活動事例の一つとして、地域の貧困家庭の子どもに無料で食事を提供することも食堂事業がある。昨年度に実施された本学主催の食料支援事業にて地域市民・企業から食料を受け取った学生がボランティアとして本事業に参加し、相互扶助の関係を築くことができた。2022年度のボランティア参加学生の傾向として、一部の団体が複数の活動の募集を行い、その活動に参加した学生が他の活動にも参加するといった、横断的・継続的にボランティア活動に関わる傾向がみられた。このことは、参加学生数からも読み取れる。このように学生が一つの団体に多様な活動を通じて継続的に活動することによって、団体との間により深い信頼関係を築くことが期待できる。

2023年度においては、新型コロナウイルス感染防止のための制限緩和に続き、5月より制限廃止となったため、T-ACTの活動は対面で実施されることが増えるだろう。活動の内容によっては、オンラインでの活動ならではの良さは引き続き活かして、活動形態に幅を持って多くの参加者を巻き込みながら展開されていくと思われる。ICT環境を上手く活かし、T-ACTアクション・プラン・ボランティア、それぞれの特性に合わせて、学生の活動できる機会をどのように増加させていくかを検討することは、今後の発展のための課題であると言える。

2. T-ACT フォーラムの利用状況

T-ACT フォーラム来室者数の変遷を図8に示した。2022年度は前年度に続き新型コロナウイルス感染防止のために、Webシステムを用いた遠隔相談による体制を残して行うと同時に、2021年度後期から再開させた対面での面談を行った。実際に来室した者と遠隔相談を行った者とを合わせて、利用者数として計上した。2022年度の延べ利用者数は359名であり、実利用者数は225名であった。また、来室者（学生、教職員、地域団体からの来客など）の来室目的の割合を図9に示した。T-ACTアクションの新規申請に関する相談などの利用（A新規）が33%、T-ACTアクションの運営のための相談や作業といった利用（A継続）が40%、T-ACTプランの利用（P新規・P継続）が0.5%、T-ACTボランティアに関する学生からの相談（V学生）が5%、T-ACTボランティアに関する地域団体からの相談（V団体）が3%、総合科目に関する利用（授業）が2%、その他の理由による学生の利用（その他（学生））が15%、その他の理由による教職員の利用（その他（教職員））が2%であった。

T-ACT各種活動への申請数や参加者数と同様に、T-ACTフォーラムへの来室者数も昨年度に続き例年に比較して減少傾向が維持された。新型コロナウイルス感染予防のために、T-ACTフォーラムへの来室制限が続いていたことが大きな理由であると言える。来室者数の減少傾向やT-ACT活動の制限によって、利用目的の割合にも変化が見られたと考えられる。特にオンライン上での活動やできる範囲を模索する余地が多かった、T-ACTアクションに関する遠隔相談も一定の数が見られた。遠隔相談の活用は、利用者の増加という観点から考えると今後も必須であるだろう。また、ある一定の数があったことは、T-ACTが今後も有効に活用されうる証左になると考えられるが、遠隔相談だけでは代替できない支援もT-ACTには多い。たとえば、物品の貸し出しや印刷機の使用などは、T-ACTフォーラムに来室することが前提となる。学生との相談の中では、こういったT-ACTフォーラムに来室して受けることのできる支援を受けられなくなったことが、具体的な困難として挙がるが多かった。また、2019年度以前は、T-ACTフォーラムに来室することで、T-ACTのスタッフや学生同士の交流も生まれ、そこから新たな人間関係や活動の充実につながることもあった。こういったT-ACTフォーラムで人と交流できるからこそ得られる支援や機会を喪失していることは、学生の体験にとって痛手であると考えられる。2022年度の後半より感染予防対策の緩和に伴ってT-ACTフォーラムに来室する学生や対面での相談が増加している傾向がみられ、学生同士の自然な交流が生まれている。今後は、感染予防を念頭に置きつつも、対面で交流するからこそその効果を取り戻せるよう心掛けるとともに遠隔相談も活用し、T-ACTフォーラムへのアクセスしやすさを高められるよう検討する必要がある。

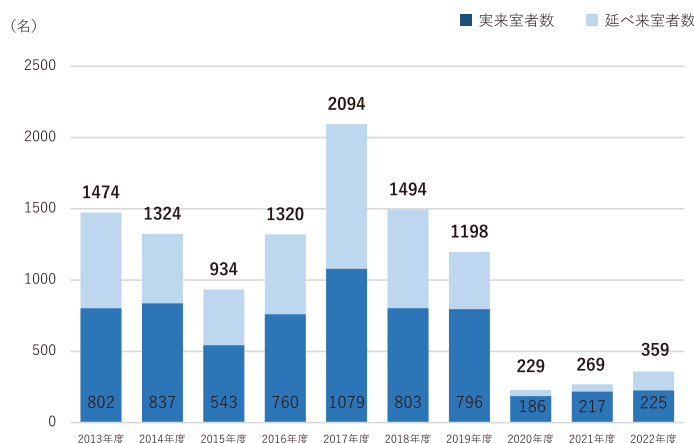


図8 T-ACT フォーラム来室者数の変遷

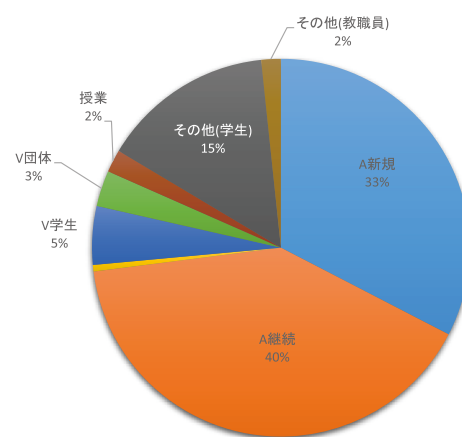


図9 T-ACT フォーラム利用目的

3. T-ACT による人間力の成長

T-ACT フォーラムでは、T-ACT アクション・プランの利用者の活動終了後の人間力の成長に関する調査を、Web アンケートで行っている。参加力、体験力、コミュニケーション力、統率力、企画力の5つを人間力の指標として想定し、それに代えて体験を通じた自己理解の深まりについて、それぞれを測定する質問項目を定めている（表1）。

調査対象は T-ACT アクション・プランの活動を終えた学生もしくは教職員であった。活動中に表1の質問項目をどの程度感じたかを4件法で尋ねた。2022年度の調査対象はプランナー15名からの回答しか得られなかったため、各人間力の成長をまとめた図表のみ示す（表2・図10）。

全体の回答状況を見ると、「とても当てはまる」「少し当てはまる」と回答した割合は76～100%であり、T-ACT への参加によって人間力の成長や自己理解の深まりを得られる学生が多いことを示している。T-ACT による人間力の成長の変化については、例年の傾向からオーガナイザーとしての参加よりもプランナーとしての参加の方が、人間力の成長や自己理解の深まりを得られている傾向があることから、2022年度のプランナーのみの回答結果からも各項目ともに高い数値が見られている。プランナーといった、企画においてより重要な役割にいる学生の方が、総合的に見て豊かな体験ができることは、体験型の学習機会を提供している T-ACT ならではの特徴であると言える。各人間力を見てみると、より高次の力であると定義されている統率力、企画力といった能力の方が、多少達成が難しい傾向にあることも想定通りの結果である。このような

表1 人間力を測定する項目

参加力：積極的に活動に取り組む力
活動の実現に向けて自分なりに努力できた 活動に積極的に関わることができた 活動の実行に貢献することができた 活動にできるだけ多く参加できた 互いに協力し合いながら、活動を進めることができた
体験力：活動の中で感じとり考える力
活動を通して、新しいまたは忘れていた自分の長所に気づくことができた 活動を通して、自分の改善すべき点を知ることができた 活動を通して、喜怒哀楽を感じることができた 活動を通して、なんらかの新しい発想を得ることができた いろいろな出来事を見聞きできた 活動に参加して、いろいろと考えさせられる体験ができた
コミュニケーション力：他者と関わる力
他のメンバーに対して自分の意見を伝えることができた 他のメンバーと積極的に関わることができた 自分の気持ちを伝えることができた 他のメンバーの意見に耳を傾けることができた
統率力：メンバーをまとめる力
他のメンバーに対して公平に接することができた 孤立したメンバーがいなくどうか注意を払うことができた 指示を出し、効率よくメンバーを動かすことができた 活動の目的、あるいは目標を達成させることができた リーダーシップを発揮することができた
企画力：創造し計画し実現する力
活動に関して様々なアイデアを発想することができた 活動を実現するために適切な計画を立てられた 活動を実現する際に生じる課題点を予測しておくことができた ある程度計画通りに活動を遂行できた 活動に関係する情報を多く集めることができた
その他
自分について考えさせられる体験ができた

表2 2022年度におけるプランナーの T-ACT 参加時の成長と自己理解の深まり

	参加力	体験力	コミュニケーション力	統率力	企画力	自己理解の深まり
とても当てはまる	75%	74%	65%	55%	47%	100%
少し当てはまる	19%	21%	35%	25%	29%	0%
あまり当てはまらない	7%	4%	0%	17%	24%	0%
全く当てはまらない	0%	0%	0%	3%	0%	0%
全体	100%	100%	100%	100%	100%	100%

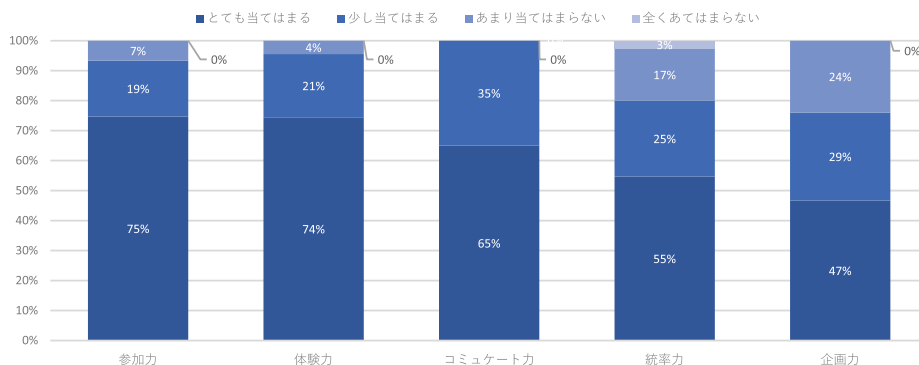


図10 T-ACT 参加時のプランナーの成長

高次の人間力においても、T-ACTに参加して役割をステップアップしていくことで、徐々に達成できるようになると言えるだろう。こういった結果は、毎年の活動報告で確認できるのでご参照いただきたい。今年度においては、新型コロナウイルス感染拡大の影響による活動制限が続いていたが、例年通りに各人間力の発揮が見られた。したがって、活動する機会さえあれば、多くの学生が人間力の成長や自己理解の深まりが得られることが、改めて示されたと言えよう。

4. 公開シンポジウムの開催

T-ACT 推進室は、学生のさらなる活動の発展と地域参画を促進するため、筑波大学内外に向けて学生の活動と T-ACT の成果を発信し、意見交換や交流による関連組織との連携を図るイベントを開催している。それが公開シンポジウムと活動報告会である。特に公開シンポジウムにおいては、上記の目的の他にも T-ACT の支援体制を振り返り、今後の支援のあり方を考えるという目的も含まれる。2022年度は新型コロナウイルス感染予防の観点から、オンラインによる実施を行い、登壇者のみ会場に集まっていたくハイブリッド形式で開催した。

○開催概要

日時：2022年12月19日（金）14:30～17:00

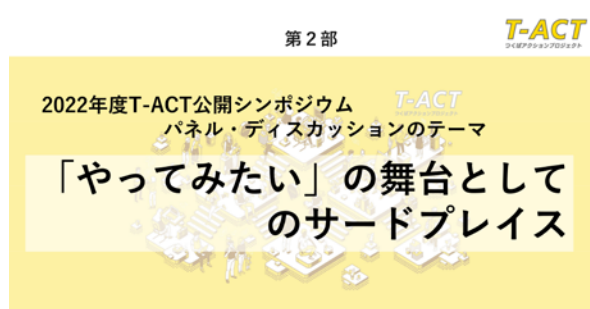
場所：Zoom を用いたオンライン形式での開催

○当日の様子

2022年度の公開シンポジウムは「ウィズコロナ時代における T-ACT ― サードプレイスと学生支援 ―」というテーマのもとで開催した。本学大学生および教職員、広く一般の来場者などあわせて計61名が参加した。

太田圭副学長（学生担当）の挨拶後、第1部では T-ACT 副室長より T-ACT 制度について紹介がされた。その後、T-ACT 前コンサルタントであり聖徳大学講師の田中圭氏により『サードプレイスにおける浅い人間関係の実効』をご講演いただいた。そして、スターバックス コーヒー ジャパン株式会社の筑波大学中央図書館店ストアマネージャーの杉渕広美氏による講演『人々の日常に潤いを与えるビジョン』では、中央図書館店の目指すサードプレイスとしての在り方や、スターバックスの MISSION & VALUES という概念についてご紹介いただいた。最後に、認定 NPO 法人茨城 NPO センター・コモンズ 代表理事であり、T-ACT 推進室オブザーバーの横田能洋氏による講演『多様性が交わる場としての「えんがわハウス」』では、えんがわハウスの取り組みである“安心できる地域・居場所づくりの実例”についてご紹介いただいた。

第2部では、『「やってみたい」の舞台としてのサードプレイス』と題し、パネルディスカッションが行われた。パネリストに田中圭氏、杉渕広美氏、横田能洋氏をお招きし、学生と本推進室員も交えて、いかに人々の間に心温まる交流を生み出せるかをはじめ、新しい生活様式に向けた学生同士及び学生と社会とのつながりの創出の重要性について幅広い議論が行われた。ポストコロナにおいては、新しい生活様式への転換が求められているとともに、従来の枠組みに捕らわれない柔軟な対応が重要である。企業や地域団体との交流を通じて場の機能と役割に関する知見を共有するとともに、サードプレイスとしての T-ACT の機能について考えを深めることができたシンポジウムとなった。



ポストコロナにおいては、大学が学生の活動をエンパワーするような支援が必要であるとともに、学生同士が支え合い、活性化し合うという視点がより重要であるだろう。本公開シンポジウムを機に、学生支援に関する知見を共有し、学生の持つ自発性の意義について考えを深めることができた場となった。

5. 活動報告会および企画表彰

2022年度の活動報告会は、活動数の減少を鑑み2021年度下半期から2022年度上半期に行われた活動を対象に実施されたⁱ。新入生歓迎会をかねた T-ACT Welcome Fest 2022は、バーチャルスペースサービスである oVice 上で開催した。参加者は筑波大学生16名、本学教職員25名、学外参加者28名の計69名であった。

2021年度を中心に活動を行った T-ACT アクション（学生中心の活動）5件と、T-ACT プラン（教職員中心の活動）1件及び T-ACT ボランティア（地域団体中心の活動）4件の計10件の活動報告が行われた。新型コロナウイルス感染拡大による様々な影響を受け、活動制限が続いている中での活動であったが、そういった状況下でも自分たちのできる活動を考え、「やってみたい」活動に取り組んだ報告がなされた。様々な困難がある中で、うまく実現できた部分だけでなく、理想的にはできなかった部分も含め、自らの経験として生かす学生の姿が伝わる会となった。コロナ禍で人との接触が少なく、または小規模で身近なところで可能な活動として、自らボランティア活動を企画立案して行ったアクション活動、そしてコロナ禍で孤立しやすい環境にいる人々への支援として行われたボランティア活動の発表が印象的であった。また、「T-ACT しゃべり場」では、oVice ならではの気軽な交流ができる仕組みを活かし、各トークテーマに基づいて、ファシリテーターの教員と学生を中心とした参加者間で積極的な議論・交流がなされた。

昨年度に引き続き今年度も、例年行っていた、T-ACT アクション・プランへの表彰（活動奨励を目的に、参加者の人間力をより高めたと評価される企画への賞の授与）は行わなかった。代わりにこのような困難な状況下で T-ACT アクション・プラン・ボランティアにおいて活動をした全ての学生に対して、その取組を称えることとした。そのため、活動に参加した学生のうち、希望する学生に対して、T-ACT 推進室からの表彰を行った。あわせて学生の「やってみたい」実現のために尽力いただいた本学教職員や地域団体に対し、感謝の意を表する賞及び感謝状も贈呈した。これらの表彰や感謝状の贈呈については、表3～5にまとめて示す。

ⁱ 2022年度下半期に行われた活動は、2023年度6月に開催した活動報告会でも一部の企画発表を行ったが、次年度報告書で報告・掲載とする。

表 3 2022年度に表彰された企画

	承認番号	企画名
T-ACT 推進室表彰	21004A	筑波大学かぶき曾
T-ACT 推進室表彰	21015A	筑波大学かぶき曾 第二場（だいにば） TSUKUBA DAIGAKU KABUKI-KAI DAINIBA ～ The 2nd scene ～

表 4 2022年度に表彰されたボランティア参加者

T-ACT 推進室長表彰	21002V	「矢中の杜（旧矢中邸）」の保存活用 参加学生 1 名
T-ACT 推進室長表彰	21008V	【第 4 回】食糧支援ボランティア募集！ T-PIRC 新米等 Food Pantry: 参加学生 1 名
T-ACT 推進室長表彰	21011V	【第 5 回】食糧支援ボランティア募集！ Food Pantry:Volunteer Recruitment 参加学生 2 名

表 5 2022年度グッド・パートナー賞・ボランティア感謝状

グッド・パートナー賞	大林 太郎（体育系）	20009A BLUE ONE BEAT！～ SDGs をもっと身近に～
ボランティア感謝状	NPO 法人 “矢中の杜” の守り人	21002V 「矢中の杜（旧矢中邸）」の保存活用
ボランティア感謝状	一般社団法人 アイネット	21004V 茨城県のひきこもり支援を盛り上げよう

編集後記

新型コロナウイルス感染症の感染予防のため、大学生活においても活動制限が続いていましたが、学内における活動制限が緩和されていくにつれて T-ACT 利用者数や相談件数も増えはじめた 2022 年度でした。コンサルタントが常駐していない状況下で T-ACT 推進室員の皆様のご協力のおかげで、何とか学生のニーズに合わせた支援を行うことができたのではないかと思います。

2023 年 1 月より着任し、T-ACT という筑波大学独自の学生支援プログラムを学ばせていただきながら学生対応を始めましたが、学生たちの「やってみたい」ことを真剣に語る姿は支援する側からもわくわくさせてくれました。コロナ禍により活動制限があった中でも、自分の「やってみたい」という思いで積極的に取り組んで進めていく姿から、T-ACT の本質を実感しました。具体的な活動内容は、コロナ禍でより疎外されやすい社会的な弱者に対する支援や地域社会との交流を目的とした企画や、ひとつのことに對して仲間と一緒に探求しながら学びを深める企画など、今の状況だからこそできることを見つけて取り組んでいることから、学生たちの柔軟さを感じました。活動制限が緩和され対面で行うイベントの企画も再開されましたが、交流の機会を求めているニーズの高さを実感しました。また、ビジネスに向けての試験的な活動として T-ACT を活用したいというニーズが増えていますが、残念ながら承認とならなかった企画も複数見られました。ビジネスに向けての体験の場として活用できるよう T-ACT からの支援体制を整えていくことは、今後の課題となると思います。学生主体の活動を通して人間力の育成を図る本事業は、次世代に向けて求められている力を身に付ける場として、学生が自分の「やってみたい」を生かした体験から人間力を高めていくことができるようサポートしていきたいと思います。そのためには、より利用しやすく、尚且つアクセスしやすくする努力が必要であり、新たな生活様式を取り入れ ICT を活用した支援体制を整えていくことを進めさせていただきたいと思います。

T-ACT コンサルタント

李 健實

2022 年度の活動も引き続きコロナ禍での活動となり、参加学生と地域団体の皆様にとっても大変な年であったと思います。ですが、そんな中でも地域団体からボランティア活動への参加機会をいただいたこと、また、多くの学生がその活動に参加してくださったことに感謝しています。

実施された活動の中には、小学生から高校生を対象とした学習・居場所サポート活動等の魅力的な活動が多く、参加学生から活動の様子や感想をうかがう度に、私自身も学びがあり元気をいただきました。

また、特筆したい活動例として地域の子ども食堂事業があります。昨年度行われた本学主催の食料支援事業にて、地域市民・企業から食料を受け取った学生がボランティアとして参加しました。「参加学生は、受け取ったものを返したいという気持ちで活動に加わってくれている」と団体担当者からお話を伺いました。こういった相互扶助の関係を築き、地域社会と学生がより密接に関わりながら課題解決に取り組む活動事例は少しずつではありますが確実に増加傾向にあります。

T-ACT の目標とする学生の人間力の育成、その中の 1 つにはボランティア活動から得られることが期待される「市民力」の育成がありますが、先述した活動事例のような「学生と地域市民が協同して課題解決に取り組む『プロジェクト型ボランティア活動』」のニーズの高まりと共に、双方の懸け橋の役割を担う T-ACT の推進力を強く求められていると感じます。学生と地域の両方向からの協力が必要不可欠なこの取り組みは、実行までのハードルが高い面もありますが、互いの良い面を活かしつつ実行までの道のりをサポートできるよう努めて参りたいと改めて思います。

最後に、いつも広い心で学生を受け入れてくださっている地域団体の皆様に深く御礼申し上げます。引き続き T-ACT が皆様にとっての拠点や時には居場所として、そして“やってみたい”を実行する出発地点であることを目指し邁進して参ります。

T-ACT ボランティアアドバイザー

木田江里華

2022 年度 T-ACT 推進室員一覧

	所 属			職 名
室長	加賀	信広	人文社会系	教授
副室長	杉江	征	人間系	教授
室員	松崎	寛	人文社会系	准教授
	茅根	由佳	人文社会系	助教
	小林	幹佳	生命環境系	准教授
	中内	靖	システム情報系	教授
	後藤	嘉宏	図書館情報メディア系	教授
	村田	知弥	医学医療系	助教
	大林	太郎	体育系	助教
	川島	史也	芸術系	助教
	水野	雅之	人間系	准教授
	青柳	悦子	人文社会系	教授
	土井	裕人	人文社会系	助教
	唐木	清志	人間系	教授
	慶野	遥香	人間系	助教
	田中	博	計算科学研究センター	教授
	鷹巣	明美	学生生活課	課長

2023 年度 T-ACT 推進室員一覧

	所 属			職 名
室長	加賀	信広	人文社会系	教授
副室長	杉江	征	人間系	教授
室員	江口	真規	人文社会系	助教
	茅根	由佳	人文社会系	助教
	小林	幹佳	生命環境系	准教授
	中内	靖	システム情報系	教授
	後藤	嘉宏	図書館情報メディア系	教授
	村田	知弥	医学医療系	助教
	大林	太郎	体育系	助教
	川島	史也	芸術系	助教
	水野	雅之	人間系	准教授
	青柳	悦子	人文社会系	教授
	土井	裕人	人文社会系	助教
	唐木	清志	人間系	教授
	慶野	遥香	人間系	助教
	李	健實	学生生活支援室	助教 T-ACT 専任教員
	鷹巣	明美	学生生活課	課長

つくばアクションプロジェクト活動報告書

2023 年 11 月発行

筑波大学 T-ACT 推進室
〒305-8577 つくば市天王台 1-1-1
TEL 029 (853) 2269/2222

T-ACT 活動報告書

